

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第130集

寝屋川市

# 寝屋東遺跡Ⅱ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

# 序 文

寝屋東遺跡は、これまで古墳時代から中世の集落跡と周知されていましたが、当センターが行った平成14年度の調査で飛鳥時代の集落が発見され、当該時期における遺跡の実態が明らかとなりました。

本調査は、飛鳥時代の建物跡が発見された14年度調査区の南側と西側を対象として行いました。その結果、南側調査区の丘陵部は中世以降の耕作地開発に伴い地形が大きく改変されたことがわかりました。飛鳥時代の建物はこの開発により削られたためか発見されず、残念ながら南側の集落の広がりを明らかにすることはできませんでした。しかし、埋没した小規模な谷地形を調査することができ、地層の観察や遺物の出土状況などから、飛鳥時代にも谷部を集落の一部として有効利用していることや中世以降の耕地開発の過程が把握されました。一方、西側調査区では、飛鳥時代の建物跡が発見され、集落がさらに広範囲に展開することが確認されました。

今回の調査により、当地域における飛鳥時代以降の土地開発の状況が解明されたことは大きな成果と言えます。

また、平成13年度以降、当センターでは第二京阪道路建設に先立つ発掘調査を本格的に行っています。この調査により寝屋川市から交野市域にかけて展開する周辺遺跡に状況も明らかにされつつあり、今後の調査の進捗により寝屋東遺跡の飛鳥時代集落の歴史的な位置づけがより鮮明となると期待されます。

最後になりましたが、調査にあたってご助力・ご協力いただきました関係諸機関・地元関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2005年3月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好

# 例 言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地の内、大阪府寝屋川市寝屋に所在する寝屋東遺跡03-1・03-2の発掘調査報告書である。
2. 調査は、第二京阪道路（大阪北道路）寝屋東遺跡発掘調査（その3）として、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所からの委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府文化財センターが実施した。委託契約期間は平成15年4月1日から平成16年3月31日で、平成15年5月14日から平成16年3月19日まで調査を行い、引き続き整理事業を開始し、平成17年3月31日、本書刊行をもって完了した。
3. 本調査に係る体制は次のとおりである。

調査部長 玉井 功  
調整課長 赤木克祝  
調整係長 森屋直樹  
京阪調査事務所長 渡邊昌宏  
調査第三係長 岡戸哲紀  
京阪調査事務所主査 上野貞子 [写真]  
同調査第三係主査 平田 泰  
同調査第三係専門調査員 青柳佳奈
4. 現地での発掘調査は、京阪調査事務所長渡邊昌宏、同調査第三係長岡戸哲紀の指導の下、同調査第三係主査平田 泰、同調査第三係専門調査員青柳佳奈があたった。  
整理事業は、京阪調査事務所長渡邊昌宏、同調査第一係長宮野淳一の指導の下、同調査第一係主査平田 泰、同調査第一係専門調査員青柳佳奈があたった。
5. 調査における全景、及び遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物の撮影・焼付けは京阪調査事務所主査上野貞子が行った。
6. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、以下の方々の参加・協力を得た。記して感謝の意を表する。  
中川寿美、松田直子、松尾圭太、吉田将教、安田康志、松浦暢久、出口陽子、丹生真里、松尾久子、尾崎展之、辻井和子、波岸初美、奥平廣子（順不同）
7. 自然科学分析については、花粉化石分析、珪藻化石分析、植物珪酸体分析を株式会社古環境研究所に委託し、その結果を本書に掲載した。
8. 本書の編集は平田が行い、第3章第3節を青柳が執筆し、第4章を株式会社古環境研究所が、  
他を平田が執筆した。
9. 本調査に関わる遺物・写真・実測図等は財団法人大阪府文化財センターで保管している。広く利用されることを希望する。

# 凡 例

1. 平面図及び断面図に示した標高は、東京湾平均海水位（T.P.）を使用し、単位はメートルである。
2. 発掘調査及び本書で使用した座標は、平面直角座標第Ⅵ座標系に則る世界測地系（測地成果2000）に準拠し、単位はメートルで表記している。地形図、遺構実測図に付した方位はすべて座標北を示している。
3. 調査区の地区割りと本書の作成は財団法人大阪府文化財センターの定めた「遺跡調査基本マニュアル」暫定版（2003年8月）に基づいている。地区割りの第Ⅰ区画はJ7、第Ⅱ区画は5である。
4. 土色の表記は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2003年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修の最新版を参考にした。
5. 遺構番号は、本線地区の調査区では遺構の種類に関係なく通し番号を付与した。寝屋4号線地区は調査区が分かれるものの、各調査区を通した、遺構の種類に関係のない、通しの番号を付与した。遺構は対象により、適宜縮尺を変えて掲載し、各図にスケールと縮尺率を表示している。本書中の遺物図はすべて4分の1の縮尺で掲載し、スケールを表示した。

# 目 次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査の経緯と調査方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	3
第2章 位置と環境	4
第3章 調査成果	6
第1節 基本層序	6
第2節 本線地区の遺構	7
第3節 寝屋4号線地区の遺構	11
第4節 出土遺物	14
第4章 自然科学による分析	25
第5章 まとめ	46

# 挿 図 目 次

図1 調査地位置図	1
図2 調査区配置図	2
図3 地区割概念図	3
図4 調査遺跡と周辺の遺跡	4
図5 基本層序柱状図	6
図6 本線地区平面実測図	8
図7 本線地区1谷断面実測図	9
図8 寝屋4号線地区平面実測図1	11
図9 寝屋4号線地区平面実測図2	12
図10 寝屋4号線地区建物実測図	13
図11 出土遺物実測図1	14
図12 出土遺物実測図2	16
図13 出土遺物実測図3	17
図14 出土遺物実測図4	19
図15 出土遺物実測図5	21
図16 出土遺物実測図6	23
図17 出土遺物実測図7	24
図18 2トレンチ東壁における花粉ダイアグラム	29

図19	7トレンチ西壁における花粉ダイアグラム	30
図20	2トレンチ東壁における主要珪藻ダイアグラム	36
図21	7トレンチ西壁における主要珪藻ダイアグラム	37
図22	2トレンチ東壁における植物珪酸体分析結果	43
図23	7トレンチ西壁における植物珪酸体分析結果	44

## 表 目 次

表 1	花粉分析結果	28
表 2	珪藻分析結果	35
表 3	植物珪酸体分析結果	42
表 4	遺物一覧表	47

## 写 真 目 次

写真 1	花粉	31
写真 2	珪藻	38
写真 3	植物珪酸体 (プラント・オパール)	45

## 図 版 目 次

図版 1	遺構	1. 本線地区東半全景 1 (北東から) 2. 本線地区東半全景 2 (東から)
図版 2	遺構	1. 本線地区西半全景 1 (北から) 2. 本線地区西半全景 2 (北東から)
図版 3	遺構	1. 本線地区 1 谷土層堆積状況 (北西から) 2. 本線地区 1 谷土層堆積状況 (北から)
図版 4	遺構	1. 本線地区西半北部遺構配置状況 (南東から) 2. 本線地区西半南部遺構配置状況 (東から)
図版 5	遺構	1. 寝屋 4 号線地区 1 区全景 (北西から) 2. 寝屋 4 号線地区 2 区全景 (南東から)
図版 6	遺構	1. 寝屋 4 号線地区 3 区全景 (北西から) 2. 寝屋 4 号線地区 4 区東半全景 (南東から)
図版 7	遺構	1. 寝屋 4 号線地区 4 区西半全景 (南東から) 2. 寝屋 4 号線地区 5 区西半全景 (南東から)
図版 8	遺構	1. 寝屋 4 号線地区 5 区東半全景 (南東から) 2. 寝屋 4 号線地区建物 2 検出状況 (南から)

- 图版9 遺物 1. 图11  
2. 图11·图12
- 图版10 遺物 1. 图13  
2. 图13
- 图版11 遺物 1. 图13  
2. 图14
- 图版12 遺物 1. 图15  
2. 图15
- 图版13 遺物 1. 图15  
2. 图16
- 图版14 遺物 1. 图16·图17  
2. 图17
- 图版15 遺物 图11·图12·图13
- 图版16 遺物 图13·图15·图16·图17





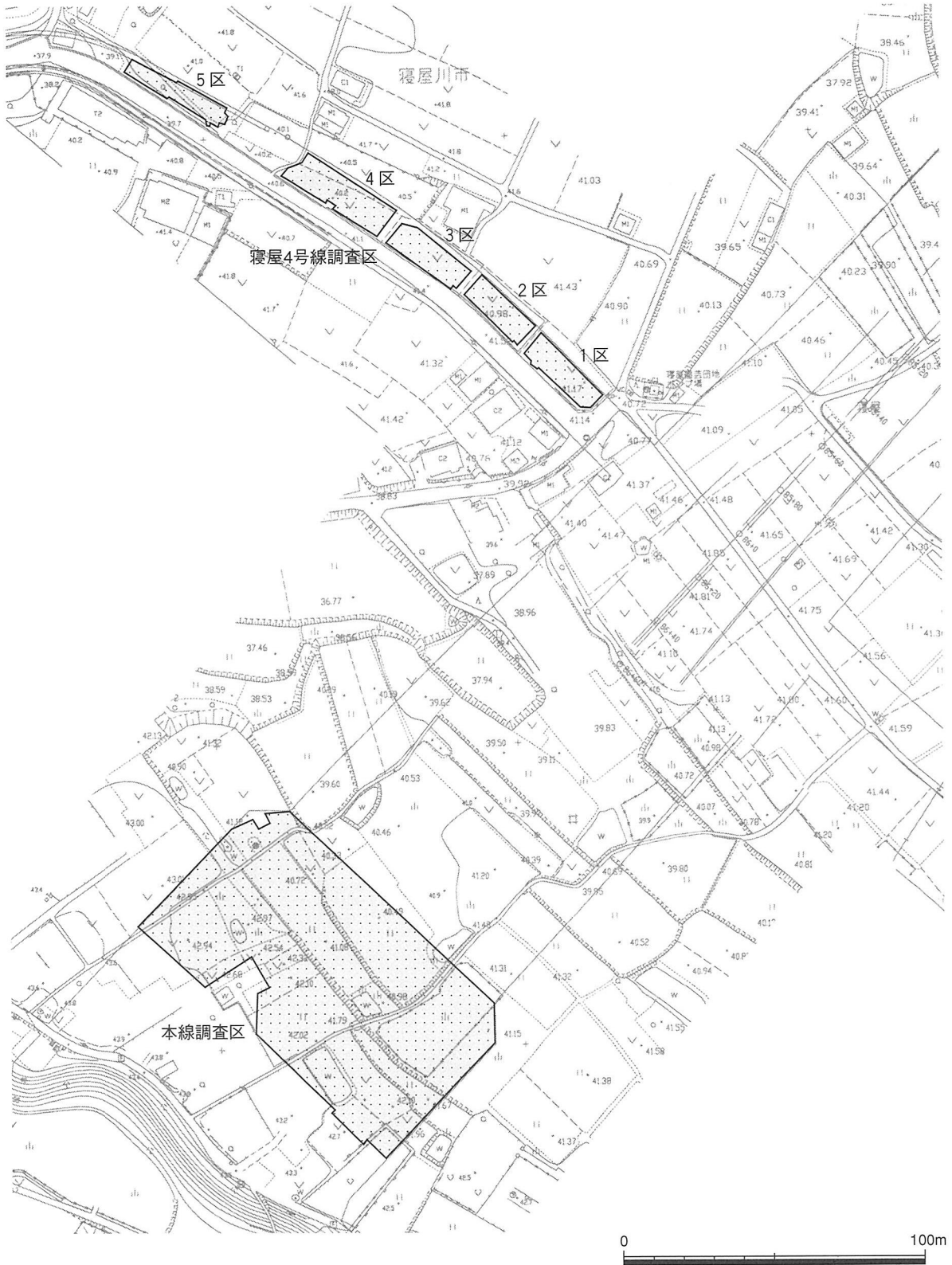


図2 調査区配置図 (1 : 2,000)

## 第2節 調査の方法

本線地区（寝屋東遺跡03-1）の調査地周辺は、宅地、畑、水田などが混在し、山根街道にも近接することから、里道・農道の通行利用が予測された。このため、里道を調査区外縁へ付け替える工事と通行者の安全確保を目的に、調査区の周囲を万能堀とB型バリケード（一部）で囲った。また、調査中の残土を調査区外に搬出する必要が生じ、残土仮置き場所の確保と搬出路の設置作業から開始した。

調査は、調査区の東半から開始し、終了後に西半の調査を実施した。掘削にあたっては近・現代の耕作土及び盛土を、重機を使用して除去し、以下から地山である遺構検出面までを人力によって掘削し、遺構・遺物の確認を行った。

寝屋4号線地区（寝屋東遺跡03-2）の調査区は、市道寝屋4号線に沿った畑地で、里道や排水側溝により5地区に分断されている。また、調査中の残土仮置き場所の確保が困難であったことから、2区、4区、5-2区の調査を先行して実施し、隣接調査区に残土を仮置きした。上記地区の調査終了と埋め戻し後に、残りの1区、3区、5-1区の調査を実施した。調査中は里道の通行を確保し、調査地周辺はトラロープで囲い、部分的にB型バリケードで囲うなどの安全策を講じた。また調査にあたっては、調査区のすべてが市道に面していたため、歩行者と車両の通行の安全確保に留意した。

遺構と検出面の測量・実測は世界測地系に基づいた平面直角座標系（平成14年度国土交通省告示第9号）を基に実施した。測量はヘリコプターによる航空写真測量に拠り、図化は50分の1の縮尺で行った。個別の遺構・遺物の平面実測、断面実測は100分の1、50分の1、20分の1、10分の1などの図化目的に応じた縮尺を設定して実施した。遺物は10m間隔で区切った方形区画毎に、地点、層位、遺構、日付を明示して取り上げ、登録番号を付した。

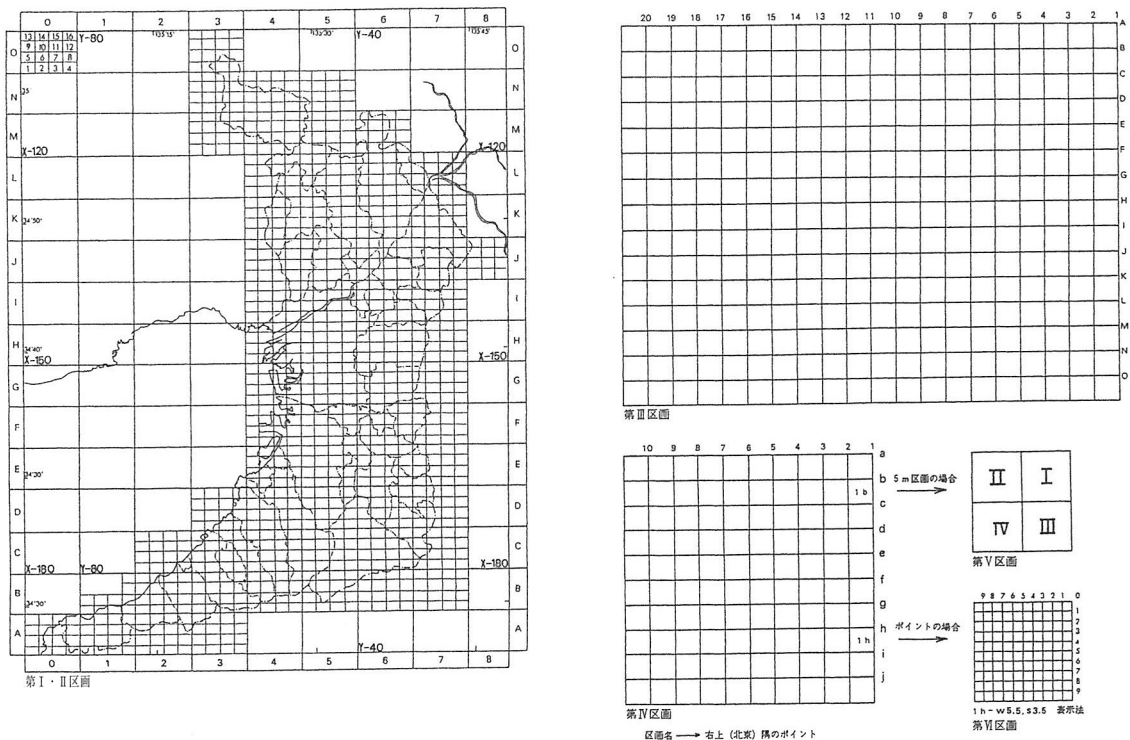


図3 地区割概念図



は、北東部が天の川方向になだらかに傾斜しており、南西部が大阪平野の低地部に向かって開け、旧河内潟から摂津方面が一望できる位置を占めている。枚方丘陵に接する丘陵地北側は、東西に枚方撓曲が走り、これに沿って寝屋川が西流、北谷川、たち川、打上川が合流する。南側は生駒山地の裾部で限られ、西流する讃良川が、南流に方向を変えた寝屋川に合流している。この丘陵地は、上記河川の開析作用を受けて、複雑に入り込んだ谷と微高地が形成されている。寝屋東遺跡は、この寝屋川水系と天の川水系を分ける丘陵の分水嶺上に立地している。

これらの谷と微高地の一带では、旧石器時代の人々が活動した痕跡が見出される。サヌカイト製の国府型ナイフ形石器が、伝寝屋長者屋敷跡遺跡、太秦遺跡、丘陵地西縁に位置する高宮遺跡で採集されている。縄文時代には、高宮遺跡で土坑などが検出され、北白川下層式、大歳山式土器が出土、縄文前期の遺跡と確認されている。また讃良川遺跡では、貯蔵穴と多量の船元式土器が出土し、縄文時代中期から後期の遺跡とみられている。伝寝屋長者屋敷跡遺跡では凹基無茎式の石鏃が出土しているが、土器が出土しないため、詳細な時期比定は行われていない。

弥生時代前期～中期には、寝屋川が西流から南流に移る左岸で高宮八丁遺跡、長保寺遺跡が確認されている。弥生時代中期以降には太秦遺跡が出現する。標高40～50mの丘陵上に立地し、西方に河内潟を見通せる位置にある。平成12年以降に周知となった大尾遺跡は同時期のものとみられ、多数の方形周溝墓群が、舌状に張り出した台地上に検出されている。弥生時代後期には北谷川とたち川が合流する地区の丘陵地に寝屋遺跡と池の瀬遺跡が成立している。池の瀬遺跡は北谷側右岸に、寝屋遺跡はたち川右岸の台地に立地する。寝屋谷の隘路を扼す位置に立地している。

古墳時代後期から飛鳥時代には、高宮八丁遺跡、長保寺遺跡が再び集落遺跡として成立する。飛鳥時代には、高宮遺跡で大型の建物跡が確認され、豪族の居館跡ともみられている。またこの丘陵や太秦古墳群では、古墳時代中期～後期の古墳群が展開する。平成12年度の調査では円墳1基、方墳12基などが調査されている。また太秦高塚古墳、寝屋古墳、奥山1号墳、打上古墳群などの巨大な石材が使用された古墳も造営されている。

飛鳥時代～奈良時代には、太秦廃寺、高宮廃寺、讃良廃寺などの氏族の寺院が創建され、寺院の周辺や、丘陵の微高地上に集落が営まれている。高宮遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、太秦北遺跡、打上遺跡、国守遺跡などがこれにあたっている。

#### ＜文献＞

- |                           |  |
|---------------------------|--|
| 寝屋川市 昭和41年（1966）          | 『寝屋川市誌』  |
| 大阪府教育委員会 昭和52年（1977）      | 『大阪府文化財分布図』  |
| 寝屋川市史編纂委員会 平成11年（1999）    | 『寝屋川市史』 第1巻 考古資料編Ⅰ   |
| (財)大阪府文化財センター 平成15年（2003） | 『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』 |
|                           | (財)大阪府文化財センター調査報告書 第93集  |
| (財)大阪府文化財センター 平成15年（2003） | 『讃良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡』   |
|                           | (財)大阪府文化財センター調査報告書 第101集   |

# 第3章 調査成果

## 第1節 基本層序

本線地区の土層堆積状況の確認は、主として調査区中央南北断面の観察を通じて実施した。調査地では、北東から南西に走る谷地形が北東部に確認され、南西部は緩斜面の丘陵がせり上がり、調査区西南端で丘陵頂部を形成する。丘陵頂部のすぐ南側は、たち川の旧流路による開析谷となり、急峻な崖面を形成している。

丘陵部は削平が進み、耕作土あるいは表土を除去した時点で、段丘形成層である地山が確認できる。谷に向かって傾斜する緩斜面には丘陵頂部から流入した地山風化土層、中世の遺物を含む遺物包含層、近世の造成土層の堆積が確認できる。中世の遺物包含層には、土壌化と攪拌痕跡がみられ、中世以降の耕作土層とみられている。近世の堆積土は、丘陵斜面の高所を削平し、低所に盛土を行い平坦地を造成した結果に由来する。低所部は中世の遺物包含層で覆われるが、高所部は削平が深く、地山が直接表土下に検出される。したがって、谷際の堆積は、地山風化土、中世の遺物包含層、近世の造成土が重なって

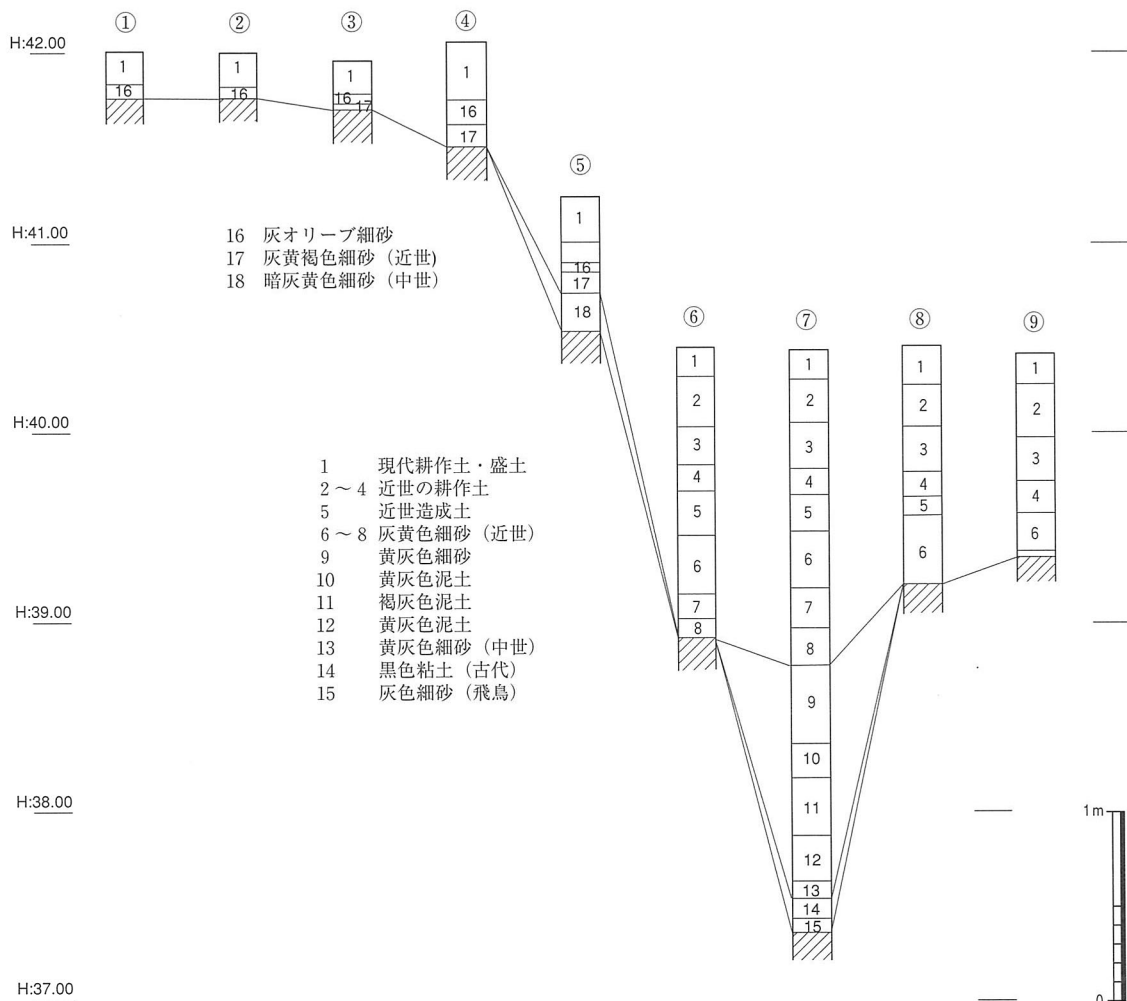


図5 基本層序柱状図 (1 : 40)

堆積する状況を観察することができる。

谷部の堆積では、底部に、流水の活発な時期の砂礫層の堆積がみられ、その上面に水の供給が途絶え始めた時期の泥土層の堆積がみられる。泥土層の上部は土壌化しており、湿地状の沼沢地化した時期が長期にわたって継続したものとみられる。泥土層の下層の砂礫層から飛鳥時代後半の遺物が出土した。

この上に攪拌痕跡のみられる耕作土の堆積が数層にわたって確認され、谷筋に沿って堆積する土層は厚さ3mにも達している。耕作土の堆積には画期が認められ、最下層に位置する耕作土層が水田開発の端緒にあたりとみられ、埋土中から瓦器碗の出土が確認されている。耕作土は谷幅を大きく越えない範囲で堆積を重ねるが、堆積の上層部で地山土のブロックを含んだ造成土が確認される。この造成土には近世の遺物が認められることから、近世以降に谷幅を越えた斜面の開発が本格化したものとみられよう。

寝屋4号線調査地区の1区、2区、3区東半部、5区では、耕作土を除去した時点で、段丘形成層である地山が確認され、遺構はこの地山面の精査によって検出される。

3区西半部、4区南半部、5区西端の一部に谷地形が確認された。谷地形の堆積土層は、丘陵部から流入した灰黄褐色の地山風化土が確認され、堆積層中から飛鳥時代の遺物が出土する。この上層に灰黄褐色の堆積土層がみられ、谷部では厚く堆積し、丘陵斜面では厚みを減じる。堆積層中から中世の遺物が出土し、この時期以降の整地土層及び耕作土層とみられる。中世から近世にかけて、耕作土層の堆積が進行するにつれて、畦畔や溝を、谷部から斜面部方向に移動し、造り変えた形跡が認められる。長期にわたって徐々に可耕面積を拡張していった痕跡とみることができる。近世に入ると、丘陵斜面を大規模に削平し、耕作地を造成して、耕作面積を大きく拡大している。

## 第2節 本線地区の遺構

検出した遺構には、土坑、溝、谷がある。土坑は南東部で7土坑、21土坑を、中央部で10土坑、45土坑、60土坑を検出した。また南西部で37土坑、38土坑、42土坑を、北西部で56土坑、57土坑を検出した。溝は南西方向と北東方向から谷に伸びる2溝、9溝、43溝、58溝と、谷に併行して伸びる16溝を検出した。1谷は調査区北西部で確認した。

7土坑 長径15m以上、短径4m、深さ0.8mを測り、平面形は長円形を呈する。断面形は逆台形、底部は平坦である。埋土は灰黄色細砂層が主体で、地山土層である橙色粘土層がブロックで混入する。土坑成立後、短期間で埋め戻された堆積状況を示す。上面に堆積する灰黄褐色細砂層は土壌化している。一気に埋め戻された後、上面のみが時間幅を置いて埋積した状況が認められる。粘土採取のための土坑とみている。

21土坑 長径5m、短径4m、深さ1mを測る。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。堆積層はオリーブ灰色細砂層に明黄灰色微砂層をブロックで含む。これも短期間に埋め戻された堆積状況を示すが、土坑底部に泥土の薄い堆積層が認められることから、泥土が流れ込み、堆積する時間経過の幅があったものとみられよう。粘土採取のための土坑とみている。

10土坑 長径2m、短径1m、深さ0.3mを測り、平面形は長円形、断面形状は半月形を呈する。明黄褐色の泥土層がレンズ状に堆積する。埋土中から飛鳥時代の土師器甕が出土した。

45土坑 長径7m、短径2m、深さ0.4mを測り、平面形は長円形。最深部は中央で、周縁は浅く立ち上がる。下部に細砂層が堆積し、上部は土壌化した黒褐色泥土層が堆積する。遺構の性格は、谷に伸びた溝の深い部分のみが、削平を免れて遺存した可能性が高い。

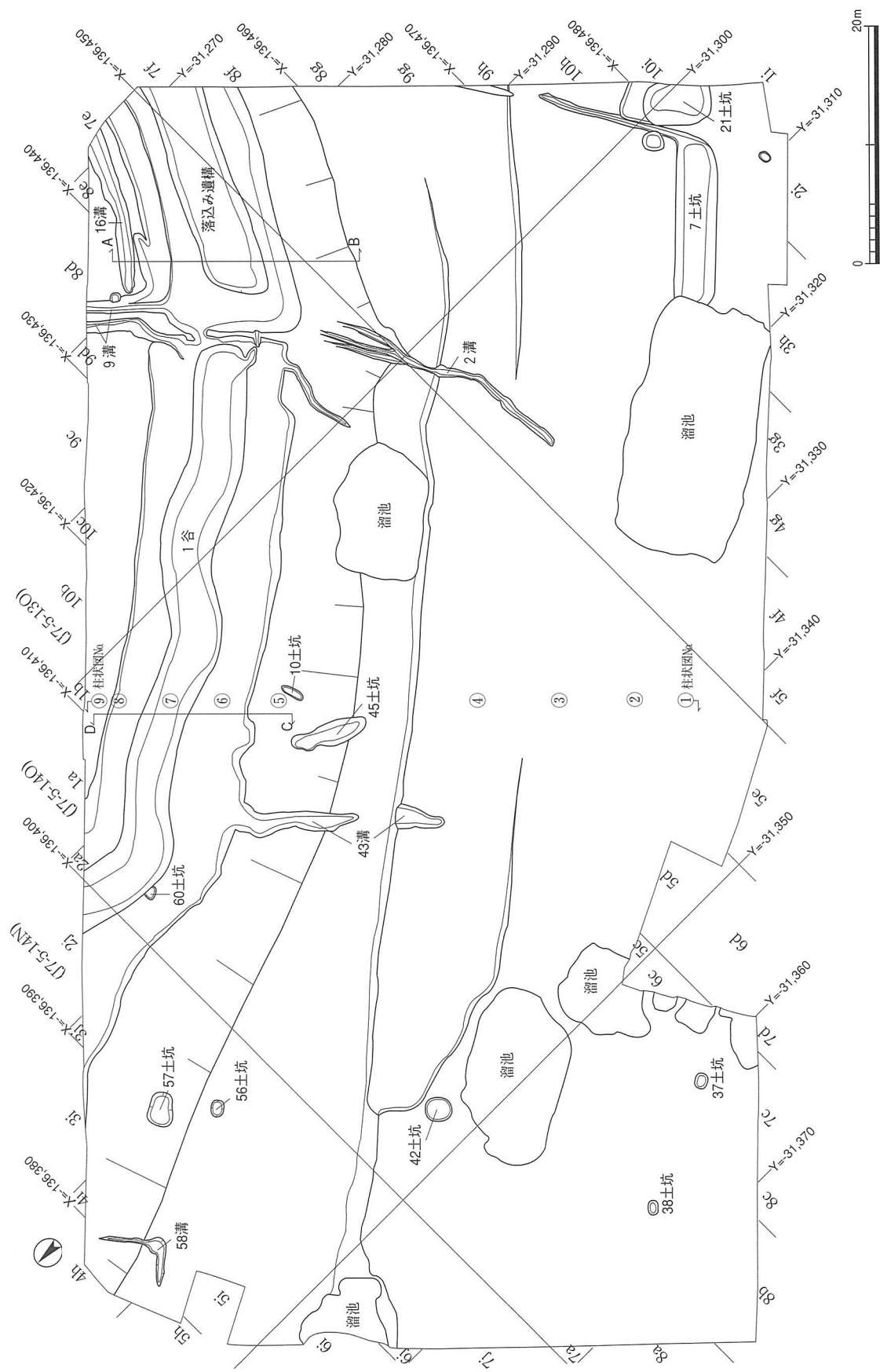


图6 本線地区平面実測図 (1 : 500)

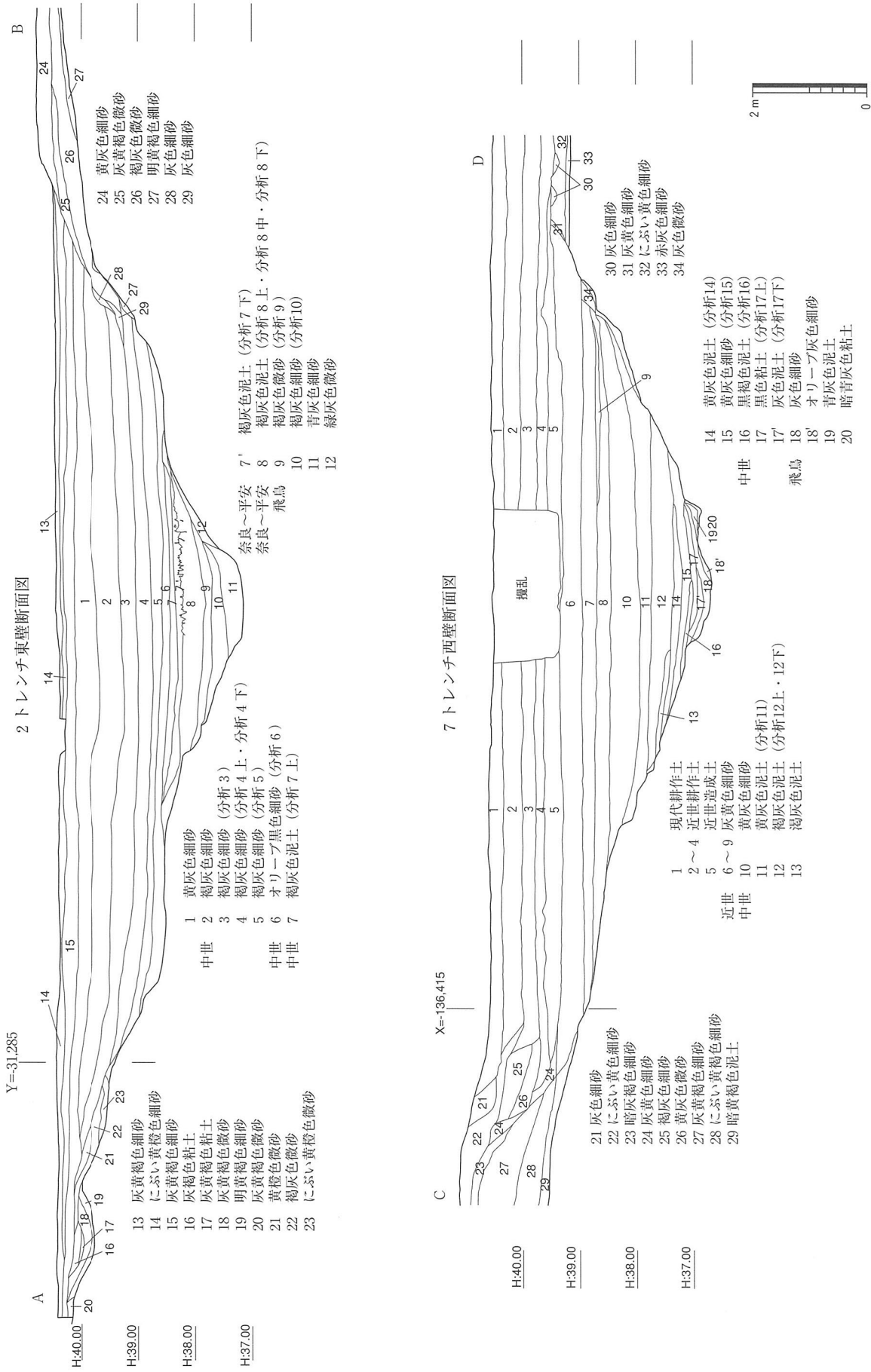


図7 本線地区1谷断面実測図 (1:100)



60土坑 調査区中央、谷の流路際で検出した。径1.2m、深さ0.4mを測り、平面形はほぼ円形で、土坑内に土師器杯、土師器甕2個体以上を据え置いた状態で検出した。完形に近い土器であること、常時水流に洗われる位置にあることなどから、祭祀に関係した遺構とみることができる。

37土坑 径0.8m、深さ0.3m、平面形は隅丸方形を呈し、掘方壁面が垂直で、底面は平坦である。柱穴の可能性は皆無ではないものの、周辺に対応する柱穴は検出されない。

38土坑 長径0.9m、短径0.8m、深さ0.2m、平面形は隅丸方形、断面形は浅いU字形を呈する。細砂層を主体にした土層がレンズ状に堆積する。

42土坑 径2m、深さ0.15m、平面形は円形を呈する。黄褐色系の粗砂層をブロックで含む。地山面の凹凸を整地した際の土層堆積とみられる。

56土坑 長径1.5m、短径1m、深さ0.3m、平面形は隅丸長方形を呈する。埋土は下部に、黒色泥土層中に黄灰色泥土層がブロックで混入し、多量の炭片が含まれる。その上面は、黄褐色細砂層で覆われる。土坑壁に焼面は無く、埋土中に焼土層は認められない。炭と灰を一括で投棄した土坑と観察される。遺物は出土していない。

57土坑 長径3m、短径2m、深さ0.1mを測り、平面形は楕円形を呈する。暗褐色泥土層が堆積するが、自然の浅い凹地への堆積とみられる。飛鳥時代の土師器甕の小片が出土した。

2溝 南西方向から谷に伸びる幅0.5～2m、深さは平均0.2mを測る。全長で20m前後を検出している。溝下流側は幅を広げながら谷に伸びている。溝上流側は削平を受けて遺存しない。溝下層に黒褐色粗砂層、上層に灰褐色細砂層が堆積している。

9溝 北東方向から谷に伸び、下層の溝が谷際で二股に枝分かれする。上層での溝幅は3m前後、深さ0.4m、東側下層溝は幅0.6m、深さ0.3m、西側下層溝が幅0.8m、深さ0.3mを測る。溝上層の堆積層から飛鳥時代の須恵器甕片が出土した。溝は現存長で8m前後を検出している。

16溝 東から西方向に、谷に併行して伸びる溝で、15m前後を検出した。西端は削平されて遺存しない。幅1.5m、深さ0.4m、暗褐色系の土層がレンズ状に堆積する。堆積土上層で瓦器碗片が出土した。

43溝 南西方向から谷に伸びる溝で、全長15mを確認した。北西端と溝中央部が削平を受け遺存しない。幅2m、深さ0.3mを測る。暗褐色系の土層がレンズ状に堆積する。飛鳥時代の土師器甕片、須恵器杯片が出土した。

58溝 西方向から北方向に屈曲して谷に伸びる。西から東へ伸びる部分は幅1m、深さ0.2m、南から北に伸びる部分が幅0.5m、深さ0.3mを測る。飛鳥時代の土師器甕片が出土した。

1谷 谷底部東側で、流路方向に沿う幅4m、深さ1m、長さ15m以上の掘りくぼめた落込み遺構を検出した。埋土は上層が灰白色の泥土層、下層で細砂層の堆積が認められ、下層堆積層から飛鳥時代後半の遺物が出土した。

谷底部西側では、流水痕跡のみられる流路跡を検出した。幅は3mから4m、深さは1m前後を測る。流水の方向が変化する地点が浸食を受け、抉れ込み、流路の蛇行が確認される。下層に砂礫層、中層に細砂層、上層に泥土層が堆積し、上層は土壌化が観察される。当初は流路として機能していたが、水の供給が徐々に絶たれ、流路が埋没、湿地状の沼沢地に化したとみられる。

### 第3節 寝屋4号線地区の遺構

各調査区で、谷、飛鳥時代とみられる建物2棟、ピット1基、溝1条、中世以降に属した土坑、溝などを検出した。

**建物1** 1区の丘陵部で検出した。総柱建物で、梁行2間(約3.8m)、桁行2間(約3.8m)を確認した。調査区の南へ柱列が延びる可能性があるが、東側柱列の北から3間目が確認できないため、2間×2間の規模とみている。主軸方向は真北に対し約5°東へ振れる。柱穴は平面形が円形を呈し、検出面での規模は、一辺0.5m~1.0m、深さ0.2m~0.4mである。柱穴から土師器の甕、須恵器の杯が出土した。いずれも飛鳥時代に属している。

**建物2** 5区の東端の丘陵部で検出した。総柱建物で、梁行2間(約3.1m)、桁行は2間(約3.4m)を確認した。西から2間目の柱穴は後世の攪乱により確認ができなかった。主軸方向は真北に対し約7°東へ振れる。柱穴は平面形が円形を呈し、検出面での規模は、一辺0.4m~0.6m、深さ0.2m~0.4mである。

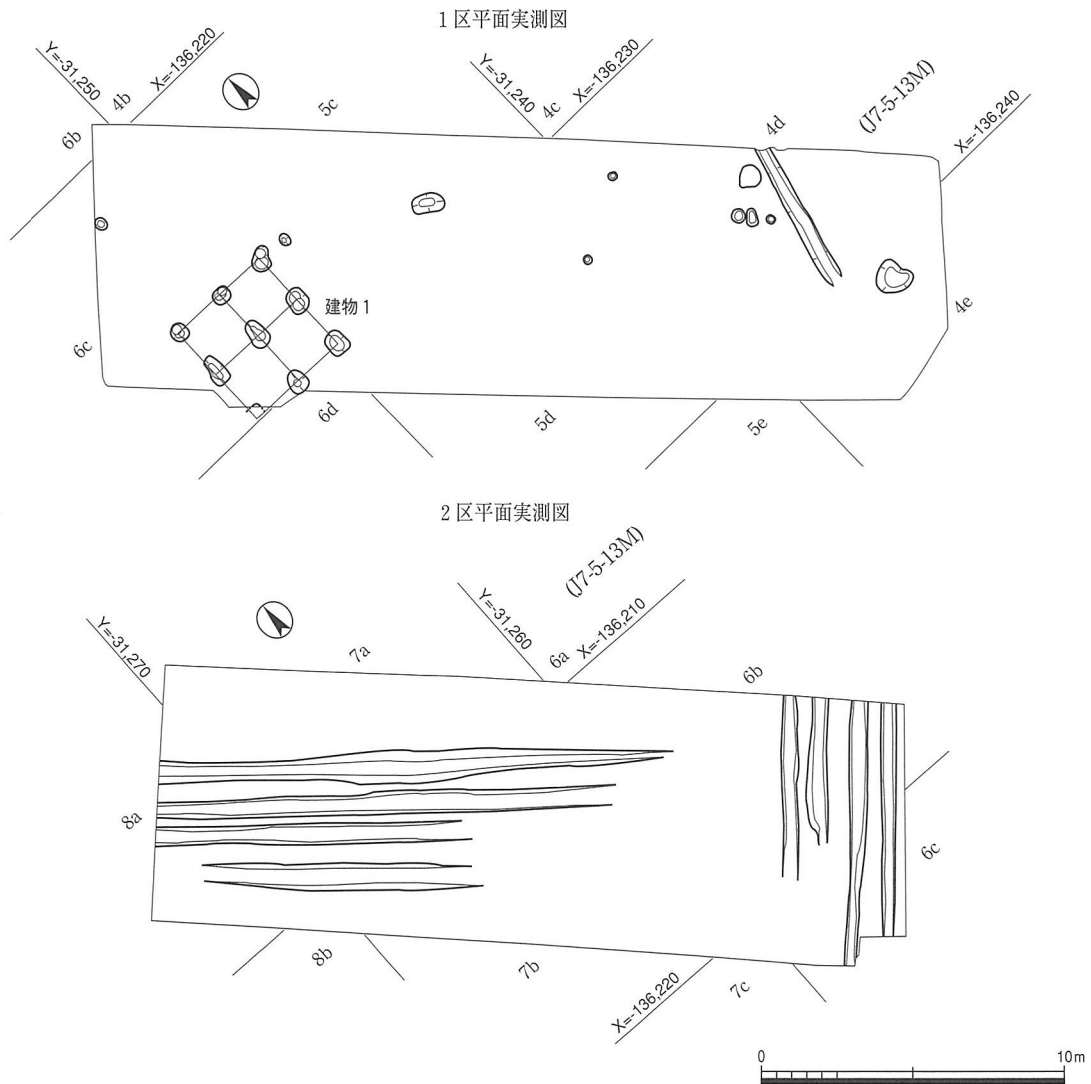


図8 寝屋4号線地区平面実測図1 (1:250)

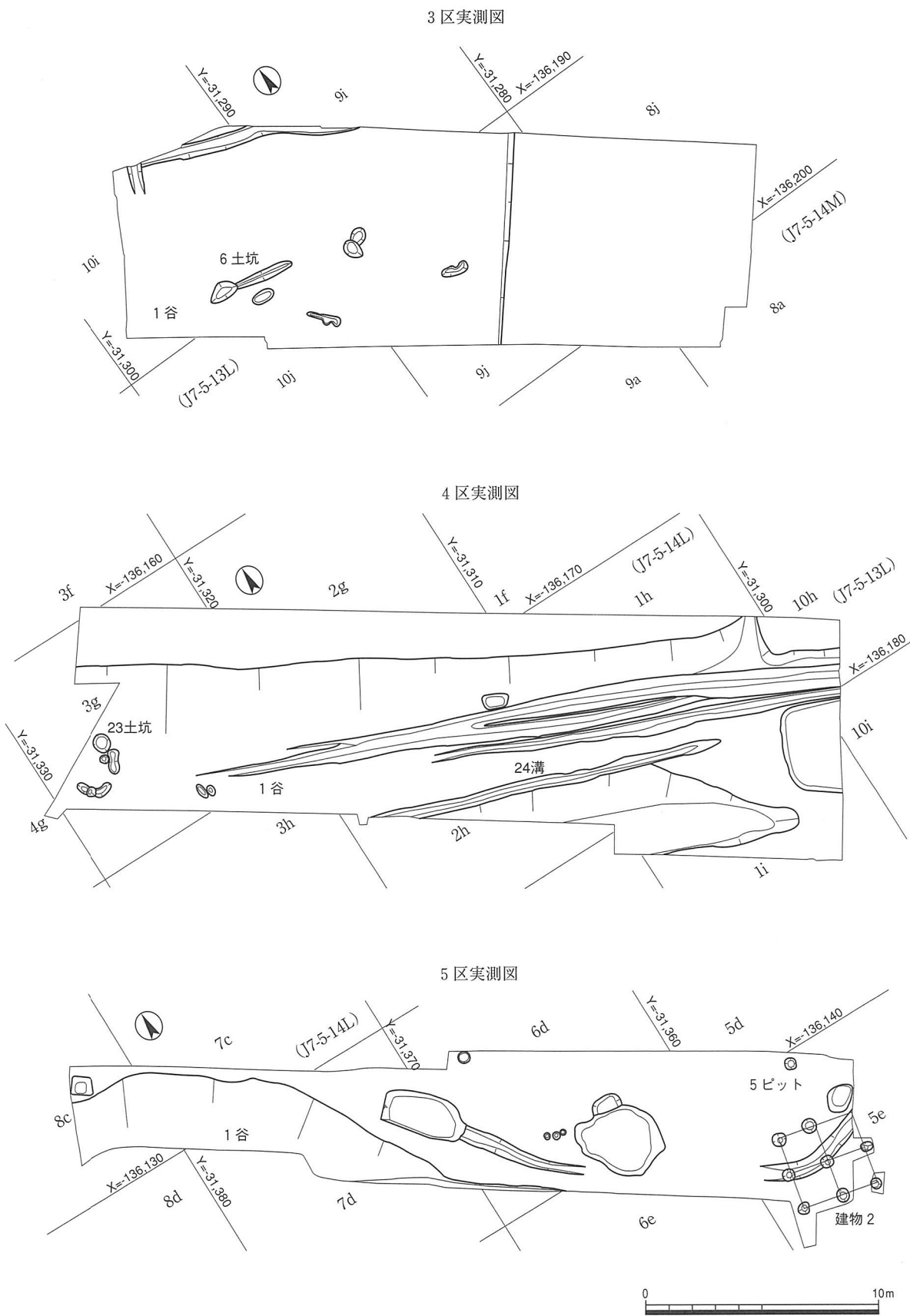


図9 寝屋4号線地区平面実測図2 (1 : 250)

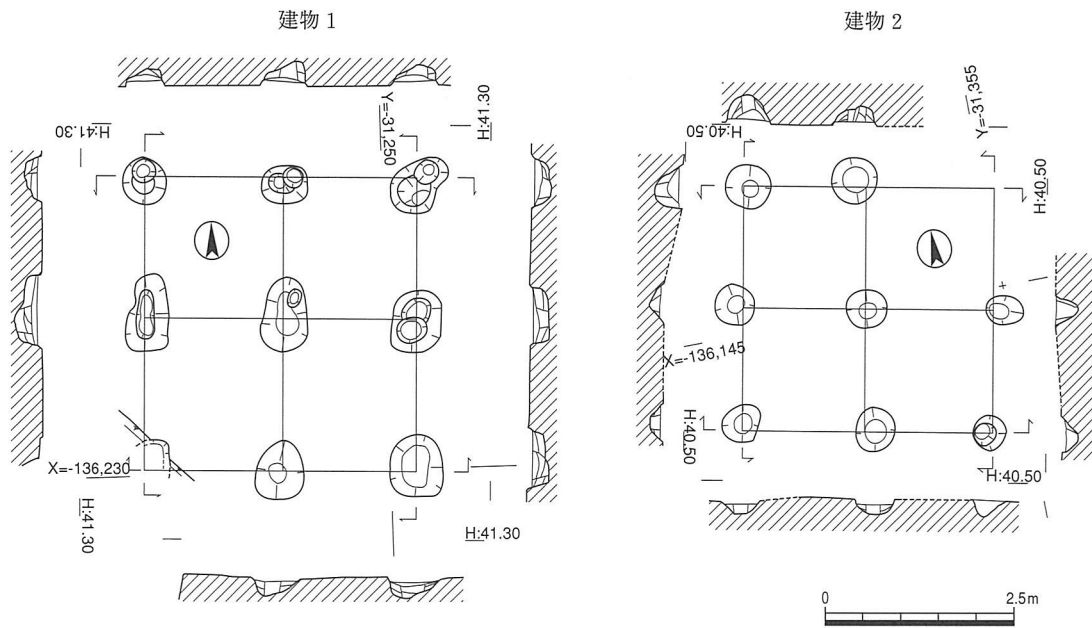


図10 寝屋4号線地区建物実測図（1：100）

6 土坑 3区の西寄りに位置する谷への斜面で検出した。検出面での規模は、長径1.3m、短径0.8m、深さ0.3mである。平面形は不整円形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト層である。

23土坑 4区の西寄りに位置する谷の斜面で検出した。検出面での規模は、径0.8m、深さ0.1mである。平面形は円形を呈する。埋土は黒褐色シルト層で炭を多く含む。

5ピット 5区の北端に位置する丘陵部で検出した。検出面での規模は、一辺0.5m、深さ0.1mである。平面形は隅丸方形を呈する。埋土は明褐色細砂層である。断面観察から柱穴の可能性はある。建物2の北側に位置するが、柱列上に並ばず、別の遺構に属するものとみられる。

24溝 4区の南寄りに位置する谷の底面で検出した。南東から北西方向に走り、谷に併行している。検出面での規模は幅0.6m、深さ0.1mで、断面形はU字形を呈し、埋土はにぶい黄褐色細砂層である。14m以上にわたって確認した。埋土から須恵器の甕、杯が出土した。いずれも飛鳥時代に属する。

1谷 4区南側で検出した。南東から北西方向に下がりが見られる。中世以降の削平を受けているが、谷頭は3区中央部とみられよう。規模は、幅10m、深さ1mで、100m前後を確認した。谷埋土からは、飛鳥時代から近世にかけての土器が出土した。谷堆積土層は主として4区西壁断面で確認した。埋土は5層からなり、下層から灰黄褐色泥土層（5層）、灰黄褐色微砂層（4層）、にぶい黄褐色粗砂層（3層）、にぶい黄褐色極細砂層（2層）、暗灰黄色泥土層（1層）である。3層、4層、5層はそれぞれ土壌化が見られる。4層、5層からは飛鳥時代の遺物が出土する。2層、3層からは瓦器が出土しており、1層からは近世の遺物が出土した。

## 第4節 出土遺物

本線部分の調査では、丘陵斜面の遺構と包含層から、縄文時代の石器剥片（チャート質）、飛鳥時代の土師器甕、中世の瓦器椀、瓦質土器鉢・羽釜、土師質土器鉢、陶器甕、近世の土師器皿、瓦質土器鉢、陶器甕・鉢、磁器椀・皿が出土した。谷の堆積土から出土した遺物には飛鳥時代の土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕・盤（獣脚）、古代の白色土器皿、土師器皿、白磁椀・皿、青磁椀、中世の瓦器椀・皿、瓦質土器鉢・釜、土師質土器鉢、陶器鉢・甕、近世の陶器鉢・甕、磁器椀・皿、瓦質土器鉢がある。

寝屋4号線の調査で出土した遺物には、飛鳥時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器・須恵質陶器・青磁、中世の瓦器・陶器・須恵質陶器・瓦質土器・土師質土器、近世の土師器・陶器・磁器・瓦質土器・土師質土器がある。丘陵部からの出土遺物は、主として建物、土坑、畝溝から出土した。量は極めて少ない。飛鳥時代の遺物は建物柱穴から土師器甕片が出土した。中世の遺物は土坑から陶器甕、瓦器椀が出土した。近世の遺物は畝溝から陶器椀、磁器椀が出土している。谷の堆積土から出土した遺物は、谷の堆積層、および溝から出土した。谷堆積層の下層から、飛鳥時代の土師器甕、須恵器杯・蓋・壺・平瓶が出土した。谷中層から古代の青磁皿、中世の須恵質陶器鉢、陶器甕、瓦器椀、瓦質土器鉢が出土している。上層から近世の陶器鉢・甕、磁器椀・皿、瓦質土器鉢が出土した。

図11（図版9・図版15）

1は土師器椀で、内面に暗文が施される。平坦な底部で、体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁端部は斜め上方に開き気味に収まる。口径10.4cm、器高2.9cmを測る。内外面は灰黄色、断面は灰色を呈する。

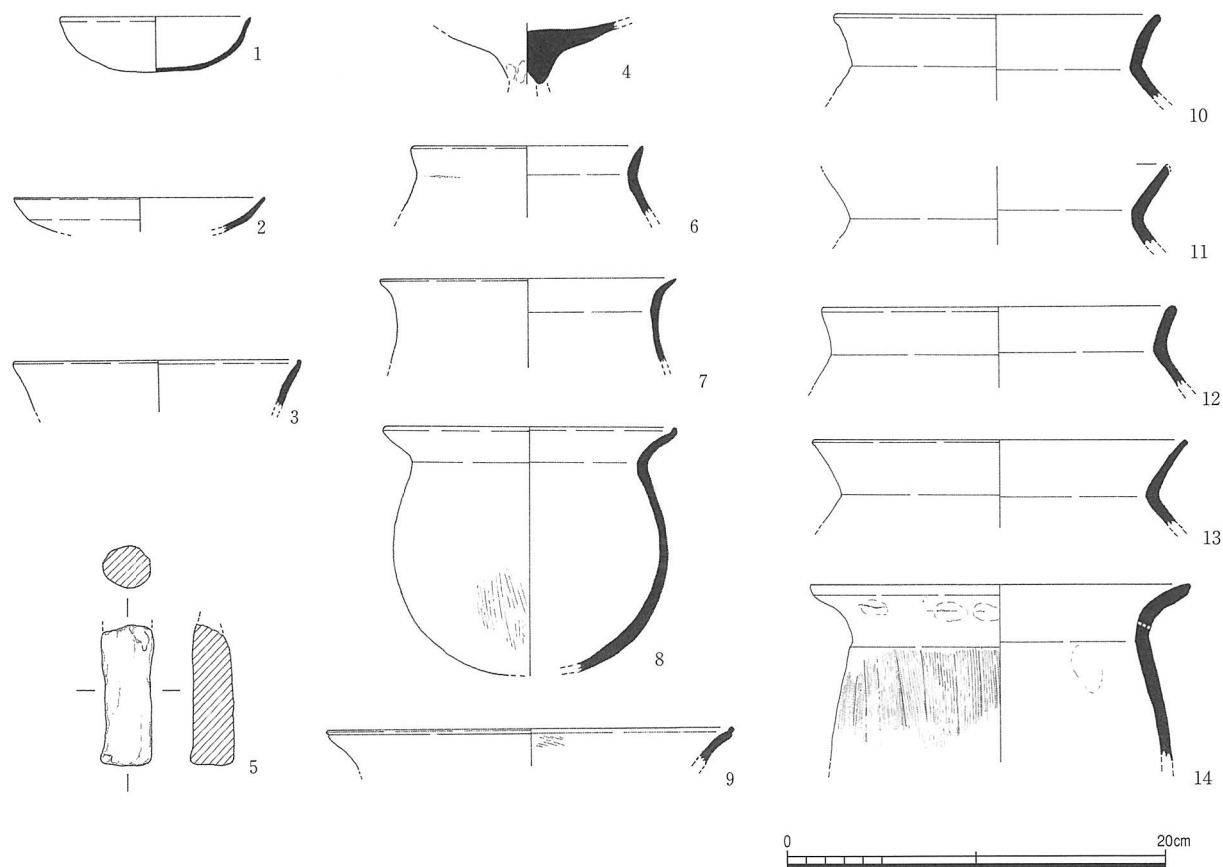


図11 出土遺物実測図1（1：4）

2は土師器皿で、体部は内湾気味に緩く立ち上がり、途中で直線的に斜め上方に屈曲して端部は丸く収める。内外の口縁部をナデ調整し、底部は欠く。内外、断面共ににぶい褐色を呈する。3は土師器杯で、体部下半、底部を欠く。体部下方は内湾気味に立ち上がるが、上方から口縁部にかけて緩く外反し、端部は小さく摘みあげて収める。内外、断面共に淡橙色を呈する。4は土師器高杯で、脚部を欠く。杯部下半は横方向に伸び、中途から内湾気味に緩やかに立ち上がる。皿部先端を欠くが、外反して丸く収まるとみられる。皿部内面をナデ、外面に粗いミガキを施す。内外、断面共に、にぶい橙色。5は土師質で、径2.0cmのほぼ円筒形で5cmが遺存する。一方の端部に欠損がみられる。竈で使用される煮沸用具の支柱の可能性はあるが、確実な用途に関しては不明である。6は土師器甕で、頸部と口縁部が遺存、体部以下を欠く。体部上半から内湾気味に頸部に至り、口縁部は緩く外反し、端部は薄く摘んで収める。口径は12.4cm、内外共に淡橙色を呈する。7は土師器甕で体部下半以下を欠く。体部上半から内傾気味に頸部に至り、口縁部でゆるやかに反転しつつ外反する。端部をわずかに摘みあげて収める。口縁部から頸部までをナデ、体部内面はケズリ。口径16.2cm、内外、断面共ににぶい赤褐色を呈する。8は土師器甕で、底部・体部は丸く仕上げ、口頸部で緩く反転外反する。口縁端部は斜め上方に立ち上げ、端部を軽く摘み上げる。口径16cm、器高13.3cmを測る。内外共に浅黄色。断面は灰色を呈する。9は土師器甕、口縁部下半から口頸部以下を欠く。口縁部上半は外反して伸び、端部は摘みながら横方向にナデて収める。口径は22cmを測り、内外は黄橙色、器壁はもろい。10は土師器甕で体部以下を欠く。肩部からくの字状に外反する頸部を持ち、口縁部上半がさらに外反し、口縁端部は丸く収める。口径は17.8cm、外面はにぶい褐色、内面・断面はにぶい黄橙色。11は土師器甕で、体部以下と口縁端部を欠く。頸部から口縁部にかけてはくの字に外反して斜め上方へ伸びる。外面はにぶい橙色、内面・断面は灰白色を呈する。12は土師器甕で、体部以下を欠いている。口頸部から口縁部はくの字に緩く外反し、口縁端部は丸く収める。口径は19.3cm、外面は明赤褐色、内面はにぶい橙色、断面は灰赤色を呈する。13は土師器甕で、体部以下を欠く。肩部から口縁部にかけてくの字に外反して伸び、端部をナデて小さな面を造り出す。口径は20.2cm、外面は浅黄橙色、内面は灰白色、断面は褐灰色を呈する。14は土師器甕で、体部下半と底部を欠く。体部上半は内傾気味に伸び、明瞭な肩部を持たずに頸部から口縁部に如意形に外反し、端部は丸く収める。外面を縦ハケ、内面はケズリの後にナデを施す。口縁下端外面は未調整、口縁端部はナデによる調整を施している。外面は灰黄褐色、内面は褐灰色、断面はにぶい黄橙色を呈する。

図12 (図版9-2・図版15)

15は土師器甕で、頸部以下を欠く。口縁部は外反気味に斜め上方に伸び、端部は丸く収める。外面と断面は橙色、内面は黄橙色を呈する。16は土師器甕で、頸部以下を欠いている。口縁部は外反気味に斜め方向に伸び、端部は丸く収める。内外面は浅黄色、断面が黄灰色を呈する。17は土師器甕で肩部以下を欠く。頸部から口縁部は強く外反して伸び、端部は外側で面を造る。内外面をハケメ調整後、口縁端部をナデで仕上げる。口径は27.1cmを測る。外面はにぶい橙色、内面はにぶい赤褐色、断面は明褐灰色を呈する。18は土師器甕で、頸部以下を欠く。口縁部は内湾気味に斜め上方に伸び、端部は丸く収める。口径は23.8cmを測る。外面は浅黄橙色、内面と外面がにぶい黄橙色を呈する。19は土師器甕で、肩部以下を欠く。口縁部は強く外反して伸び、端部は外側に面を持つ。口径は23.8cmを測る。内外面、断面はいずれも橙色を呈する。20は土師器甕で、片口を持つ。底部を欠くが、丸底になると観察される。体部は膨らみながら上方に伸び、肩部は不明瞭で、頸部から口縁部は如意形を呈し、端部は丸く収める。

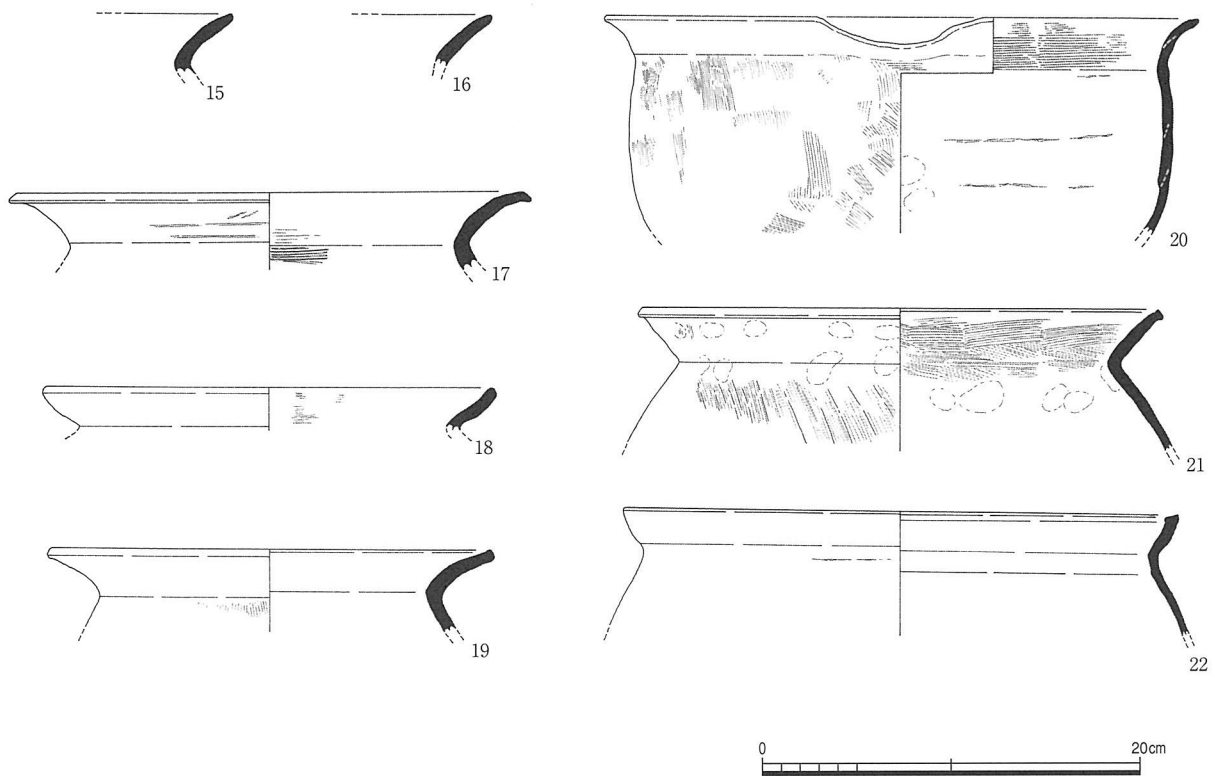


図12 出土遺物実測図2（1：4）

内外をハケメ調整し、口縁部を横方向にナデで仕上げる。口径は33.8cmを測る。内外面、断面共に灰白色を呈する。21は土師器甕で、体部以下を欠く。頸部から口縁部はくの字に外反して斜め上方に伸び、端部は外側に向かって小さな面を持つ。内外をハケメ調整、口縁端部を横方向のナデで仕上げる。口径は27.7cmを測る。外面は橙色、内面はにぶい黄橙色、断面は浅黄橙色を呈する。22は土師器甕で、体部以下を欠く。頸部から口縁部は内湾気味で斜め上方に短く伸び、端部はやや内傾気味の面を為す。口径29.7cmを測る。内外面、断面はいずれもにぶい黄橙色を呈している。

図13（図版10・図版11・図版15・図版16）

23は須恵器蓋で、天井部を欠く。内面にかえりを有し、口径9.6cmを測る。内外面、断面共に灰色を呈する。24は須恵器蓋で、天井部を欠く。内面にかえりを有し、器高は2.5cm以上、口径は11.5cmを測る。内外面、断面はいずれも灰色を呈する。25は須恵器蓋で、これも天井部を欠く。内面にかえりを有し、口径は15.8cmを測る。内外面、断面共に灰白色を呈する。26は須恵器蓋で、天井部は平坦で低い宝珠形の摘みが付く。口縁部はやや開き気味に下方に伸び、端部は丸く収める。器高は4.0cm、口径11.6cmを測る。外面と断面が灰白色、内面が暗オリーブ灰色を呈する。27は須恵器蓋で、平坦な天井部に低い宝珠形の摘みを有する。外面と断面は灰白色、内面は灰色を呈する。28は須恵器蓋で、天井部の大半を欠く。口縁部は反り気味で横方向に伸び、端部は外方に面を為す。口径は14.6cm、外面は灰色、内面と断面は灰白色を呈する。

29は須恵器杯で、底部を欠く。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反して端部は丸く収める。口径は11.9cm、内外面、断面共に灰色を呈する。30は須恵器杯で、平坦な底部を持ち、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反して、端部は丸く収める。器高3.2cm、口径11.4cmを測る。

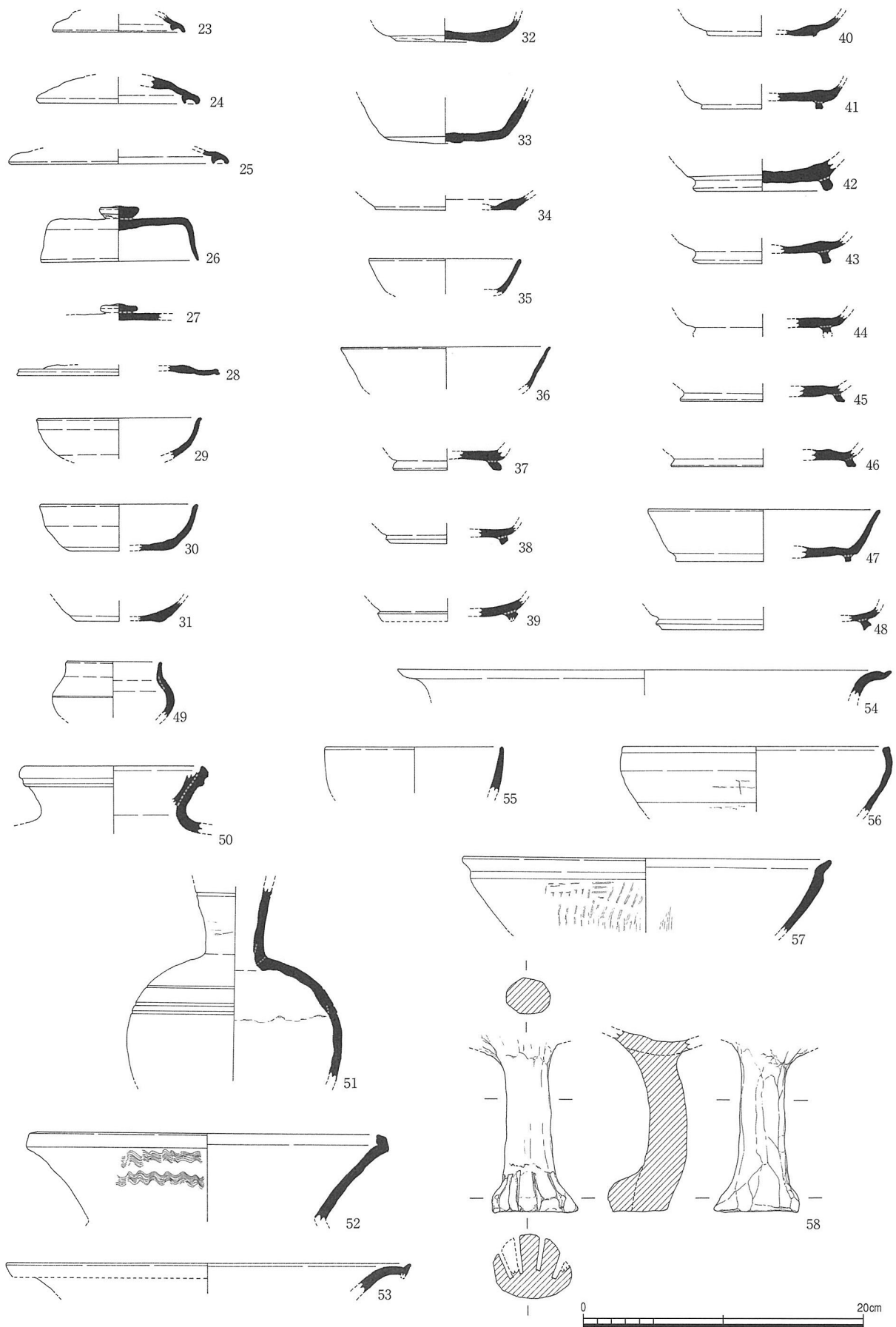


图13 出土遺物実測図3 (1:4)



内外面、断面共に灰色を呈する。31は須恵器杯で、体部上半と口縁部を欠く。底部は平坦である。内外面、断面共に灰白色を呈する。32は須恵器杯で、体部上半と口縁部を欠く。底部はやや内反り気味で、内外面、断面は灰白色を呈する。33は須恵器杯で、口縁部を欠く。底部はやや外反り気味で、体部は斜め上方に伸びる。内外面、断面は灰色を呈する。34は須恵器杯で、底部の大半と体部、口縁部を欠く。外面は灰色、内面と断面は灰白色を呈する。35は須恵器杯で、底部を欠く。体部は斜め上方に直線的に伸び、口縁端部は丸く収める。口径11.1cmを測る。内外面は灰色、断面はオリーブ灰色を呈する。36は須恵器杯で、底部を欠く。体部、口縁部は直線的に斜め上方に伸び、口径は15.3cmを測る。外面と断面は灰色、内面は灰白色を呈する。

37は須恵器杯で、体部以上を欠いている。外方に踏ん張る短い高台を貼り付ける。端面は下方にある。内外面、断面共に灰白色を呈する。38は須恵器杯で、高台部分のみが遺存する。短く外方に踏ん張る高台で、端面を斜め外方に向ける。外面、断面は灰色、内面は灰白色を呈する。39は須恵器杯で、高台部分のみが遺存する。外方に踏ん張る短い高台で、端面を斜め外方に向ける。内外面、断面共に灰白色を呈する。40は須恵器杯で、高台部分のみが遺存する。高台は短く小さいもので、端面はわずかに外方を向く。内外面、断面共に灰色を呈する。41は須恵器杯で、高台部分のみが遺存した。高台は断面方形の短いもので、端面は下方に向く。内外面、断面は共に灰色を呈する。42は須恵器杯で、体部から口縁部を欠く。底部内面は中央がやや窪み、外方に踏ん張った高台が付き、端面はわずかに外面を向く。内外面、断面は灰色を呈する。43は須恵器杯で、高台部分が遺存する。外方に踏ん張る高台が付き、端面はわずかに外方を向く。外面と断面が灰色、内面が灰白色を呈する。44は須恵器杯で、高台部分が遺存する。平坦な底部から外方に踏ん張る高台が付くが、端面を欠く。内外面、断面はいずれも灰色を呈する。45は須恵器杯で、高台部分が遺存する。底部は平坦で、外方に踏ん張る高台が付き、端面は下方に向く。内外面が灰白色、断面が褐灰色を呈する。46は須恵器杯で、高台部分のみが遺存する。短い高台は外方に踏ん張り、端面は下方を向く。内外面は灰色、断面は褐灰色を呈する。47は須恵器杯で、底部内面はロクロ目による凹凸が認められ、小さく低い高台が付き、端面は下方を向く。体部は斜め上方に直線的に伸び、口縁部がわずかに外反する。口径16.5cm、器高3.6cmを測る。外面は灰色、内面は灰白色、断面は暗赤灰色を呈する。48は須恵器杯で、高台部分のみが遺存する。高台は斜め外方に踏ん張り、端面は外面下方を向く。内外面、断面はいずれも灰色を呈する。

49は須恵器壺で、底部を欠く。体部から肩部にかけて内湾しつつ立ち上がり、頸部から口縁部は上方に短く伸びて、端部は丸く収める。口径は6.8cmを測る。内外面は灰色、断面は灰白色を呈する。50は須恵器壺で、肩部以下を欠く。頸部から口縁部は短く外反して伸び、端部を上方に摘み上げ、端面を玉縁状に丸く収める。口径12.8cmを測る。外面はオリーブ灰色、内面と断面は灰色を呈する。51は須恵器壺で、長頸のタイプで、口縁端部と体部下半を欠く。体部から肩部は丸く内湾し、頸部から口縁部は外反気味に長く上方へ伸びる。内外面、断面はいずれも灰白色を呈する。52は須恵器甕で、広口のタイプで、頸部以下を欠く。口縁部は外反気味に大きく外方に伸び、端部は上方に折り曲げ、端面はほぼ上方を向く。口縁部外面を2条の波状文で飾る。口径は24.5cmを測る。外面と断面は明オリーブ灰色、内面は灰白色を呈する。53は須恵器甕で広口のタイプで、口縁部下半以下を欠く。口縁部上半は大きく外反し、端部はやや下方を向いた面を造る。口径は28.9cmを測る。内外面は灰色、断面は赤褐色を呈する。54は須恵器甕で、広口タイプのもので、口縁部下半以下を欠いている。口縁部上半は大きく外反し、端部は上方に摘み上げ、丸くなった面を外方に造り出す。口径は35.3cmを測る。内外面、断面共に灰色を呈す

る。

55は須恵器鉢で、体部下半と底部を欠く。体部上半から口縁部は緩く内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。口径は12.6cmを測る。内外面、断面は灰色を呈する。56は須恵器鉢で、体部下半と底部を欠く。体部上半は内湾気味に斜め上方に伸び、口縁部は内湾する。端部には内傾した端面を有している。口径19cmを測る。内外面、断面は灰白色を呈する。57は須恵器鉢で、体部下半以下を欠く。体部上半は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口縁部下半で上方に小さく伸びて、口縁部上半は外反し、端部は丸く収める。口径は26.4cmを測る。内外面は灰色、断面は灰白色を呈する。58は須恵質で、盤の下部に取り付く脚部とみられる。5指を造り出した獣脚で、1指を欠く。脚高12cm、脚径2.8cmを測る。外面は灰色、内面と断面は灰白色を呈する。

図14 (図版11-2)

59は土師器皿で、底部から緩く内湾して立ち上がり、端部は丸く収める。口径は6.9cm、器高は1.2cmを測る。内外面、断面共に灰白色を呈する。60は土師器椀で、底部を欠く。体部は内湾気味に緩やかに立ち上がり端部は丸く収める。口径は9.4cmを測る。外面と断面が浅黄橙色、内面がにぶい橙色を呈する。61は土師器椀で、体部下半以下を欠く。体部上半から口縁部は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収め、口縁端部内面に沈線を施す。内外面は灰白色、断面は浅黄橙色を呈する。62は土師器椀で、体部下半以下を欠く。体部下半から口縁部は緩く内湾して立ち上がり、端部は丸く収める。63は土師器椀で、体部下半以下を欠く。体部上半から口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。口径は11.3cmを測る。内外面、断面共に淡灰色を呈する。64は須恵質陶器で、体部下半以下を欠く。体部上半は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口縁部は外反気味に短く伸び、口縁端部は斜め外方に面を持つ。口径22.8cmを測る。内外面、断面は共に灰白色を呈する。65は白磁椀で、体部以下を欠く。口縁部は斜め上方に直線的に伸び、口縁端部外面に幅広で低い擬玉縁を付ける。口径は9.8cmを測る。内外面、断面共に灰白色を呈する。66は白磁椀で、体部下半以下を欠く。体部上半は内湾気味に斜め上方に伸び、口縁部は外反して、端部は丸く収める。器壁は薄く、灰白色の釉が懸かる。口径は10.7cmを測る。内外面、断面は灰白色を呈する。67は白磁皿で、底部のみが遺存する。底部は平坦で、鋭角的に屈曲して斜め上方に立ち上がる。底部の釉はかき取るが、部分的に残る。外面は明緑灰色、内面は明オリーブ灰色、断面は灰白色を呈する。68は白磁椀で、底部と高台が遺存する。断面逆台形の高台は削りだして、底部

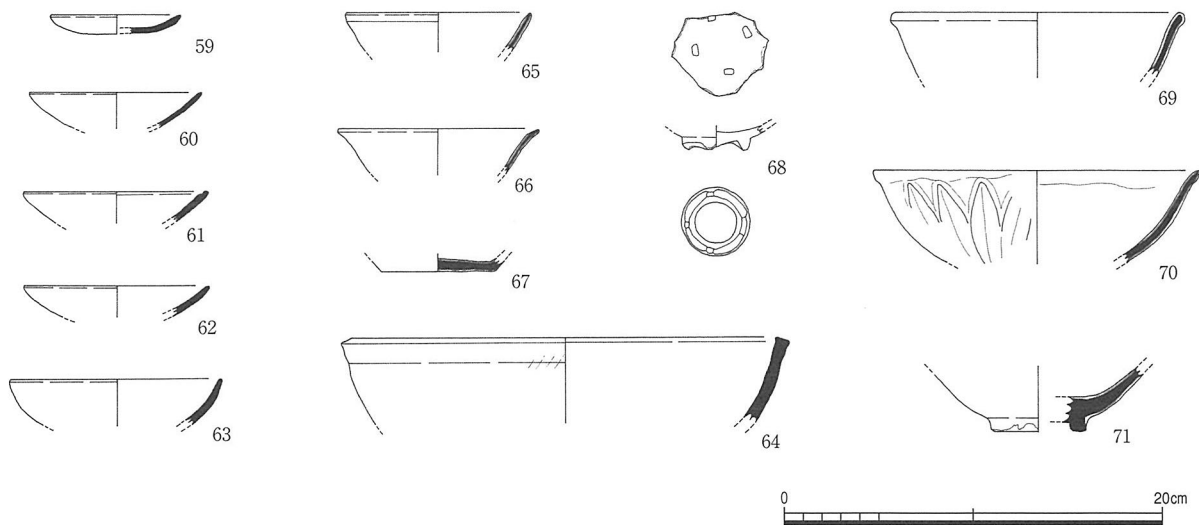


図14 出土遺物実測図4 (1:4)

内面には焼成時の目跡が4箇所を確認できる。内外面、断面は灰白色を呈する。69は青磁椀で、体部下半以下を欠く。体部上半は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部外面に小さな玉縁を付ける。口径は15.2cmを測る。内外面はオリーブ灰色、断面は灰色を呈する。70は青磁椀で底部を欠く。体部は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口縁部は小さく外反し、端部は外方へわずかに膨らみ、擬玉縁となる。体部外面に鎬蓮弁を陽刻する。口径は17.9cmを測る。内外面は緑灰色、断面は灰白色を呈する。71は青磁椀で、高台と体部下半が遺存する。底部は厚く平坦で、断面四角形の削り出し高台が付く。体部下半は内湾気味に斜め上方へ伸びる。内外面はオリーブ灰色、断面は灰白色を呈する。

図15 (図版12・図版13-1・図版16)

72は土師器皿で、底部を欠く。体部は外反気味に立ち上がり、口縁部は内傾して、端部は丸く収める。口径は8.3cmを測る。内外面は橙色、断面はにぶい橙色を呈する。73は土師器甕で、口縁部のみが遺存する。口縁部は大きく外反し、内面が上方を向き、端部は丸く収める。口径は18.8cmを測る。外面は暗褐色、内面は浅黄橙色、断面は灰白色を呈する。74は瓦器皿で、底部は平坦になり、体部は内湾して短く伸び、口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収める。底部内面に縦方向のヘラミガキが認められる。口径は12.2cmを測る。内外面は灰色、断面は灰白色を呈する。75は瓦器椀で、体部下半以下を欠く。体部上半は内湾しつつ立ち上がり、口縁部は斜め上方に直線的に伸び、端部内面に沈線を有する。体部内面に横方向のヘラミガキが認められる。口径は9.8cmを測る。内外面は灰色、断面は灰白色を呈する。76は瓦器椀で、底部を欠く。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は更に内傾して伸び、端部は丸く収める。体部内面に横方向のヘラミガキが認められる。口径は9.8cmを測る。内外面、断面共に灰白色を呈する。77は瓦器椀で、底部を欠く。体部は斜め上方に直線的に伸び、口縁部は内傾して短く伸び、端部は丸く収める。体部内面に横方向のヘラミガキを施す。口径は11.6cmを測る。内外面、断面共に灰白色を呈する。78は瓦器椀で、体部下半以下を欠く。体部上半は内湾して斜め上方に立ち上がり、口縁部はわずかに外反して伸び、端部は丸く収める。体部内面に横方向のヘラミガキを持つ。口径は10.9cmを測る。外面は灰色、内面、断面は灰白色を呈する。79は瓦器椀で、底部を欠く。体部は内湾して斜め上方に立ち上がり、口縁部は斜め上方に直線的に伸び、端部は丸く収める。口径は12.5cmを測る。内外面は灰色、断面は灰白色を呈する。80は瓦器椀で口縁部のみが遺存する。口縁部は体部上半から斜め上方に直線的に伸び、端部は内外に肥厚して丸く収める。口縁部内面に横方向のヘラミガキが認められる。口径は14.6cmを測る。外面は灰色、内面は暗灰色、断面は灰白色を呈する。81は瓦質土器鉢で、体部下半以下を欠く。体部上半は内湾して立ち上がり、肥厚した口縁端部はわずかに内傾した幅広の面を有する。口径は15.3cmを測る。外面は灰色、内面は黒褐色、断面は灰白色を呈する。82は瓦質土器鉢で、口縁部のみが遺存する。口縁部は内湾気味に肥厚して伸び、口縁部上端は幅広の面を為す。口径は16.3cmを測る。内外面は灰色、断面は灰白色を呈する。83は瓦質土器鉢で、体部下半以下を欠く。体部上端は肥厚しつつ斜め上方へ直線的に伸び、口縁部上端は幅広の面を為す。口径は29.1cmを測る。外面は暗灰色、内面は灰色、外面は灰白色を呈する。84は瓦質土器鉢で、体部下半以下を欠く。体部上半は直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁部は外反して短く伸び、端部は外方にわずかに膨らみ、丸く収める。口径は23.7cmを測る。内外面は灰色、断面は灰白色を呈する。85は瓦質土器鉢で、体部下半以下を欠く。体部上半は内湾して斜め上方に立ち上がり、口縁部は直線的に斜め上方に伸び、端部は丸く収める。口径は25.4cmを測る。外面は暗灰色、内面は暗オリーブ灰色、断面は灰白色を呈する。86は瓦質土器鉢で、体部下

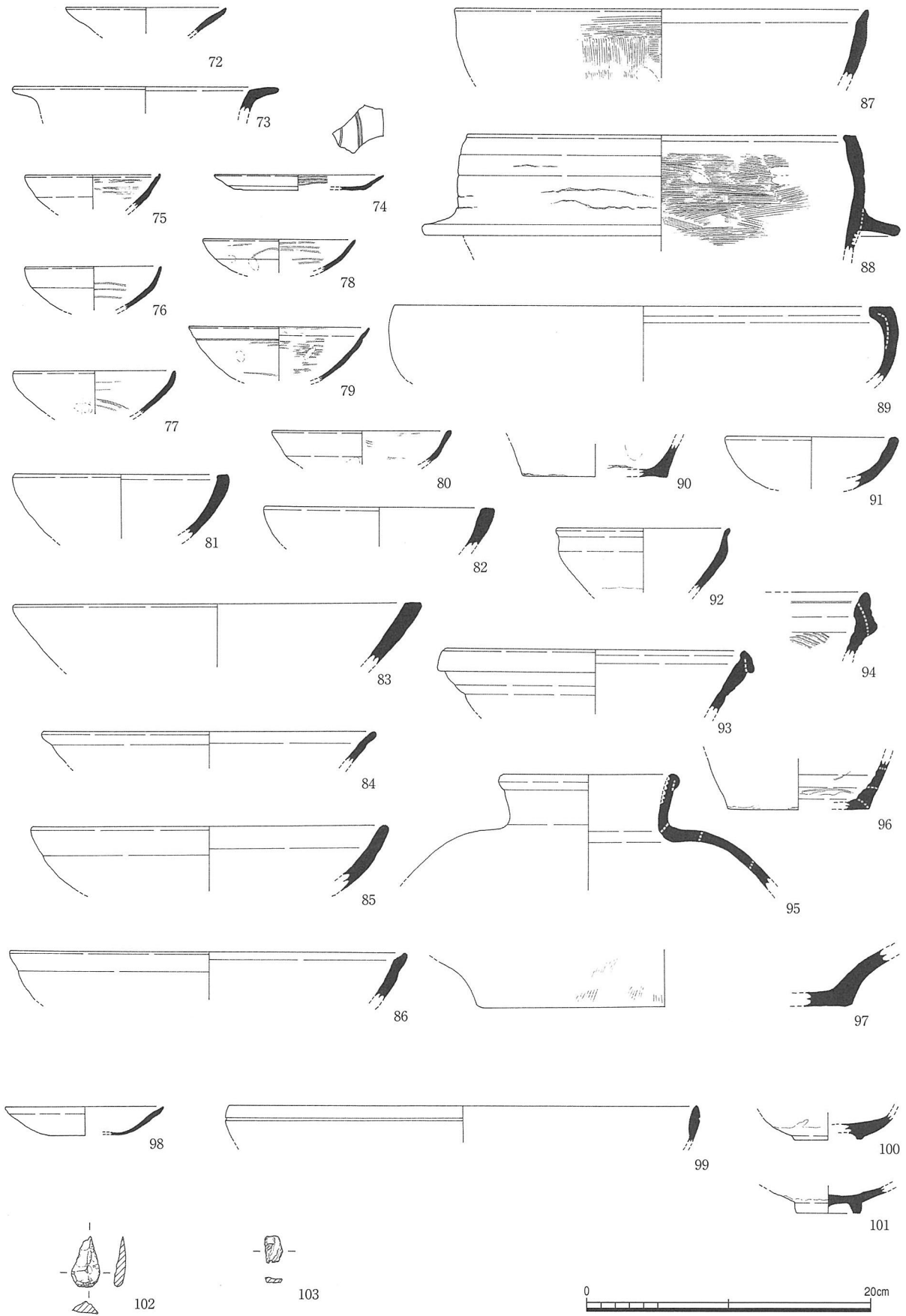


图15 出土遺物実測図5 (1:4)

半以下を欠く。体部上半は内湾して斜め上方に立ち上がり、口縁部は短く外反し、端部は内傾した幅広の面を為す。口径は28.3cmを測る。外面は淡黄色、内面は暗オリーブ灰色、断面は浅黄色を呈する。87は瓦質土器鉢で、体部下半以下を欠く。体部上半は内湾しつつ立ち上がり、口縁部は上方に伸び、内傾した幅広の端面を有する。口径は29.6cmを測る。内外面は灰色、断面は灰白色を呈する。88は瓦質土器羽釜で、体部上半以下を欠く。口縁部下端に斜め下方に突き出た鏝を巡らせる。口縁部は内傾して伸び、端部は上方に向いた面を有する。口縁部内面は横方向のハケメ調整を施す。口径は27.8cmを測る。外面はオリーブ黒色、内面はにぶい褐色、断面は灰白色を呈する。89は瓦質土器鉢で、体部下半以下を欠く。体部は肥厚しつつ内湾して立ち上がり、口縁端部は内方と上方が面を為す。口径は35.8cmを測る。内外面は黒褐色、断面は明褐灰色を呈する。90は瓦質土器鉢で、底部のみが遺存する。底部は平坦で、体部下半は直線的に斜め上方に立ち上がる。底径は10.4cmを測る。内外面は灰色、断面は灰白色を呈する。91は陶器鉢で、底部を欠く。体部は内湾して斜め上方に伸び、口縁端部は丸く収める。口径は12.3cmを測る。外面は明赤褐色、内面はにぶい赤褐色、断面はにぶい橙色を呈する。92は陶器鉢で、底部を欠く。体部は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は小さく膨らみ丸く収める。口径は12.4cmを測る。内外面はにぶい褐色、断面は灰白色を呈する。93は須恵質陶器鉢で体部下半以下を欠く。体部上半は外反気味に肥厚して斜め上方に伸び、口縁端部は粘土を折り返して玉縁を造る。口径は21.4cm、外面と断面は灰色、内面は灰白色を呈する。94は陶器挿鉢で、体部以下を欠く。口縁部は肥厚して斜め上方に伸び、端部は粘土を補って玉縁に造る。内外面は暗赤褐色、断面は灰白色を呈する。95は陶器甕で、体部以下を欠く。体部上半は内傾して伸び、頸部から口縁部は外反して斜め上方に直線的に伸びる。口縁端部は外方に折り曲げて玉縁を造る。口径は12.2cmを測る。外面はにぶい赤褐色、内面は褐灰色、断面は灰白色を呈する。96は陶器鉢で、体部下半が遺存した。底部は平坦で、体部下半は内湾気味に斜め上方に立ち上がる。外面は暗褐色、内面はにぶい赤褐色、断面はにぶい橙色を呈する。97は陶器甕で、底部が遺存する。底面は平坦で、体部下半は外反しつつ斜め上方に立ち上がる。底径は26.0cmを測る。外面は暗赤褐色、内面と断面は灰白色を呈する。98は土師器皿で、底部から体部下半は内湾しつつ斜め上方に立ち上がり、体部上半は肥厚して直線的に斜め上方に伸び、口縁端部を小さく摘み上げる。底部と体部の境に凹線、口縁端部内側に沈線が巡る。口径は11.3cm、器高は2.0cmを測る。99は土師質土器鉢で、体部以下を欠く。口縁部は内外に肥厚して上方に伸び、端部は丸く収める。口縁端部外面に凹線を巡らす。口径は33.5cmを測る。100は陶器鉢で、体部上半以上を欠く。底部内面は平坦で、造り出しの低い高台が付く。体部下半は内湾気味に斜め上方に伸びる。内外面は灰オリーブ色、断面はにぶい橙色を呈する。101は磁器椀で、体部以上を欠く。底部外面には断面逆台形の造り出し高台が付き、体部下半は低い位置で斜め横方向に直線的に立ち上がる。内外面は明オリーブ色、断面は浅黄橙色を呈する。102は石鏝で、押圧剥離痕がみられ、先端を鋭角的に加工している。材質はサヌカイトである。103は石器製作時の剥片とみられる。材質はサヌカイトである。

図16 (図版13-2・図版14-1・図版16)

104は土師器甕で、口縁部のみが遺存する。口縁部は頸部から外反して伸び、端部は緩く摘み上げる。口径は12.2cmを測る。内外面は灰黄色、断面は橙色を呈する。105は土師器甕で、口縁部のみが遺存した。口縁部は外反して短く伸び、端部は上方に軽く摘みあげる。内外面、断面いずれも浅黄橙色を呈する。106は土師器甕で、口縁部のみが遺存する。口縁部は外反気味に短く伸び、端部は上方に軽く摘み上げる。口径は29.0cmを測る。内外面、断面共に、にぶい黄橙色を呈する。107は須恵器蓋で、天井部を欠く。

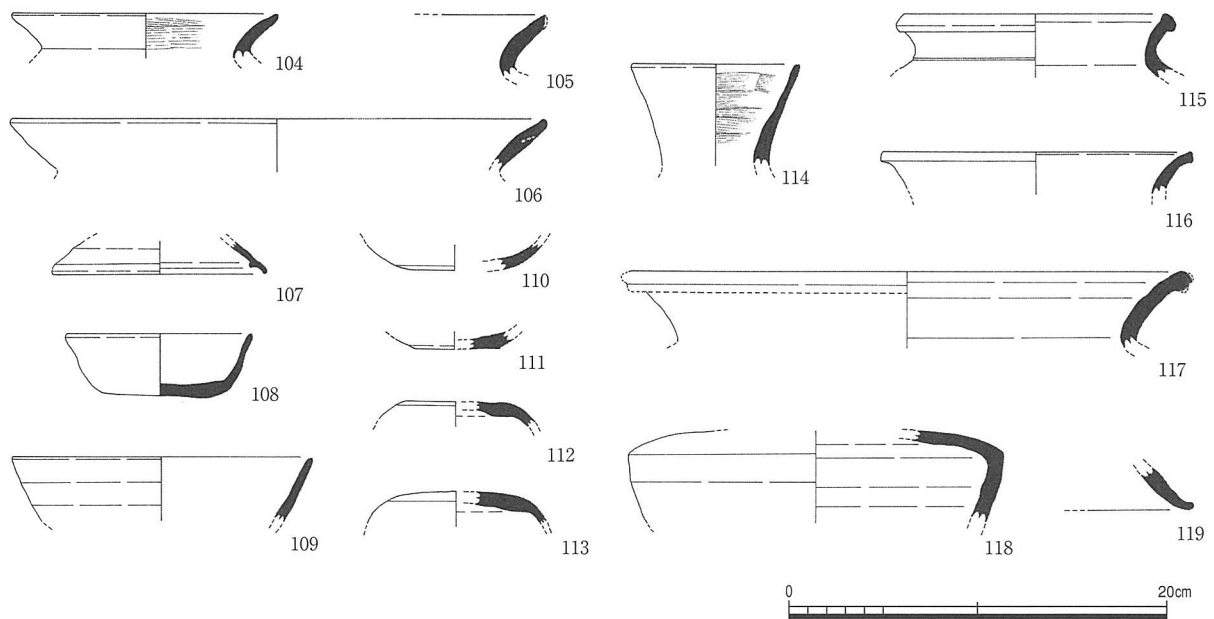


図16 出土遺物実測図6 (1:4)

体部から口縁部は斜め下方に直線的に伸び、端部は丸く収める。口縁部内面に退化したかえりが付く。口径11.4cmを測る。外面は灰色、内面と外面は灰白色を呈する。108は須恵器杯で、平坦な底面を持つ。底部から体部は内湾して斜め上方に立ち上がり、口縁部は緩く外反して、端部は丸く収める。口径は10.4cm、器高は3.6cmを測る。外面と断面は灰色、内面は灰白色を呈する。109は須恵器杯で体部下半以下を欠く。体部上半はわずかに内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に斜め上方に伸び、口縁端部は丸く収める。口径は16.2cmを測る。外面と断面は灰色、内面は灰白色を呈する。110は須恵器杯で体部下半のみが遺存する。体部下半は内湾して斜め上方へ立ち上がる。内外面が灰白色、断面は灰色を呈する。111は須恵器杯で、底部のみが遺存する。底面は平坦で、体部へは内湾気味に立ち上がる。内外面は灰白色、断面は灰色を呈する。112は須恵器蓋で、口縁部を欠く。天井部外面は平坦で、体部上半は内湾しつつ斜め下方に伸びる。内外面は灰白色、断面は灰色を呈する。113は須恵器蓋で、口縁部を欠く。天井部外面は内湾してやや丸く、体部上半は更に内湾して斜め下方に伸びる。内外面は青灰色、断面は暗灰色を呈する。114は須恵器壺で、口頸部のみが遺存する。頸部は外反気味に斜め上方に伸び、口縁部は直線的に斜め上方に伸びる。口縁端部は丸く収める。口径は9.0cmを測る。内外面、断面は灰白色を呈する。115は須恵器壺で、頸部から口縁部のみが遺存する。頸部から口縁部は短く外反して伸び、端部は肥厚して丸く収め、玉縁を造る。口径は13.5cmを測る。内外面、断面は共に灰白色を呈する。116は須恵器壺で、口縁部のみが遺存する。口縁部は外反して斜め上方に伸び、口縁端部は外方に面を有する。口径は16.8cmを測る。外面は青灰色、内面と断面はオリーブ灰色を呈する。117は須恵器甕で、口縁部のみが遺存する。口縁部は外反して斜め上方に伸び、端部は肥厚して外方に面を造る。端面に1条の凹線を巡らす。口径は29.8cmを測る。内外面は灰色、断面は灰白色を呈する。118は須恵器平瓶で、体部上半と天井裾部のみが遺存する。体部上半は内湾気味に斜め上方に伸び、肩部は大きく内側に屈曲して天井部を造る。肩部径20.2cmを測る。外面は灰オリーブ色、内面と断面は灰白色を呈する。119は土師器高杯で、脚部のみが遺存した。脚部下端は外反して斜め下方に伸び、端部は短く反り返り丸く収める。内外面、断面はにぶい黄橙色を呈する。

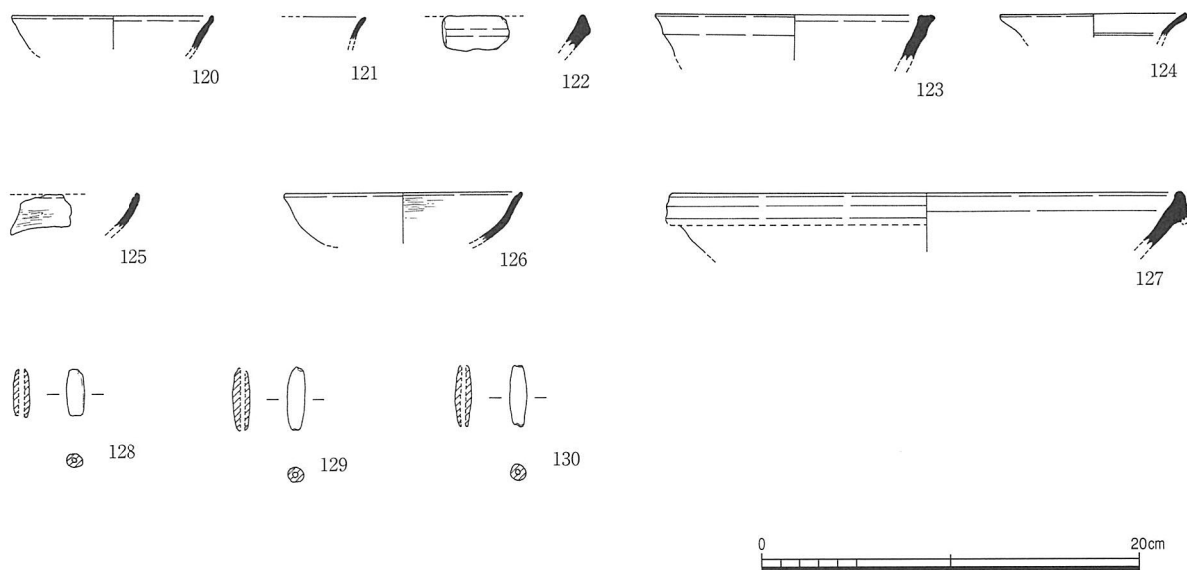


図17 出土遺物実測図7（1：4）

図17（図版14・図版16）

120は土師器杯で、体部下半以下を欠く。体部上半は外反気味に立ち上がり、口縁端部を摘み上げて丸く収める。口径は10.8cmを測る。外面は灰黄褐色、内面と断面はにぶい黄橙色を呈する。121は須恵器杯で、口縁部のみが遺存する。口縁部は外反して伸び、端部は丸く収める。内外面は灰白色、断面は灰色を呈する。122は須恵質陶器鉢で、口縁部のみが遺存する。口縁部は内湾気味に肥厚して伸び、端面は斜め上方に面を造り、玉縁状になる。内外面と断面は灰色を呈する。123は須恵質陶器鉢で、体部下半以下を欠く。体部上半は直線的に斜め上方に伸び、口縁端部は肥厚して上方に面を為す。口径は15.0cmを測る。内外面と断面は共に灰色を呈する。124は青磁皿で、口縁部のみが遺存する。口縁部は外反して斜め上方に伸び、端部は丸く収める。口縁部下端内面に沈線を巡らす。口径は11.8cmを測る。内外面は灰オリーブ色、断面は灰白色を呈する。125は瓦器椀で、口縁部のみが遺存する。口縁部は内湾気味に伸び、端部は上方に摘み上げ丸く収める。内外面と断面は灰白色を呈する。126は瓦器椀で底部を欠く。体部は内湾して斜め上方に伸び、口縁部はわずかに外反して、端部は上方に摘み上げ丸く収める。端部内面に沈線が巡る。口径は12.8cmを測る。外面は浅黄橙色、内面と断面は灰白色を呈する。127は須恵質陶器鉢で、口縁部のみが遺存する。口縁部は内湾気味に伸び、肥厚した端面が外方を向く。端面に浅い凹線を巡らす。口径27.6cmを測る。外面は灰色、内面と断面は灰白色を呈する。128～130は土師器土錘で、両端をすぼめた円筒状に造り、長軸中央に小孔を開ける。128が長軸長2.4cm、径1.0cm、129が長軸長3.4cm、径1.0cm、130が長軸長3.2cm、径1.0cmを測る。

## 第4章 自然科学による分析

### 花粉分析

#### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

本線地区の発掘調査では、調査区北半に旧谷遺構が検出され、谷溝下層が飛鳥時代末、上部が奈良・平安時代に埋没し、中世以降に谷の両翼が削平されて谷田などとして耕地化された状況が確認されている。ここでは、各時代の周辺環境を推定し、谷の堆積過程と利用状況を明らかにする目的で花粉分析を行った。

#### 2. 試料

分析試料は、本線地区1谷2トレンチ東壁および7トレンチ西壁（図6 本線地区平面実測図のA-B、C-D、以下同）から採取された計20点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

#### 3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

#### 4. 結果

##### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉28、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉32、シダ植物孢子2形態の計65である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。



#### 〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科？イヌガヤ科？ヒノキ科、ヤマモモ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属？アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属？ケヤキ、エノキ属？ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、ブドウ属、ハインキ属、トネリコ属、ツツジ科、ニワトコ属？ガマズミ属

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科？イラクサ科、バラ科、マメ科

#### 〔草本花粉〕

ガマ属？ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科？ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ワレモコウ属、ヒメハギ属、アカバナ科、アリノトウグサ属？フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ヒルガオ、シソ科、ナス科、ゴマ、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

#### 〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

#### (2) 花粉群集の特徴

##### 1) 2トレンチ東壁 (図18)

花粉組成の変遷から、下位よりⅠ～Ⅳの4帯を設定した。

Ⅰ帯 (9層～10層) : 10層では樹木花粉の占める割合が草本花粉よりもやや高く、9層では樹木花粉の占める割合が減少している。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が優占し、シイ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。草本花粉では、シソ科が優占し、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、セリ亜科、ベニバナなどが伴われる。

Ⅱ帯 (7層～8層) : 樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が増加しており、シソ科はあまり見られなくなっている。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属がやや増加している。

Ⅲ帯 (4層～6層) : 樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科が増加し、カヤツリグサ科は減少している。また、アリノトウグサ属？フサモ属、ソバ属、タンポポ亜科などが伴われる。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、スギが増加し、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属は減少している。

Ⅳ帯 (3層) : 樹木花粉より草本花粉の占める割合がかなり高い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科やソバ属が増加している。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属やシイ属がさらに減少している。

##### 2) 7トレンチ西壁 (図19)

花粉組成の変遷から、下位よりⅠ～Ⅲの3帯を設定した。

Ⅰ帯 (17層) : 樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。草本花粉では、イネ科やヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科、キク亜科、アリノトウグサ属？フサモ属、キク亜科、タンポポ亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属が比較的多く、スギ、ツガ属、モミ属、シイ属、クリなどが伴われる。

Ⅱ帯 (14層～16層) : 樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ属型を含むイ

ネ科が増加し、部分的にゴマも検出された。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が減少している。

Ⅲ帯（11層～12層）：樹木花粉より草本花粉の占める割合がかなり高い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科がさらに増加し、ソバ属も増加している。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属やシイ属が減少している。

## 5. 花粉分析から推定される植生と環境

### (1) 2 トレンチ東壁

飛鳥時代末とされる9層およびその下位の10層の堆積当時は、シソ科を主としてセリ亜科なども生育するやや湿潤な環境であったと考えられ、9層の時期にはイネ科やヨモギ属などが生育する日当たりの良い比較的乾燥したところも見られたと推定される。シソ科にはエゴマなどの栽培植物が含まれるが、同形態の種が多いことから栽培種の特定は困難である。なお、少量ながらベニバナが認められることから、周辺でベニバナが栽培されていた可能性が示唆される。遺跡周辺には、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）を主としてシイ属なども見られる照葉樹林が分布していたと推定される。

奈良～平安時代とされる8層～7層の堆積当時は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺では二次林要素であるナラ類（コナラ属コナラ亜属）がやや増加したと推定される。

中世とされる6層から4層にかけては、調査地点もしくはその近辺でイネやソバなどの栽培が行われていたと考えられ、カヤツリグサ科はあまり見られなくなったと推定される。また、遺跡周辺では植林と見られるスギや二次林要素であるマツ属（クロマツ・アカマツなど）が増加したと考えられ、ナラ類は減少したと推定される。3層の時期には、イネやソバなどの栽培地が拡大したと考えられ、遺跡周辺の照葉樹林は大幅に減少したと推定される。

### (2) 7 トレンチ西壁

飛鳥時代以降とされる17層の堆積当時は、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはカシ類やシイ属などの照葉樹林、二次林要素であるナラ類やマツ属（クロマツ・アカマツなど）、および植林と見られるスギなどが分布していたと推定される。

中世とされる16層から14層にかけては、調査地点もしくはその近辺でイネ、ソバ、ゴマなどの栽培が行われていたと考えられ、ナラ類は減少したと推定される。12層から11層にかけては、イネやソバなどの栽培地が拡大したと考えられ、遺跡周ではシイ属やナラ類はほとんど見られなくなったと推定される。

#### <文献>

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

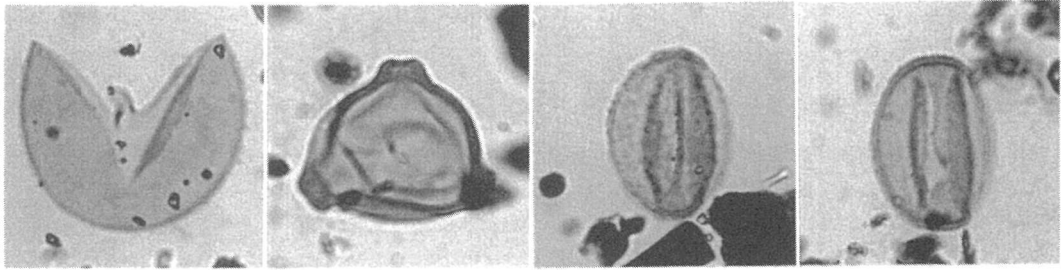
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

表1 花粉分析結果

学名	分類群	和名	2トレンチ東壁										7トレンチ西壁										
			3	4上	4下	5	6	7上	7下	8上	8中	8下	9	10	11	12上	12下	14	15	16	17上	17下	
Arboreal pollen		樹木花粉																					
<i>Abies</i>		モミ属			1	1	3	5	1	1	2	2	4	3	1	1	1	2	1	2	3	7	
<i>Tsuga</i>		ツガ属	1	2	3	2	12	11	3	2	1	4	5	1	3	1	5	4	6	8	4	11	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属榎榎管束亜属	22	23	29	26	20	6	13	7	9	5	7	1	21	15	20	33	27	22	46	35	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	24	29	22	29	20	5	6	7	13	4	6	4	13	18	32	15	25	16	32	21	
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ		1																1	1		
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌゲヤ科-ヒノキ科	5		1	2			1	3	4	1			1	1	1		1	1			
<i>Myrica</i>		ヤマモミ属	2						1					1									
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ		1				1	1	2						1	1				2		
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	4		2	3	3		1	4			2		5	6	3	4	4			1	
<i>Betula</i>		カバノキ属	1	2	3	4	1			4	5	2		3	5	2	5	4	5	7	1	2	
<i>Corylus</i>		ハシハミ属	1	2					1		1	2	1			4	2	1	4	1		1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	13	4	1	2	8	1	2	4	10	5	2	1	5	2	2	3	10	8	2		
<i>Castanea crenata</i>		クリ	1	4	2	1		3		1	7	2	2					2		2	3	7	
<i>Castanopsis</i>		シイ属	6	20	14	23	13	5	15	14	15	23	16	25	2	5	18	15	10	9	16	13	
<i>Fagus</i>		ブナ属					1	1		2	2	2	1					1	1	1	1	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	14	16	3	6	18	32	19	26	11	7	13	2	4	5	8	14	17	18	36	50	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	13	55	58	72	73	61	107	124	98	111	127	151	32	34	46	27	45	41	63	36	
<i>Ulmus-Zalkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	5	1	1	1	2		2	2	1	2	3		1	2	4	1	2	1	2	2	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	6	3	2				1	3	1	1	1	1	1	2	3	6	2	3	3		
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属	1		1				1				4										
<i>Ilex</i>		モチノキ属							1	1	2	6	1	1									
<i>Acer</i>		カエデ属				1				1													
<i>Aesculus turbinata</i>		トドノキ										1											
<i>Vitis</i>		ブドウ属										1										1	
<i>Symphoricarpos</i>		ハイノキ属	1						2		4	1	1	3		1							
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属				1				1	1												
<i>Ericaceae</i>		ツツジ科					1						1										
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニトコ属-ガマズミ属											2										
Arboreal-Nonarboreal pollen		樹木-草本花粉																					
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	1	1		3	5			5	5	1	3	2		1	1	1			3	4	
Rosaceae		バラ科					1						1	1									
Leguminosae		マメ科									1	1						1			2	2	
Nonarboreal pollen		草本花粉																					
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-クリ属				1		1								1							
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属						2	1	2	2	2	1								1		
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	1			1					1												
Gramineae		イネ科	119	137	91	126	85	31	44	74	86	81	49	8	155	128	137	123	147	99	122	83	
<i>Oryza type</i>		イネ属型	28	10	9	8				1			1		2	1	2	3	3			1	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	7	15	10	28	94	132	51	25	25	26	9	2	9	15	11	21	23	15	30	25	
<i>Eriocaulon</i>		ホシクサ属				1																	
<i>Aristida krusak</i>		イボクサ									1												
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属	1	1	1	7																	
<i>Polygonum</i>		タデ属								1													
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	2		2	1	8	9	8	2	4	1	2	1	1		1					1	
<i>Rumex</i>		ギンギン属	1																				
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属	45	12	14	5	1	1					1	23	19	22	12	3	2			1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒコ科	1	2	2				1		1	3	5		6	5	3	1			1		
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1	2					1		2	1			2			1				1	
Cruciferae		アブラナ科	1	5	1	1			1			1					1	2					
<i>Sanguisorba</i>		ワレモコウ属																	1			1	
<i>Polygala</i>		ヒメハギ属															1	1				1	
Onagraceae		アカバナ科								1	1	1	1	1									
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>		アリハトウグサ属-フサモ属	5	8	14	17	4			1	2	1	3	2		4	7	8	12	18	22	15	1
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科		1	1		3								1	2			1				
Apioidae		セリ亜科	5	7	3	4	1		1	6	7	19	18	14	6	14	8	8	3	1	5	3	
<i>Calyptegia japonica</i>		ヒルガオ				1																	
Labiatae		シソ科								3	15	8	94	95	2	1							
Solanaceae		ナス科																				2	
<i>Sesamum indicum</i>		ゴマ																	1				
Valerianaceae		オミナエシ科											1										
Lactucoideae		タンポポ科	5	6	12	2	1	3	6	2	2	2	1	1	3	3	8	4	5	10	7	6	
Asteroidae		キク亜科	7	3	4	5	4	4	4	1	4	9	1		4	5	7	9	10	11	19	18	
<i>Xanthium</i>		オナモミ属	2																		1		
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	36	32	56	21	38	37	102	51	61	63	36	3	34	23	40	35	45	45	42	53	
<i>Caryocampylus tinctorius</i>		ベニバナ											1	1									
Fern spore		シダ植物胞子																					
Monolate type spore		単条溝胞子	6	4	3	9	4	7	12	3	12	13	15	5	6	6	9	20	9	5	7	4	
Trilate type spore		三条溝胞子	26	34	30	30	30	12	9	3	10	10	10	1	10	28	38	19	30	34	37	33	
Arboreal pollen		樹木花粉	119	164	140	177	175	131	175	207	188	180	199	205	96	97	152	132	156	143	215	185	
Arboreal-Nonarboreal pollen		樹木-草本花粉	1	1	0	3	6	0	0	5	6	2	4	3	0	1	1	2	0	0	5	6	
Nonarboreal pollen		草本花粉	267	241	220	230	239	220	221	171	211	221	224	129	252	224	249	234	258	208	243	194	
Total pollen		花粉総数	387	406	360	410	420	351	395	383	405	403	427	337	348	322	402	368	414	351	463	385	
		試料1cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	8.4	1.3	1.5	2.7	3.0	3.2	2.5	3.3	1.0	1.4	7.4	1.2	1.3	1.4	1.7	1.5	1.3	3.1	4.8	1.5	
			$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	
Unknown pollen		未同定花粉	6	11	5	17	6	2	8	7	5	9	11	5	7	9	8	10	13	11	7	11	
Fern spore		シダ植物胞子	32	38	33	39	34	19	21	6	22	23	25	6	16	34	47	39	39	39	44	37	
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
		明らかでない消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	





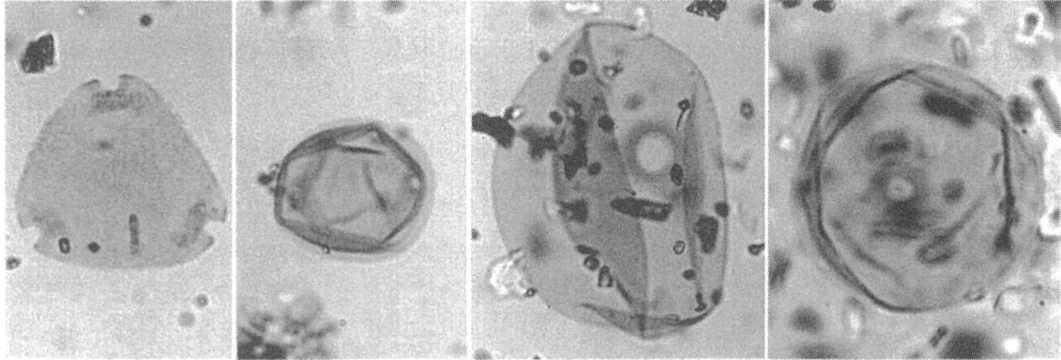


1 スギ

2 カバノキ属

3 コナラ属コナラ亜属

4 コナラ属アカガシ亜属

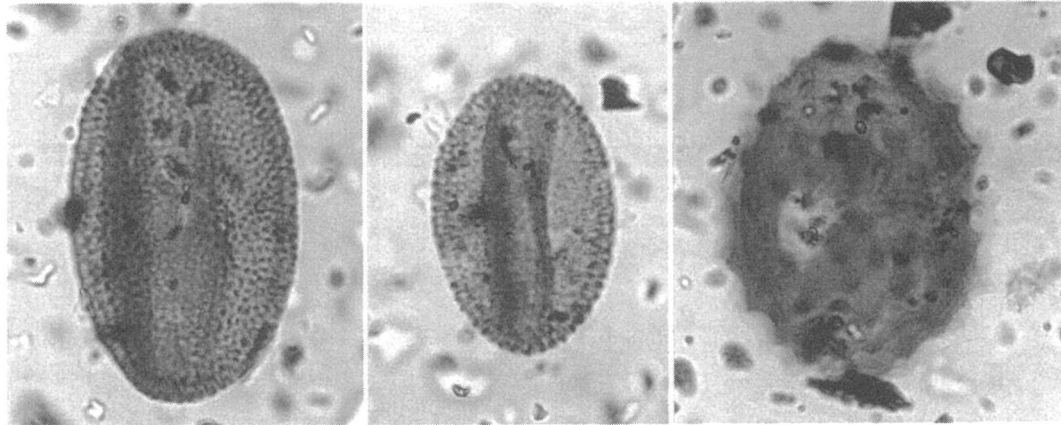


5 ハイノキ属

6 クワ科-イラクサ科

7 イネ科

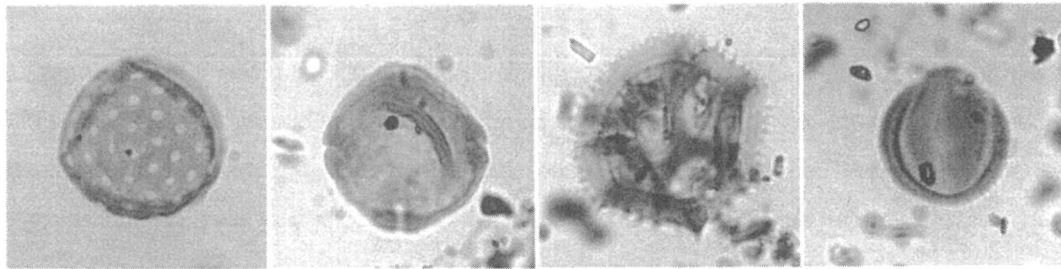
8 イネ属型



9 ソバ属

10 ソバ属

11 ベニバナ



12 アカザ科-ヒユ科

13 アリノトウグサ属  
-フサモ属

14 タンポポ亜科

15 ヨモギ属

—10 $\mu$ m

## 珪藻分析

### 1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

### 2. 試料

分析試料は、花粉分析に用いられたものと同じの計20点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

### 3. 方法

以下の手順で珪藻を抽出し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1 gを秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温しながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1000倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

### 4. 結果

#### (1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）70分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表2に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図20、21に示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

#### 〔貧塩性種〕

*Cymbella amphioxys*, *Cymbellana viculiformis*, *Cymbella silesiaca*, *Eunotia minor*, *Eunotia monodon* v. *tropica*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema pseudosphaerophorum*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema sphaerophorum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula cuspidata*, *Navicula mutica*, *Neidium* sp., *Pinnularia acrosphaeria*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia brandellii*, *Pinnularia gentilis*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia subcapitata*, *Pinnularia riaviridis*, *Pinnularia* sp., *Stauroneis anceps*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Stauroneis* sp., *Tabellaria fenestrata* - *flocculosa*.

#### (2) 珪藻群集の特徴

##### 1) 2トレンチ東壁 (図20)

各層準とも、貧塩性種（淡水生種）のみで構成されている。珪藻組成の変遷から、下位よりI~IVの4帯を設定した。

I帯（9層～10層）：陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*が優占し、止水性種で沼沢湿地付着生の*Eunotia minor*、*Stauroneis phoenicenteron*、流水性種の*Gomphonema parvulum*、流水不定性種の*Gomphonema minutum*、*Navicula cuspidata*などが伴われる。

II帯（7層～8層）：上位にむかって珪藻密度が高くなり、下位の分帯で優占していた陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*が激減し、流水性種の*Gomphonema parvulum*も検出されなくなる。かわって、止水性種で沼沢湿地付着生種の*Tabellaria fenestrata-flocculosa*が優占し、*Eunotia minor*や止水性種の*Eunotia monodon* v. *tropica*、陸生珪藻の*Pinnularia borealis*などが伴われる。

III帯（4層～6層）：珪藻密度は低く、流水性種の*Gomphonema parvulum*が再び低率で出現する。止水性種で沼沢湿地付着生種の*Stauroneis phoenicenteron*、*Eunotia minor*、止水性種の*Pinnularia microstauron*が出現し、不定性の*Stauroneis anceps*や陸生珪藻の*Pinnularia borealis*などが伴われる。

IV帯（3層）：珪藻密度はやや高くなり、沼沢湿地付着生種の*Cymbella naviculiformis*を主に*Pinnularia gibba*、止水性種でもある*Stauroneis phoenicenteron*、*Pinnularia acrosphaeria*が出現する。

## 2) 7トレンチ西壁 (図21)

各層準とも、貧塩性種（淡水生種）のみで構成されている。珪藻組成の変遷から、下位よりI、IIの2帯を設定した。

I帯（12層～17層）：珪藻密度が非常に低く、沼沢湿地付着生種を主とする貧塩性種（淡水生種）がわずかに出現する。

II帯（11層）：陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*、不定性の*Cymbella silesiaca*、止水性種で沼沢湿地付着生の*Gomphonema gracile*などが出現する。

## 5. 珪藻分析から推定される堆積環境

### (1) 2トレンチ東壁

飛鳥時代末とされる9層およびその下位の10層の堆積当時は、陸生珪藻が多く生育するような湿潤な陸域の環境であったと考えられ、流水ないし止水域の影響も受けていたと推定される。奈良～平安時代とされる8層～7層の堆積当時は、一時的に滞水するような環境であったと考えられ、陸生珪藻が生育するような湿潤な陸域も分布していたと推定される。

中世とされる6層より上位では、陸生珪藻、流水不定性種、沼沢湿地付着生等の止水性種など多様な分類群が認められることから、乾燥地、湿地、沼沢地の複合した水田ないし水田と畑で輪換するような複雑な堆積環境が想定される。

### (2) 7トレンチ西壁

飛鳥時代とされる18層から中世とされる12層にかけては、珪藻密度が低いことから堆積環境の推定は困難である。珪藻密度が低い原因としては、珪藻の生育できない乾燥した環境であったことや、土層の堆積速度が速かったこと、および流水によって珪藻が淘汰されたことなどが考えられる。なお、少量ながら沼沢湿地付着生種が認められることから、一時的に沼沢湿地の影響を受けていた可能性が示唆される。

中世とされる11層では、陸生珪藻、流水不定性種、沼沢湿地付着生等の止水性種など多様な分類群が認められることから、乾燥地、湿地、沼沢地の複合した水田ないし水田と畑で輪換するような複雑な堆積環境が想定される。



《文献》

- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische undologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.
- Patrick, R. eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.
- Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.
- Patrick, R. eimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.
- Asai,K.&Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35-47.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義? わが国への導入とその展望?. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.

表2 珪藻分析結果

分類群	2トレンチ東壁										7トレンチ西壁									
	3	4上	4下	5	6	7上	7下	8上	8中	8下	9	10	11	12上	12下	14	15	16	17上	17下
貧塩性種 (淡水生種)																				
<i>Amphora copulata</i>				1									1							
<i>Anomooneis brachysira</i>					1															
<i>Caloneis hyalina</i>					1															
<i>Caloneis silicula</i>	1																			
<i>Cymbella amphioxys</i>						3	2						3	1			1			
<i>Cymbella gracilis</i>													1							
<i>Cymbella naviculiformis</i>	12	2	1	1								1		1	2	1				
<i>Cymbella silesiaca</i>	3												6							
<i>Cymbella tumida</i>				1																
<i>Diploneis</i> sp.												1								
<i>Eunotia arcus</i>				1																
<i>Eunotia bilunaris</i>																				1
<i>Eunotia didon</i>	1											1								
<i>Eunotia fallax</i> v. <i>groenlandica</i>				3			1													
<i>Eunotia formica</i>				1																
<i>Eunotia gracialis</i>		1		1		1														
<i>Eunotia gracilis</i>							2													
<i>Eunotia minor</i>	2	6		5		7	2	1			8	2	2						1	
<i>Eunotia monodon</i> v. <i>tropica</i>						8	6	1	2											
<i>Eunotia parallela</i>		1																		
<i>Eunotia praerupta</i>							3					1								
<i>Eunotia septentrionalis</i>							1													
<i>Eunotia soleirolii</i>	1																			
<i>Eunotia</i> sp.		2																		
<i>Fragilaria capucina</i>				1																
<i>Frustulia rhomboides</i>	1																			
<i>Frustulia rhomboides</i> v. <i>saxonica</i>						1					2					1				
<i>Gomphonema angustum</i>											2									
<i>Gomphonema augur</i>	1	1																		
<i>Gomphonema clavatum</i>		1																		
<i>Gomphonema globiferum</i>	1	1																		
<i>Gomphonema gracile</i>	1		1				1				3	1	5		1					
<i>Gomphonema minutum</i>											10									
<i>Gomphonema parvulum</i>	1	1	2	1	1						7	2	2	1						
<i>Gomphonema pseudoaugur</i>											4	1								
<i>Gomphonema pseudosphaerophorum</i>													3							
<i>Gomphonema sphaerophorum</i>				2							2		3		1	2	2			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	4	4	1	2		1	2		1		34	17	1							
<i>Meridion circulare</i> v. <i>constrictum</i>											1									
<i>Navicula bacillum</i>	1																			
<i>Navicula contenta</i>						1														
<i>Navicula cuspidata</i>							1				7	1	1		1	1				
<i>Navicula elginensis</i>						1	1													
<i>Navicula mutica</i>	4	1	1	1			1				4	3	7							
<i>Navicula saxophila</i>						1														
<i>Neidium amphiatum</i>	1																			
<i>Neidium hercynicum</i>			1																	
<i>Neidium iridis</i>				2		1														1
<i>Neidium</i> sp.													1	1						
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	6	3	1	1									2							
<i>Pinnularia borealis</i>	3	1		3		2	8	3			2	4	7	1			1	1	2	
<i>Pinnularia brandeii</i>							1	1	2		3	3								
<i>Pinnularia gentilis</i>						1	1	1	3											
<i>Pinnularia gibba</i>	5	2		3		2	1				2	3	3	1					1	
<i>Pinnularia hemiptera</i>		1		1																
<i>Pinnularia major</i>								1												
<i>Pinnularia microstauron</i>	3	1		5			2				2									
<i>Pinnularia pulchra</i>				1																
<i>Pinnularia</i> sp.											1		3							
<i>Pinnularia subcapitata</i>			1									1	1	1						
<i>Pinnularia viridis</i>	1		1			1	2	1	1		1	2	1		1		1			
<i>Rhopalodia gibba</i>													1							
<i>Rhopalodia gibberula</i>	1																			
<i>Stauroneis anceps</i>	3	1		4	1	1						1	2							
<i>Stauroneis nobilis</i>														1						
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	5	1		7	2	3	2	5			9	3	1		2	1	1	1		
<i>Stauroneis</i> sp.		1		2		2		1												
<i>Surirella angusta</i>												2								
<i>Surirella ovata</i>	1																			
<i>Tabellaria fenestraia-flocculosa</i>				1		17	13	9									1	1		1
合計	63	32	10	51	6	54	53	23	10	0	104	50	57	8	8	6	9	3	4	1
未同定	17	4	2	5	0	3	0	6	4	0	6	3	10	2	0	0	1	0	0	1
破片	71	29	6	100	5	134	164	110	40	1	75	37	104	2	4	6	14	7	18	7
試料 1 cm <sup>2</sup> 中の殻殻密度	1.3	5.8	8.0	4.3	1.2	1.5	6.2	2.3	5.6	0.0	7.5	1.6	1.0	5.6	3.2	2.4	5.6	8.0	1.6	8.0
	$\times 10^5$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^5$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^3$		$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^5$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^2$	$\times 10^3$	$\times 10^2$
完形殻保存率 (%)	53.0	55.4	66.7	35.9	54.5	29.8	24.4	20.9	25.9	(-)	59.5	58.9	39.2	83.3	66.7	50.0	41.7	30.0	18.2	22.2

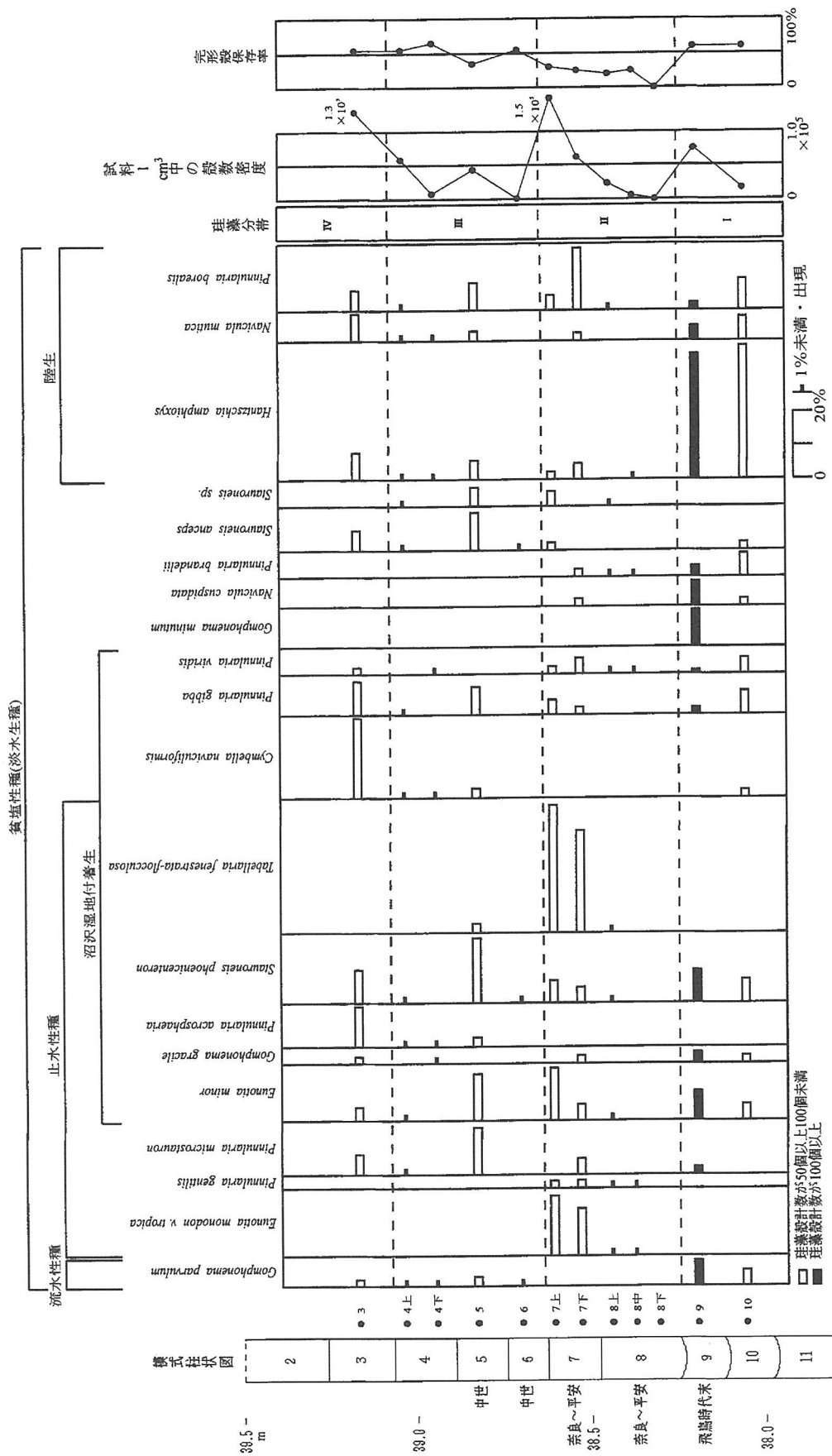


図20 2トレンチ東壁における主要珪藻ダイアグラム

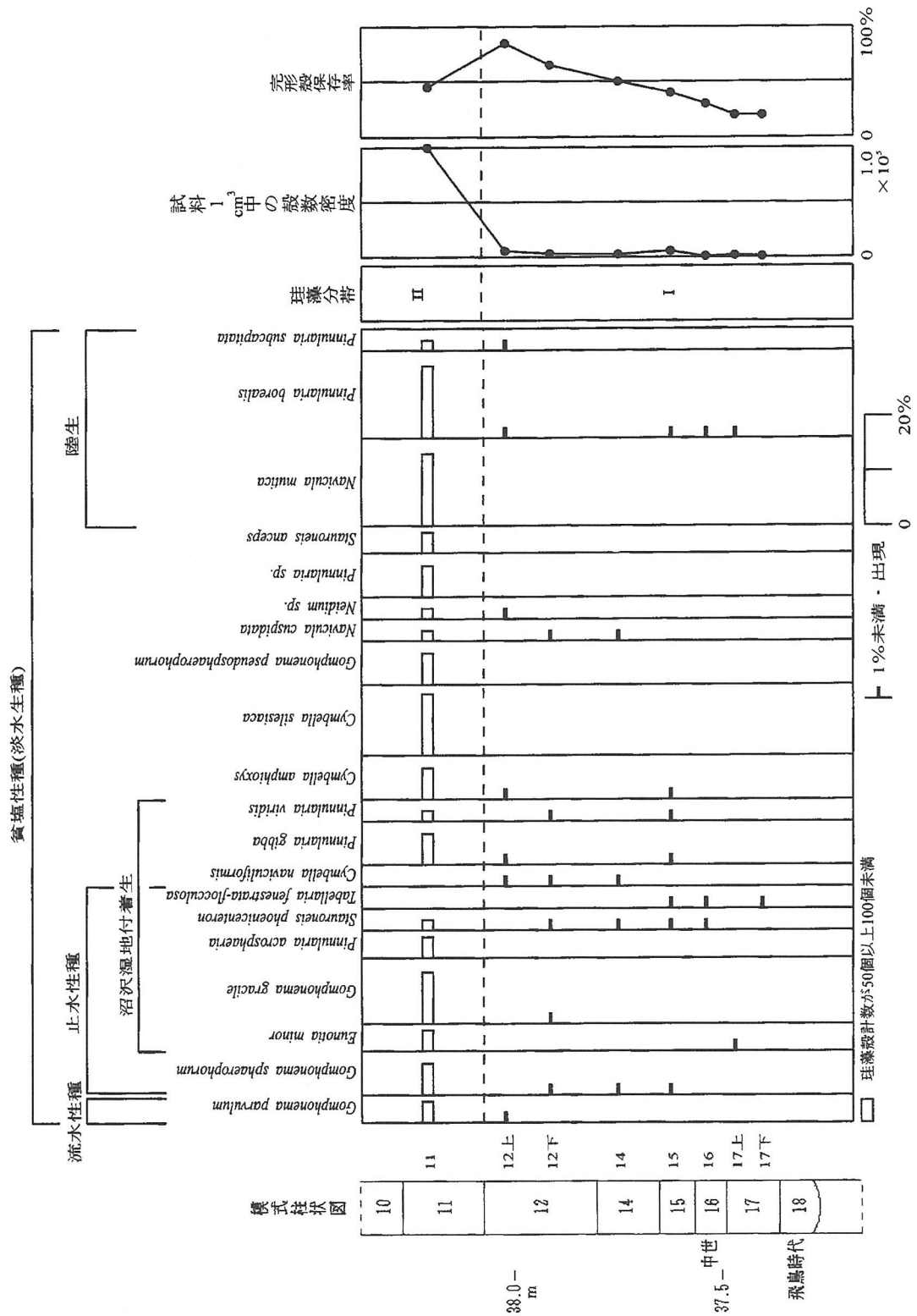
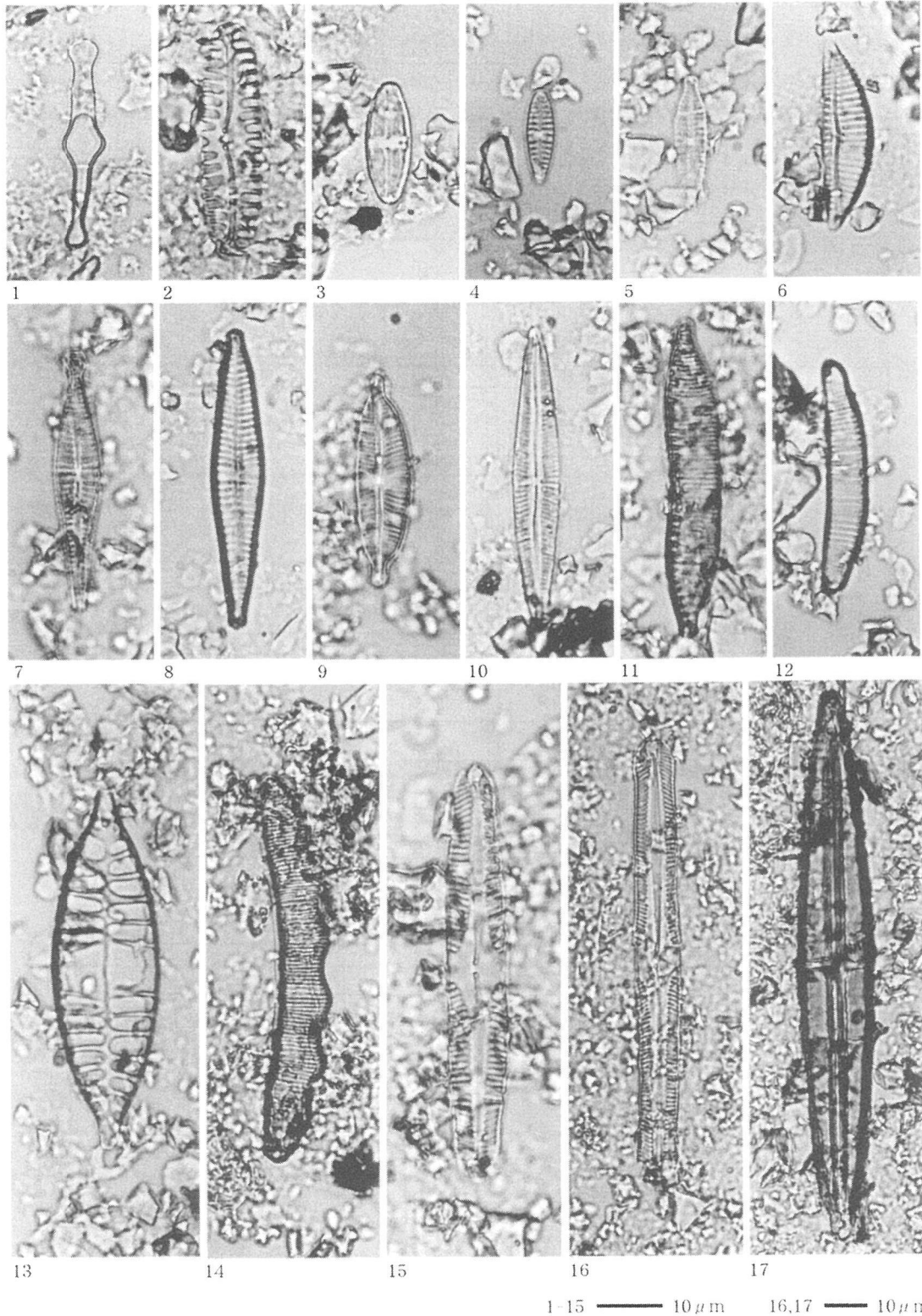


図21 7 トレンチ西壁における主要珪藻ダイアグラム



1. *Tabellaria fenestrata - flocculosa* 2. *Pinnularia borealis* 3. *Navicula mutca* 4. *Gomphonema minutum* 5. *Gomphonema parvulum*  
 6. *Cymbella silesiaca* 7. *Gomphonema sphaerophorum* 8. *Gomphonema gracile* 9. *Cymbella naviculiformis* 10. *Cymbella amphioxys*  
 11. *Hantzschia amphioxys* 12. *Eunotia minor* 13. *Navicula cuspidata* 14. *Eunotia monodon v. tropica* 15. *Pinnularia microstauron*  
 16. *Pinnularia gibba* 17. *Stauroneis phoenicenteron*

写真2 珪藻

## 植物珪酸体分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

### 2. 試料

分析試料は、花粉分析に用いられたものと同じの計20点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1 g に対し直径約40  $\mu\text{m}$  のガラスビーズを約0.02 g 添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20  $\mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1 gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-5}$  g) をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

### 4. 分析結果

#### (1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表3および図22、図23に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ムギ類 (穎の表皮細胞)、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)、ウシクサ族B (大型)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科 (シイ属)、ブナ科 (アカガシ亜属)、クスノキ科、その他

## (2) 植物珪酸体の検出状況

### 1) 2トレンチ東壁 (図22)

最下位の10層では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ウシクサ族A、メダケ節型、ミヤコザサ節型なども検出された。また、ブナ科 (シイ属) などの樹木 (照葉樹) も多く検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。9層では、ネザサ節型が増加しており、ヨシ属は見られなくなっている。8層から5層にかけても、おおむね同様の結果であるが、部分的にイネ、シバ属、ススキ属型が検出された。イネの密度は700~800個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを下回っている。なお、ブナ科 (シイ属) はやや減少している。

4層から3層にかけては、イネが増加しており、ムギ類 (穎の表皮細胞) 検出された。イネの密度は4層上部では2,900個/gと比較的高い値である。ムギ類 (穎の表皮細胞) の密度は700~1,400個/gであるが、穎 (籾殻) は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。なお、3層ではブナ科 (シイ属) などの照葉樹はあまり見られなくなっている。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にネザサ節型が優勢となっている。

### 2) 7トレンチ西壁 (図23)

最下位の17層ではネザサ節型が多く検出され、シバ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ミヤコザサ節型、および樹木 (照葉樹) のブナ科 (シイ属) なども検出された。16層から14層にかけても、おおむね同様の結果であるが、各試料からイネが検出された。イネの密度は700~1,400個/gと比較的低い値である。

12層から11層にかけては、イネが増加しており、ムギ類 (穎の表皮細胞) も検出された。イネの密度は11層では2,900個/gと比較的高い値である。また、ムギ類 (穎の表皮細胞) の密度は700~1,400個/gである。

おもな分類群の推定生産量によると、全体的にネザサ節型が優勢となっている。

## 5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

### (1) 2トレンチ東壁

飛鳥時代末とされる9層およびその下位の10層の堆積当時は、メダケ属 (おもにネザサ節) などのタケ亜科を主体としたイネ科植生であったと考えられ、部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。また、調査区周辺にはシイ属などの照葉樹林が分布していたと考えられる。奈良~平安時代とされる8層から中世とされる5層にかけても、おおむね同様の状況であったと考えら

れるが、この時期には周辺で稲作が行われていたと推定される。また、調査区周辺では照葉樹林が減少したと考えられ、部分的にススキ属やチガヤ属、シバ属などが生育する草原的なところも見られたと推定される。

中世以降とされる4層～3層の時期には、稲作とともにムギ類の栽培も行われていたと考えられ、照葉樹林はあまり見られなくなったと推定される。

## (2) 7トレンチ西壁

飛鳥時代以降とされる17層の堆積当時は、メダケ属（おもにネザサ節）などのタケ亜科を主体としてススキ属やチガヤ属、シバ属なども見られるイネ科植生であったと考えられ、調査区周辺にはシイ属などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

中世とされる16層から14層にかけても、おおむね同様の状況であったと考えられるが、この時期には周辺で稲作が行われていたと推定される。また、12層から11層にかけては、稲作とともにムギ類の栽培も行われていたと考えられる。

## ＜文献＞

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38（2），p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.



表3 植物珪酸体分析結果

抽出密度 (単位: ×100個/g)	分類群	学名	2トレンチ菓壁							7トレンチ西壁													
			3	4上	4下	5	6	7上	7下	8上	8中	8下	9	10	11	12上	12下	14	15	16	17上	17下	
	イネ科	Gramineae (Grasses)																					
	イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	21	29	15	7	7	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
	ムギ類(穎の表皮細胞)	<i>Fiordeum-Triticum</i> (husk Phytolith)	14		7																		
	キビ族型	Panicaceae type																					7
	ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)																					
	シバ属	<i>Zostera</i>	14	44	37	29	7	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	
	ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	7	7	7	15	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
	ウシクサ族A	Andropogoneae A type	14	29	44	20	29	81	15	14	7	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	
	ウシクサ族B	Andropogoneae B type	7	7	7	15	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
	タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																					
	メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	14	29	81	36	47	15	15	15	23	29	56	21	72	49	29	35	43	36	131	29	
	ネサガサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	240	241	332	284	196	117	220	75	113	243	288	124	144	238	205	183	171	259	305	222	
	クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )		15	15	15	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
	ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	28	15	15	14	14	22	15	8	7	21	7	14	14	14	29	14	7	29	7	7	
	未分類等	Others	70	80	66	102	74	73	81	30	38	79	119	41	65	119	146	126	107	137	123	65	
	その他のイネ科	Others																					
	表皮毛起源	Husk hair origin	14	29	29	15	15	7	7	8	14	14	7	29	14	14	14	14	14	14	14	22	
	棒状珪酸体	Rod-shaped	78	255	221	175	142	66	161	7	15	86	155	55	259	378	366	302	171	201	479	244	
	未分類等	Others	226	306	317	371	277	270	374	60	150	351	380	338	381	483	614	443	420	481	544	445	
	樹木起源	Arboreal																					
	ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	7	22	37	44	20	58	37	52	23	93	141	124	79	56	80	91	36	72	29	50	
	ブナ科(アカガシ亜属)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>																					
	クスノキ科	Lauraceae	7	15	22	36	20	15	29	7	36	84	48	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
	その他	Others	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
	(海綿骨針)	Sponge	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
	植物珪酸体総数	Total	761	1095	1194	1202	818	657	1042	285	390	959	1258	794	1165	1422	1609	1230	1019	1315	1684	1133	
	おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m <sup>2</sup> ・cm)																						
	イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.62	0.86	0.43	0.21	0.20	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	
	ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)																					
	ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.09	0.09	0.18	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	
	メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	0.16	0.34	0.94	0.42	0.55	0.17	0.17	0.26	0.33	0.65	0.24	0.83	0.57	0.34	0.41	0.50	0.42	1.52	0.33	0.33	
	ネサガサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	1.15	1.16	1.59	1.36	0.94	0.56	1.06	0.54	1.17	1.38	0.60	0.69	1.14	0.98	0.88	0.82	1.24	1.46	1.07	1.07	
	クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )																					
	ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.08	0.04	0.11	0.11	0.05	0.07	0.04	0.02	0.02	0.06	0.02	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.02	
	タケ亜科の比率 (%)																						
	メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	12	22	36	22	36	22	13	30	32	21	30	28	53	32	24	31	36	24	50	23	
	ネサガサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	82	75	60	70	61	71	82	62	66	74	64	70	44	65	70	66	59	71	48	75	
	クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )			4	6	6	7			3	2						4			2		
	ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	6	3		2	3	5	8	3	1	3	2	3	3	2	6	3	2	5	5	2	

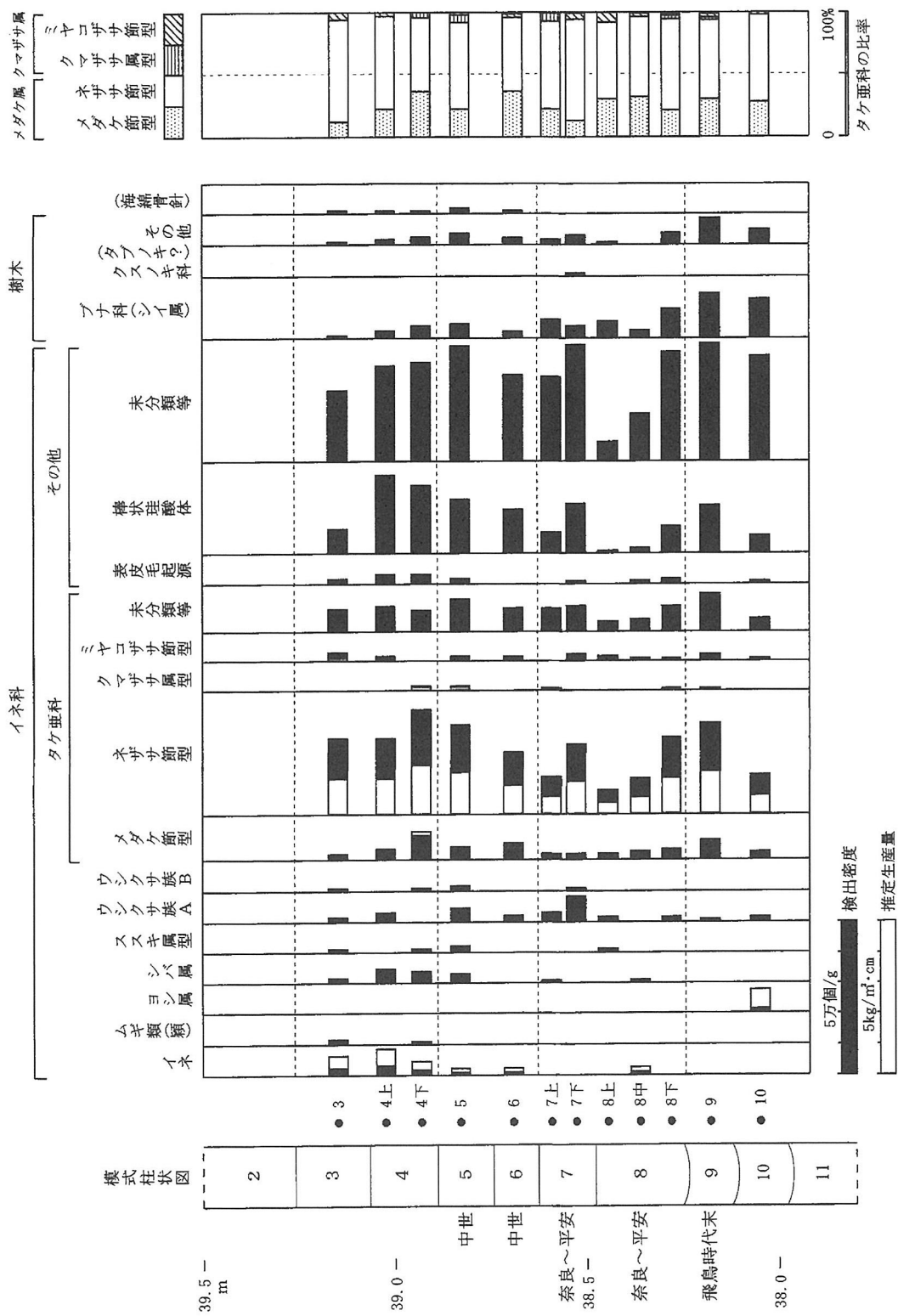


図22 2 トレンチ東壁における植物珪酸体分析結果

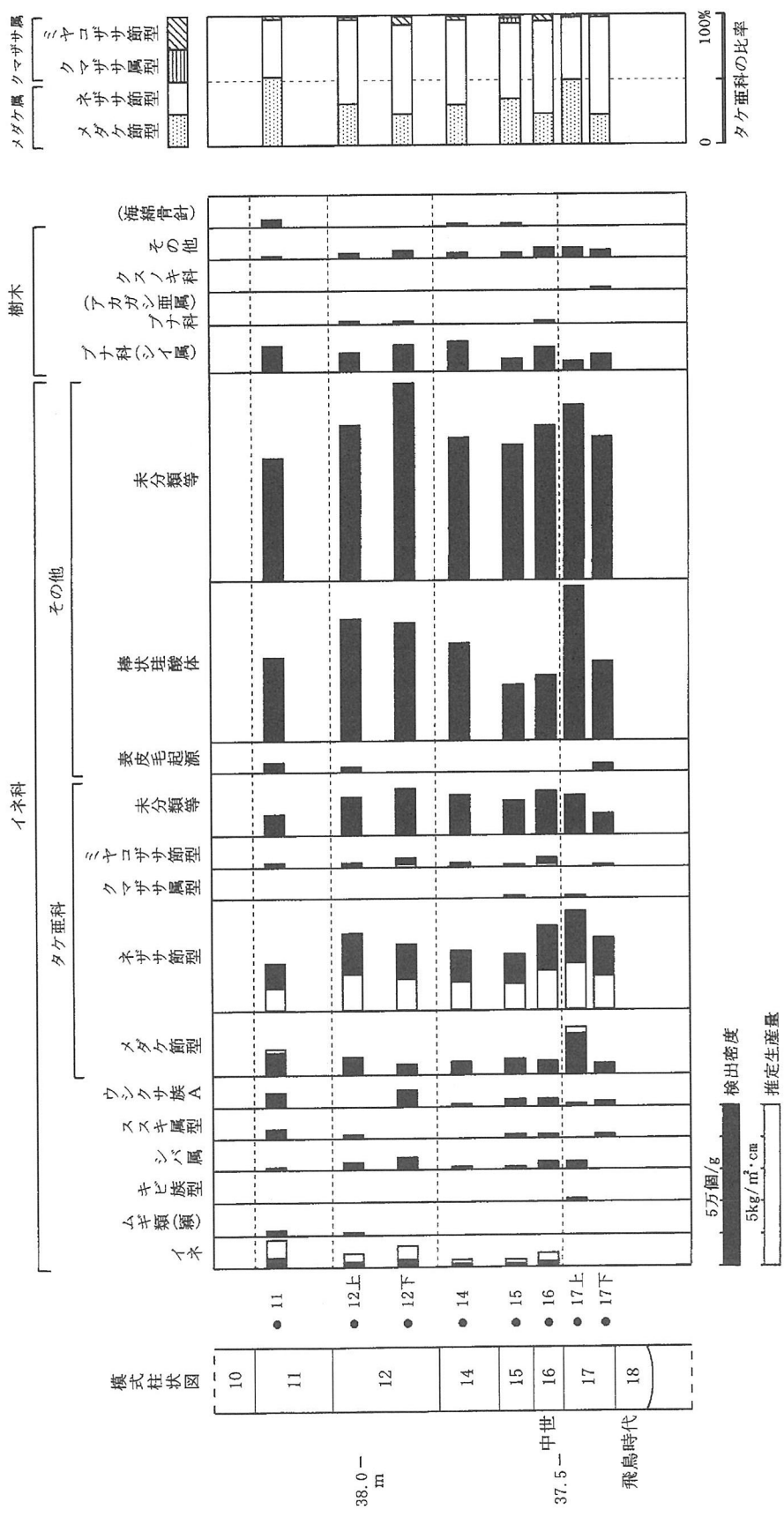
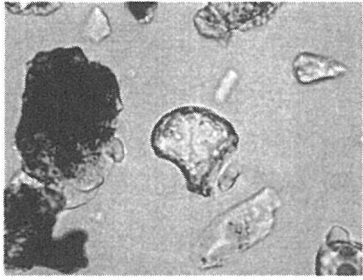
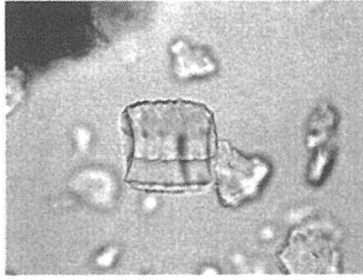


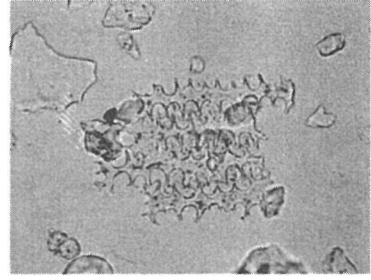
図23 7 トレンチ西壁における植物珪酸体分析結果



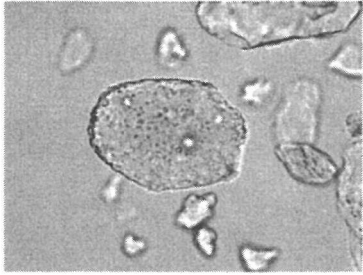
イネ  
7トレンチ西壁 12上



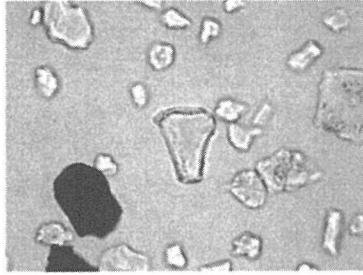
イネ(側面)  
7トレンチ西壁 11



ムギ類(穎の表皮細胞)  
7トレンチ西壁 11



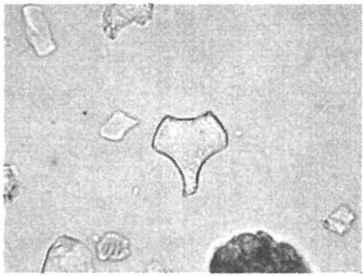
ヨシ属  
2トレンチ東壁 10



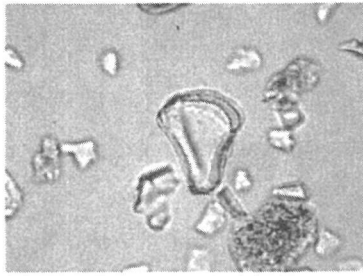
ススキ属型  
7トレンチ西壁 11



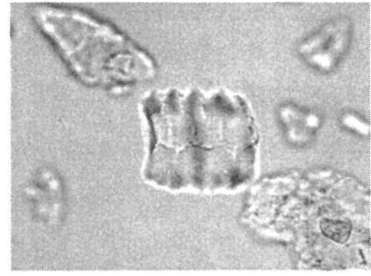
ウシクサ族B  
2トレンチ東壁 3



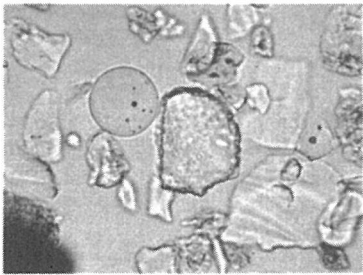
シバ属  
2トレンチ東壁 4下



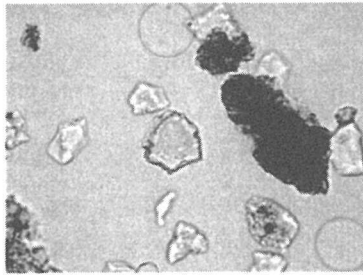
メダケ節型  
7トレンチ西壁 17上



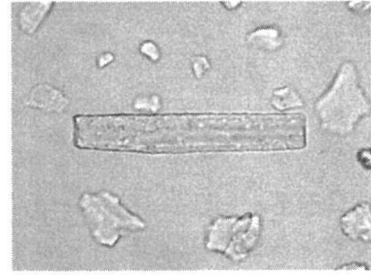
ネザサ節型  
7トレンチ西壁 12下



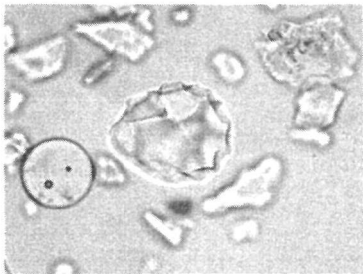
クマザサ属型  
7トレンチ西壁 12上



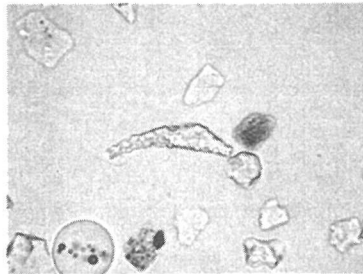
ミヤコザサ節型  
2トレンチ東壁 3



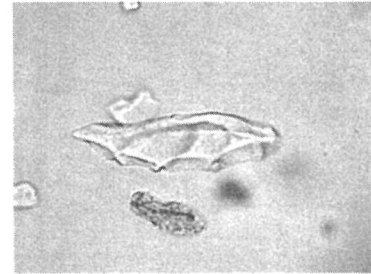
棒状珪酸体  
2トレンチ東壁 9



ブナ科(シイ属)  
7トレンチ西壁 15



アカガシ亜属  
7トレンチ西壁 12上



クスノキ科  
7トレンチ西壁 12下

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

50 μm

写真3 植物珪酸体(プラント・オパール)

## 第5章 まとめ

本線地区の調査では、平成14年度調査で検出した建物跡群の南側の谷地形と丘陵斜面を確認した。谷の底には、貯水が可能な施設（図6 本線地区平面実測図、落込み遺構）が検出された。用水の確保と安定供給などを目途とした集落の生産活動の一端を担った施設とみることもできよう。左岸である谷の南側にも、水際や斜面に飛鳥時代の土坑、溝が検出されることから、右岸に展開する集落と不可分な、なんらかの施設が存在した可能性は極めて高い。しかし、近世に至って、谷幅に制約されない、斜面や丘陵に対する大規模な耕作地造成による削平を受けたことにより、遺構の遺存が果たせなかったものとみられよう。

本線地区で検出した谷は、平成14年度調査区北側に検出した谷と西側直近で合流するとみられる。このことから、集落は、谷と谷の合流する先端の微高地で、かつ独立性が高く、高燥な場所を撰地して営まれたことが明らかになった。調査地周辺には、開析谷が入り込み、谷と谷の合流する先端微高地を形成する相似した地形が複数箇所を確認できることから、こういった地形の認められる地区に、集落遺跡の発見される可能性が極めて高いとみられる。

また、東側谷底部で1箇所（2トレンチ断面）、中央部の谷底部で1箇所（7トレンチ断面）について試料を採取し、花粉、珪藻、植物珪酸体の分析を（株）古環境研究所に委託実施した。分析の結果、調査で時期比定した各堆積土層の時期補完と周辺域の古環境の復元により、土地開発の過程がより明確化した。

飛鳥時代の周辺域では、栽培種であるシソ、ソバ、ベニバナが確認されているが、イネ、ムギは極めて少なく、中世以降にイネ、ムギの試料が増加する。飛鳥時代には、ナラ、ブナ、クリなどの広葉樹が繁茂するが、中世以降にマツ、スギなどの針葉樹が増加することなどが明らかになった。これらのことから、飛鳥時代の集落に近い地区には主要な生産活動の場所は設定されておらず、集落をやや離れた下流域に生産活動の場を設定していた可能性が高いものとみられる。

寝屋4号線調査地区は、たち川と北谷川に挟まれた丘陵の南端に位置している。調査では、谷と建物を検出した。谷は南東方向から北西方向に向って開口する。建物は、谷の右岸にあたる5区の丘陵端で1棟、1区の微高地で1棟を確認した。このことから、谷の北側一帯に集落跡の中心があり、その南端に接した地区を調査したとみられる。また1区建物のある微高地は、位置的に谷の左岸域にあり、東へ伸びる微高地を形成しているため、この先端地区にも集落が営まれていた可能性がある。

しかしこの東側微高地は開析作用や中世以降の造成・耕作による削平を受け、遺構の多くは遺存しないとみられるが、柱穴などの深い遺構に限れば、なおも遺存する可能性は皆無ではなからう。

検出した建物2棟の時期差の有無については、判断の資料が限られている。現時点では、建物の規模・主軸方向から同時期のものとみるのが自然であろう。建物2の北方にみつかった5ピットに関しては、掘方の形状や深さなどに建物1・2とは差異が認められる。これが時期差によるのか、個別の遺構の性格によるものかは、近隣や周辺の調査で得られた類例遺構や、遺構の立地する地形条件などを付加して、比較検討する必要がある。

表4 遺物一覧表

本線地区(03-1)													
番号	器種	器形	口径	手法	胎土	焼成	色調			地区	遺構	時代	図番号
							外面	内面	断面				
1	土師器	椀	10.4	横ナデ	密	良好	灰黄色 2.5YR7/2	灰黄色 2.5YR7/2	灰色5Y6/1	140-2a	1谷60土坑	飛鳥	11
2	土師器	皿	13.7	ナデ	密	良	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい褐色 7.5YR7/3	にぶい褐色 7.5YR6/3	140-1c	1谷	飛鳥	11
3	土師器	杯	15.7	摩滅著しく調整 不明	やや良、0.5~1.5mmの石粒と 赤色粒含む	軟	橙色5YR6/6	橙色5YR6/6	淡橙色5YR8/3	130-8e	17溝	飛鳥	11
4	土師器	高杯		ナデの後、ヘラ ミガキ	密、0.2~4mmの砂粒と赤色 粒含む	良好	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	140-1c	1谷	飛鳥	11
5	土師器	支脚?		ケズリ後、ナデ 調整	やや粗、0.5~1.5mmの石粒 含む	良好	にぶい褐色 5YR7/4		淡橙色5YR8/4	140-2a	1谷	飛鳥	11
6	土師器	甕	12.4	ナデ	良	軟	橙色5YR7/6	橙色5YR7/6	淡橙色5YR8/4		南東部掘り下げ	飛鳥	11
7	土師器	甕	16.2	摩滅著しく調整 不明	やや良、1~2mmの石粒含む	軟	にぶい赤褐色 10R6/3	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい赤褐色 10R6/3	140-2b	1谷	飛鳥	11
8	土師器	甕		横ナデ、ナデの 後、ハケメ	やや粗、0.2~3mmの砂粒を 多く含む	良好	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄色 2.5YR7/3	灰色5Y6/1	140-2a	1谷60土坑	飛鳥	11
9	土師器	甕	22	摩滅著しく調整 不明	やや良、0.5~2mmの石粒含む	軟	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	明黄褐色 10YR7/6	140-2a	1谷	飛鳥	11
10	土師器	甕	17.8	横ナデ、ヘラケ ズリ	密、0.2~2mmの長石、赤色 粒、雲母	良好	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	140-2b	1谷肩部	飛鳥	11
11	土師器	甕		摩滅著しく調整 不明	やや粗、0.5~3mm大の小石 含む	軟	にぶい褐色 7.5YR7/4	灰白色 7.5YR7/2	灰白色 7.5YR7/2	140-2a	1谷60土坑	飛鳥	11
12	土師器	甕	19.3	摩滅著しく調整 不明	粗、0.5~2mm大の小石含む	軟	明赤褐色 2.5YR5/6	にぶい褐色 2.5YR6/4	灰赤色 2.5YR6/2	140-2a	1谷	飛鳥	11
13	土師器	甕	20.2	摩滅著しく調整 不明	やや粗、0.5~3mm大の小石 含む	良	浅黄褐色 7.5YR8/3	灰白色 7.5YR8/2	褐灰色 7.5YR6/1	140-2b	1谷	飛鳥	11
14	土師器	甕	20.6	横ナデ、縦ハケ ケズリ後ナデ	やや粗、1~2mm大の小石含む	良	灰黄褐色 10YR6/2	褐灰色 10YR4/1	にぶい黄褐色 10YR7/2	140-1c	1谷	飛鳥	11
15	土師器	甕		ナデ、ハケメ	密、4mmまでの礫を多く含む 微細な雲母片を含む	良好	橙色7.5YR7/6	黄褐色 7.5YR8/8	橙色7.5YR7/6	14N-4j	57土坑	飛鳥	12
16	土師器	甕		横ナデ	密、0.5~5mm大の礫多く含む	良好	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	黄灰色 2.5Y5/1	140-1c	1谷	飛鳥	12
17	土師器	甕	27.1	横ナデ、ナデ ハケメ後、ナデ	やや粗、0.5~2mm大の小石 含む	良好	にぶい褐色 5YR6/4	にぶい赤褐色 5YR4/3	明褐灰色 5YR7/2	140-3b	掘り下げ	飛鳥	12
18	土師器	甕	23.8	横ナデ ハケメ調整	密、0.2~1mmの砂粒、赤色 酸化土粒を少し含む	良好	浅黄褐色 10YR8/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	140-3b	掘り下げ	飛鳥	12
19	土師器	甕	23.6	横ナデ、ハケメ	密、0.2~3mm大の砂粒、雲 母片含む	良好	橙色7.5YR8/6	橙色7.5YR7/6	橙色7.5YR7/6	14N-4j	57土坑	飛鳥	12
20	土師器	甕	33.8	ナデ、ハケメ	密、0.5~3mm大の砂粒、小 石含む	良	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	130-10e	1谷2トレンチ	飛鳥	12
21	土師器	甕	27.7	横ナデ、ナデ ハケメ	やや粗、0.5~1.5mm大の小 石含む	良	橙色7.5YR7/6	にぶい黄褐色 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	140-2c	10土坑	飛鳥	12
22	土師器	甕	29.7	剥離著しく調整 不明	やや密	やや 軟	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	140-2a	1谷上層	飛鳥	12
23	須恵器	蓋	9.6	回転ナデ	密	堅緻	灰色N5/0	灰色N6/0	灰色N6/0	130-10d	1谷南北畦畔	飛鳥	13
24	須恵器	蓋	11.5	回転ナデ	密、0.2~1.5mm大の砂粒を 含む	良好	灰色N6/0	灰色N6/0	灰色N6/0	140-2a	1谷	飛鳥	13
25	須恵器	蓋	15.8	回転ナデ	緻密	堅	灰白色N7/0	灰白色N7/0	灰白色N8/0	130-8e	1谷肩部	飛鳥	13
26	須恵器	蓋	11.6	回転ナデ、ナデ	緻密	堅緻	灰白色N7/0 灰色2.5GY5/1	暗オリーブ灰 色2.5GY3/1	灰白色N7/0	130-10e	1谷2トレンチ	飛鳥	13
27	須恵器	蓋		回転ナデ	緻密	堅緻	灰白色 7.5Y7/1	灰色10Y6/1	灰白色 Y10Y8/1	130-9d	1谷肩部	飛鳥	13
28	須恵器	蓋	14.6	回転ナデ、ナデ	緻密	堅緻	灰色N6/0	灰白色N7/0	灰白色N7/0	130-9f	1谷	飛鳥	13
29	須恵器	杯	11.9	回転ナデ	密、1mmの少量の石粒含む	堅緻	灰色N6/0	灰色N5/0	灰色N7/0	140-1c	1谷	飛鳥	13
30	須恵器	杯	11.4	回転ナデ 回転ヘラケズリ	密	良好	灰色N6/0	灰色N6/0	灰色N6/0	14N-3j	1谷肩部	飛鳥	13
31	須恵器	杯	底部6.3	ナデ	良	堅	灰白色N7/0	灰白色N7/0	灰白色N7/0	140-2b	1谷	飛鳥	13
32	須恵器	杯	底部7.0	回転ナデ、ナデ	やや良、0.5~1mm大の小石 含む	堅緻	灰白色N6/0	灰白色N7/0	灰白色N7/0	130-10e	1谷	飛鳥	13
33	須恵器	杯	底径8.4	回転ナデ、後へ ラ整形	密、0.5~2mm大の小石含む	良好	灰色N6/0	灰色N6/0	灰色N6/0	140-2a	1谷	飛鳥	13
34	須恵器	杯	底部 10.3	回転ナデ、ナデ	やや良、0.5~1mm大の少量 の小石含む	堅	灰色7.5Y6/1	灰白色 7.5Y7/1	灰白色 7.5Y7/2	140-6b	掘り下げ	飛鳥	13
35	須恵器	杯	11.1	回転ナデ、ナデ	密	堅緻	灰色N5/0	灰色N6/0	オリーブ灰色 2.5GY6/1	130-9f	1谷落込み遺構	飛鳥	13
36	須恵器	杯	15.3	回転ナデ	やや密、3mm大の小石含む	堅緻	灰色N5/0	灰白色N7/0	灰色N4/0	140-1c	1谷	飛鳥	13
37	須恵器	杯	底部7.8	回転ナデ 貼り付け高台	やや良、砂粒含む	堅緻	灰白色N7/0	灰白色N7/0	灰白色N7/0	130-9f	1谷	飛鳥	13
38	須恵器	杯	底部8.2	回転ナデ、ナデ 貼り付け高台	密	堅緻	灰色N6/0	灰白色N7/0	灰色N6/0	140-1c	1谷	飛鳥	13

番号	器種	器形	口径	手法	胎土	焼成	色調			地区	遺構	時代	図番号
							外面	内面	断面				
39	須恵器	杯	底部9.5	回転ナデ、ナデ貼り付け高台	やや良、砂粒含む	堅	灰白色N7/0	灰白色N7/0	灰白色N7/0	140-1b	1谷	飛鳥	13
40	須恵器	杯	底部8.0	回転ナデ、ナデ	やや良、1~1.5mm大の少量の小石含む	堅	灰色N6/0	灰色N6/0	灰色N6/0	140-2b	1谷	飛鳥	13
41	須恵器	杯	底部8.8	回転ヘラケズリ、貼り付け高台	密、1mm前後の砂粒、3mm程度の礫含む	良好	灰色N6/0	灰色5Y6/1	灰色5Y6/1	140-1c	1谷	飛鳥	13
42	須恵器	杯	底径9.6	回転ナデ貼り付け高台	密、0.2~3mmの砂粒、小石含む	良好	灰色N5/0	灰色N6/0	灰色N7/0	140-3b	44溝	飛鳥	13
43	須恵器	杯	底部9.15	回転ナデ、ナデ貼り付け高台	密	堅緻	灰色N4/0	灰白色N7/0	灰色N4/0	140-1d	掘り下げ	飛鳥	13
44	須恵器	杯		回転ナデ貼り付け高台	やや良、1~2mm大の小石含む	堅緻	灰色N5/0	灰色N7/0	灰色N7/0	130-9d	1谷	飛鳥	13
45	須恵器	杯	底部12.0	回転ナデ、ナデ貼り付け高台	やや良、0.5~1mm大の小石含む	堅緻	灰白色N7/0	灰白色N7/0	褐灰色10YR6/1	130-9d	1谷	飛鳥	13
46	須恵器	杯	底部13.4	回転ナデ、貼り付け高台	やや良、0.5~1mm大の小石含む	堅緻	灰色N6/0	灰色N6/0	褐灰色7.5YR6/1	140-1e	1谷落込み遺構	飛鳥	13
47	須恵器	杯	16.9	回転ナデ、貼り付け高台	緻密	堅緻	灰色N5/0	灰白色N7/0	暗赤灰色5R3/1	130-10e	1谷	飛鳥	13
48	須恵器	杯	底部15.8	回転ナデ、貼り付け高台	緻密	堅緻	灰色N6/0	灰色N7/0	灰色N7/0	130-9d	1谷肩部	飛鳥	13
49	須恵器	壺	6.8	回転ナデ、沈線	密	堅緻	灰色N6/0	灰色N6/0 灰色N7/0	灰白色N8/0	140-2a	表採	飛鳥	13
50	須恵器	壺	12.8	回転ナデ	密	良	暗灰色N3/0	灰色N5/0	灰色N5/0	140-2b	1谷	飛鳥	13
51	須恵器	壺		回転ナデ、指オサエ	密、0.2~1mm大の砂粒を含む	良好	灰白色N7/0	灰白色N7/0	灰白色N7/0	140-2a	1谷	飛鳥	13
52	須恵器	甕	24.5	横ナデ、波状文	やや密、0.5~1mm大の少量の小石含む	堅緻	明オリーブ灰色2.5GY7/1	灰白色N7/0	明オリーブ灰色2.5GY7/1	140-1c	1谷	飛鳥	13
53	須恵器	甕	28.85	横ナデ、ナデ、ケズリ	密	堅緻	灰色N6/0	灰色N7/0	赤灰色2.5YR6/1	140-2c	1谷	飛鳥	13
54	須恵器	甕	35.3	回転ナデ、カキメ	やや良、1~1.5mm大の小石含む	堅緻	灰色N6/0	灰色N6/0	灰色N7/0	140-3d	掘り下げ	飛鳥	13
55	須恵器	鉢	12.6	回転ナデ	密	堅緻	灰色N5/0	灰色N5/0	灰色N5/0	130-10e	1谷	飛鳥	13
56	須恵器	鉢	19	横方向のナデ、回転ナデ	緻密	堅	灰白色N7/0	灰白色7.5Y7/1	灰白色7.5Y8/1	130-10e	1谷2トレンチ	飛鳥	13
57	須恵器	鉢	26.4	回転ナデ、ハケメ調整、ナデ	密、0.2~1mm大の砂粒含む	良好	灰色7.5Y6/1	灰色N5/0	灰白色10Y8/1	140-2b	1谷	飛鳥	13
58	須恵器	盤(脚)		削り後、ナデ調整	やや良、0.5~1.5mm大の小石含む	堅緻	灰色N5/0	灰白色N7/0	灰白色N7/0	130-9f	1谷	飛鳥	13
59	土師器	皿	6.9	ナデ	やや良、砂粒含む	軟	灰白色5YR8/2	灰白色5YR8/2	灰白色5YR8/2	130-9e	1谷	平安後期	14
60	土師器	椀	9.4	横ナデ、ナデ	密	良	浅黄褐色7.5YR8/3	にぶい橙色7.5YR7/4	浅黄褐色7.5YR8/3	140-1c	1谷	平安前期	14
61	土師器	椀	9.8	ナデ、沈線	やや密、少量の砂粒含む	軟	灰白色7.5YR8/2	灰白色7.5YR8/1	浅黄褐色7.5YR8/3	140-1c	1谷	平安前期	14
62	土師器	椀	10	ナデ	良	軟	橙色5YR7/6	淡橙色5YR8/4	淡橙色5YR8/4	140-1e、2d	機械掘削中	平安後期	14
63	土師器	椀	11.3	横ナデ、ナデ	密	やや良	灰白色7.5Y8/1	灰白色7.5Y8/1	灰白色7.5Y8/1	130-8f	1谷	平安前期	14
64	須恵質陶器	鉢	22.8	横ナデ	やや良、0.5~1mm大の小石含む	堅緻	灰白色N7/0	灰白色N7/0	灰白色N7/0	130-9f	1谷	平安中期	14
65	白磁	椀	9.8	指先による横ナデ施軸	緻密	堅	灰白色2.5GY8/1	灰白色5GY8/1	灰白色N8/0	130-10e	1谷	平安後期	14
66	白磁	椀	10.7	回転ナデ、施軸	緻密	堅	灰白色5GY8/1	灰白色5GY8/1	灰白色N8/0	130-10d	1谷	平安後期	14
67	白磁	皿	底部6.0	ナデ後施軸	緻密	堅緻	明緑灰色7.5GY7/1	明オリーブ灰色2.5GY7/1	灰白色2.5GY8/1	130-10e	1谷	平安後期	14
68	白磁	椀		ヘラ削り、削りだし高台	緻密	堅緻	灰白色2.5Y8/1	灰白色7.5Y8/1釉	灰白色N8/0	130-9e	1谷	平安	14
69	青磁	椀	15.2	ナデ	緻密	堅緻	オリーブ灰色2.5GY5/1	オリーブ灰色2.5GY5/1	灰色N6/0		表採	平安後期	14
70	青磁	椀	17.9	陽刻による鎬蓮弁文	緻密	堅緻	緑灰色10GY5/1	緑灰色10GY5/1	灰白色N8/0	140-1e、2d	機械掘削中	平安後期	14
71	青磁	椀	底部4.8	施軸、削りだし高台	密、少量の砂粒含む	堅緻	オリーブ灰色10Y4/2	オリーブ灰色10Y4/2	灰白色N7/0	140-1f	1谷落込み遺構	平安後期	14
72	土師器	皿	8.3	ナデ	密	良	橙色5YR6/6	橙色5YR7/6	にぶい橙色5YR7/4	130-10f	1谷落込み遺構	桃山	15
73	土師器	甕	18.8	摩擦著しく調整不明	粗、0.5~2mm大の小石少量含む	軟	暗褐色10YR3/4	浅黄褐色10YR8/3	灰白色10YR8/2	130-10e	1谷	中世	15
74	瓦器	皿	12.2	横ナデ、ナデヘラミガキ	密	堅	灰色N6/0	灰色N6/0	灰白色2.5GY8/1	140-2d	掘り下げ	中世	15
75	瓦器	椀	9.8	横ナデ、ナデヘラミガキ	密	良	灰色N4/0	灰色N6/0	灰白色7.5Y8/1	130-10f	掘り下げ	中世	15
76	瓦器	椀	9.8	横ナデ、ナデヘラミガキ	やや密、0.5~1mm大の少量の小石含む	やや良	灰白色7.5Y8/1	灰白色7.5Y8/1	灰白色N7/0	140-3b	掘り下げ	中世	15

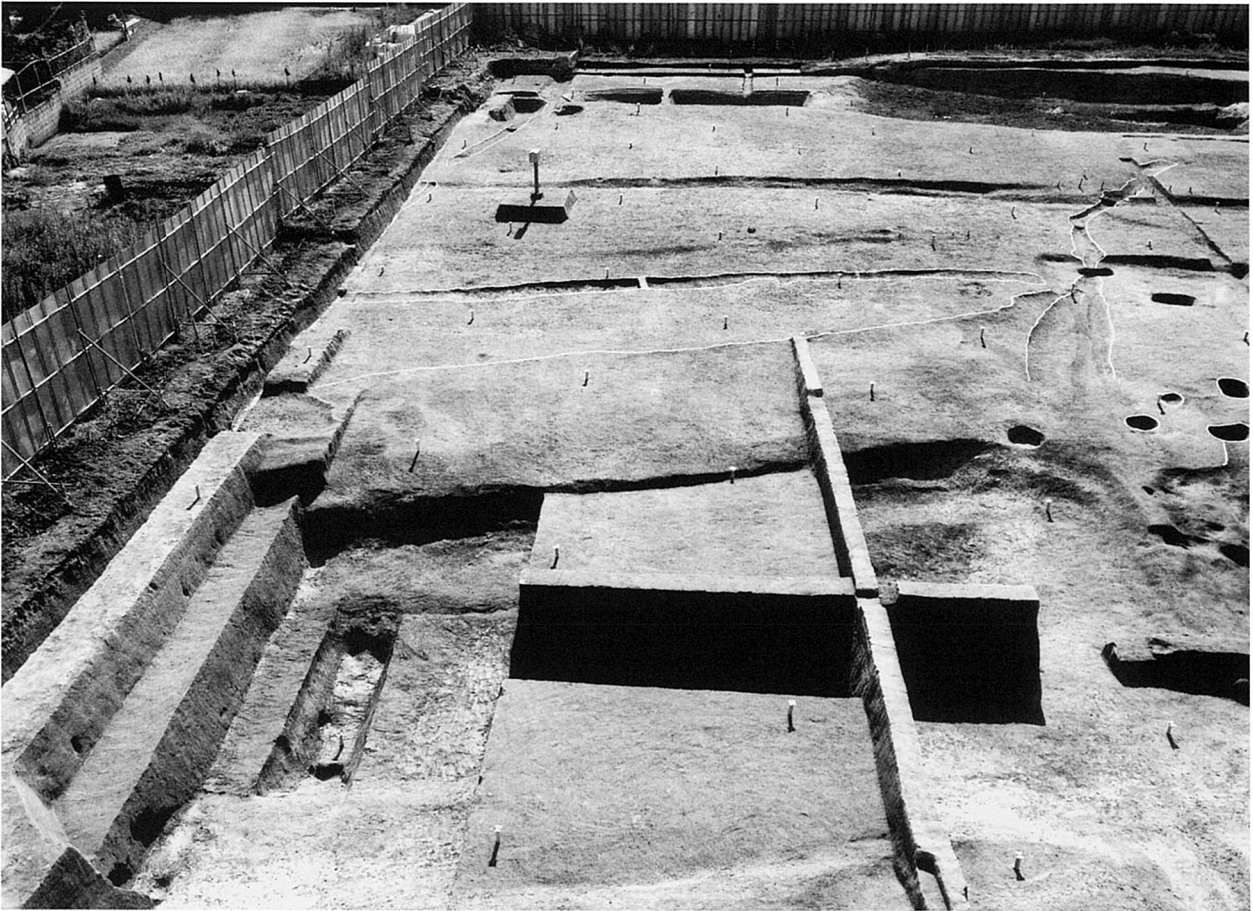
番号	器種	器形	口径	手法	胎土	焼成	色調			地区	遺構	時代	図番号
							外面	内面	断面				
77	瓦器	椀	11.6	ナデ、ヘラミガキ	やや密、2.5mm大の小石含む	やや良生焼	灰白色N8/0	灰白色N8/0	灰白色10YR8/1	130-10d	1谷拡張部	中世	15
78	瓦器	椀	10.9	横ナデ、ナデヘラミガキ	密	良好	灰色N4/0	灰白色2.5GY8/1	灰白色2.5G8/1	140-3b	掘り下げ	中世	15
79	瓦器	椀	12.5	横ナデ、ナデヘラミガキ	密	堅	灰色N4/0	灰色N4/0	灰白色N8/0	130-9e	1谷	中世	15
80	瓦器	椀	14.6	横ナデ、ヘラミガキ	密	良	灰色N4/0	暗灰色N3/0	灰白色7.5Y8/1	130-9e	1谷	鎌倉	15
81	瓦質土器	鉢	15.3	横ナデ、ナデ	密	やや軟	灰色10Y5/1	黒褐色10YR3/1	灰白色10YR8/2	130-10f	8溝	中世	15
82	瓦質土器	鉢	16.3	横ナデ、ナデ	良	良	灰色N5/0	灰色N5/0	灰白色N8/0	130-10f	1谷南肩	中世	15
83	瓦質土器	鉢	29.1	横ナデ、ナデ	良	良	暗灰色N3/0	灰色N4/0	灰白色N8/0	130-10d、10e	1谷	中世	15
84	瓦質土器	鉢	23.7	横ナデ、ナデ	良	良	灰色5Y4/1	灰色5Y4/1	灰白色5Y8/1	130-8f	1谷	中世	15
85	瓦質土器	鉢	25.4	ナデ、横ナデ、ハケメ	やや粗、1~3.5mm大の小石含む	やや軟	暗灰色N3/0	暗オリーブ灰色2.5GY4/1	灰白色N8/0	140-2b	1谷拡張部	中世	15
86	瓦質土器	鉢	28.3	ナデ	やや良、砂粒含む	やや軟	淡黄色2.5Y8/3	暗オリーブ褐色2.5Y3/3	浅黄色2.5Y7/3	140-1e	6溝	中世	15
87	瓦質土器	鉢	29.6	横ハケ、ナデ	密	良	灰色N3/0	灰色N5/0	灰白色7.5Y8/1	140-1f	1谷	中世	15
88	瓦質土器	羽釜	27.8	ナデ、横ナデ横ハケ	やや粗、0.5~2mm大の小石含む	やや軟	オリーブ黒色5Y3/1	にぶい褐色7.5YR5/4	灰白色7.5YR8/1	130-10d	1谷	中世	15
89	瓦質土器	鉢	35.8	ナデ	やや密、0.5~1mm大の小石含む	堅	黒褐色2.5Y3/1	黒褐色2.5Y3/1	明褐色7.5YR7/2	140-1f	19土坑	中世	15
90	瓦質土器	鉢	底部10.4	ヘラ削り横ナデ、ナデ	やや良、0.5~2mm大の小石含む	良好	灰色N5/0	灰色N4/0	灰白色N8/0	130-9e	1谷	中世	15
91	陶器	鉢	12.3	横ナデ、ナデヘラケズリ	やや良、0.5~1mm大の小石含む	堅	明赤褐色5YR5/6	にぶい赤褐色5YR4/4	にぶい橙色5YR7/4	140-1h	掘削中	中世	15
92	陶器	鉢	12.4	ナデ、施釉	緻密	堅	にぶい褐色7.5YR5/4	にぶい褐色7.5YR5/4	灰白色2.5Y8/2	130-10d	1谷	中世	15
93	須恵質陶器	鉢	21.4	横ナデ	やや粗、0.5~2.5mm大の小石含む	堅	灰色N6/0	灰白色7.5Y7/1	灰色N6/0	130-10f	1谷南肩	中世	15
94	陶器	播鉢		横ナデ、ナデ	やや良、0.5~1mm大の小石含む	堅緻	暗赤灰色7.5R3/1	暗赤灰色7.5R3/2	灰白色N7/0	130-10f	1谷肩部	中世	15
95	陶器	甕	12.2	回転ナデ、施釉	やや粗、1~7mm大の小石含む	堅緻	にぶい赤褐色5YR5/3	褐色5YR5/1	灰白色2.5Y8/1		盛土	中世	15
96	陶器	鉢	10.1	横ナデ	密	堅緻	暗褐色10YR3/4	にぶい赤褐色7.5YR4/3	にぶい橙色5Y7/4	130-10g	調査区東壁	戦国	15
97	陶器	甕	底部26.0	ナデ	やや良、0.5~1mm大の大小石含む	堅緻	明赤褐色2.5YR5/6	灰白色N7/0	灰白色N7/0	140-1e	2溝	中世	15
98	土師器	皿	11.3	横ナデ、ナデ	良	軟	浅黄褐色7.5YR8/4	浅黄褐色7.5YR8/3	浅黄褐色7.5YR8/3	140-3d	調査区西壁	江戸中期	15
99	土師質土器	鉢	33.5	横ナデ	やや密、砂粒含む	良好	橙色5YR6/6	橙色5YR7/6	橙色5YR7/6		表採	近世	15
100	陶器	鉢	底部4.6	横ナデ、ナデ削りだし高台	密	堅緻	灰オリーブ色5Y4/2	灰オリーブ色5Y4/2	にぶい橙色5Y7/3		南東部掘り下げ	近世	15
101	磁器	椀	底部4.5	回転ナデ削りだし高台	緻密	堅緻	明オリーブ色5GY7/1	明オリーブ色5GY7/1	浅黄褐色7.5YR8/4		南東部掘り下げ	江戸中期	15
102	サスカイト	鏝								130-10e	1谷肩部	縄文	15
103	サスカイト	剥片								140-2c	掘り下げ	縄文	15



寝屋4号線地区(03-2)

番号	器種	器形	口径	手法	胎土	焼成	色調			地区	遺構	時代	図番号
							外面	内面	断面				
104	土師器	甕	12.2	横ナデ、ハケメ	やや粗	良	灰黄色2.5Y6/2	灰黄色2.5Y6/2	橙色7.5Y6/6	13L-10i	6土坑	飛鳥	16
105	土師器	甕		横ナデの後、ハケメ	密、0.2~2mm石英、長石の砂粒を含む	良好	浅黄橙色7.5YR8/6	浅黄橙色7.5YR8/6	浅黄橙色7.5YR8/6	14L-2h		飛鳥	16
106	土師器	甕	29.0	横ナデ	密、0.2~4mm長石、石英の砂粒、礫含む	良好	にぶい橙色7.5YR7/4	にぶい黄橙色10YR7/3	にぶい黄橙色10YR7/3	14L-1i	1谷	飛鳥	16
107	須恵器	蓋	11.4	回転ナデ	密	良好	灰色N7/0	灰白色10Y7/1	灰白色10Y7/1	14L-3g	掘り下げ	飛鳥	16
108	須恵器	杯		回転ナデ	密、0.5~2mm大の砂粒含む	良好	灰色10Y4/1	灰白色N7/0	灰色7.5Y5/1	14L-3g	1谷肩部	飛鳥	16
109	須恵器	杯	16.2	回転ナデ	密	良好	灰色N6/0	灰白色N7/0	灰色7.5Y4/1	14L-1h	20溝	飛鳥	16
110	須恵器	杯		回転ナデ	密	良好	灰白色7.5Y7/1	灰白色10Y7/1	灰色10Y6/1	14L-4g		飛鳥	16
111	須恵器	杯	4.6	回転ナデ、糸きり底	密	良好	灰白色10Y7/1	灰白色10Y7/1	灰色7.5Y6/1	14L-4g		飛鳥	16
112	須恵器	蓋		回転ナデ	密	良好	灰白色7.5Y7/1	灰白色7.5Y7/1	灰色7.5Y6/1	14L-3g	掘り下げ	飛鳥	16
113	須恵器	蓋		回転ナデ、ハケメ	密、0.5~1mm砂粒やや多く含む	良好	青灰色5B6/1	青灰色5B6/1	暗灰色N3/0	14L-8d	6溝	飛鳥	16
114	須恵器	壺	9.0	回転ナデ、ハケメ	密、0.2~2mm赤色酸化土粒を含む	不良	灰白色5Y8/2	灰白色5Y8/1	灰白色5Y7/1	14L-6e	機械掘削中	飛鳥	16
115	須恵器	壺	13.8	回転ナデ	密、0.5~1mm長石、チャートの砂粒を含む	やや軟	灰白色7.5Y7/2	灰白色10Y7/1	灰白色10Y8/1	13L-10i	掘り下げ	飛鳥	16
116	須恵器	壺	16.8	回転ナデ	密	良好	青灰色5B5/1	オリーブ灰色2.5GY6/1	オリーブ灰色2.5GY6/4	14L-3g	1谷	飛鳥	16
117	須恵器	甕	29.8	回転ナデ	密、2mmまでの砂粒を含む	良好	灰色N6/0	灰色N6/0	灰白色N7/0	14L-3g	掘り下げ	飛鳥	16
118	須恵器	平瓶	20.2	回転ナデ、ヘラナデ	密、0.2~0.5mm大の砂粒含む	良好	灰オリーブ色5Y5/2	灰白色N7/0	灰白色N7/0	14L-2h	1谷	飛鳥	16
119	土師器	高杯		横ナデ、ハケメ	密、0.2~1mm砂粒多く含む	良好	にぶい黄橙色10YR7/4	にぶい黄橙色10YR7/4	にぶい黄橙色10YR7/4	14L-1h	1谷16溝	飛鳥	16
120	土師器	杯	10.8	横ナデ	密	良好	灰黄褐色10YR6/2	にぶい黄橙色10YR7/4	にぶい黄褐色10YR7/3	14L-2h		古代?	17
121	須恵器	杯		回転ナデ	密、0.2~1mm大の砂粒を含む	良好	灰白色N7/0	灰白色N7/0	灰色7.5Y6/1	14L-3g		古代	17
122	須恵質陶器	鉢		回転ナデ	密	良好	灰色10Y6/1	灰色10Y6/1	灰色10Y6/1	14L-1h	機械掘削中	古代?	17
123	須恵質陶器	鉢	15.0	回転ナデ	密	良好	灰色10Y6/1	灰色10Y6/1	灰色10Y6/1	14L-2h		古代	17
124	青磁	皿	11.8	回転ナデ	緻密	良好	灰オリーブ色7.5Y5/2	灰オリーブ色7.5Y5/2	灰白色5Y7/1	14L-4g		古代	17
125	瓦器	椀		横ナデ、ヘラミガキ	密	不良	灰白色2.5Y8/2	灰白色5Y7/1	灰白色5Y7/1	14L-4g		中世	17
126	瓦器	椀	12.8	横ナデ、ヘラミガキ	密、0.5~1mm大の赤色酸化土粒を含む	不良	浅黄褐色10YR8/3	灰白色10YR8/2	灰白色10YR8/1	24L-2g	1谷	中世	17
127	須恵質陶器	鉢	27.6	回転ナデ	密、0.2~1mm大の砂粒を含む	良好	灰色7.5Y5/1	灰白色7.5Y7/1	灰白色7.5Y7/1	14L-2h	16溝	中世	17
128	土師器	土錘		ナデ	密、0.5~2mm大の石英、長石の砂粒を含む	良好	浅黄褐色10YR8/3		浅黄褐色10YR8/4	14L-2h		古代?	17
129	土師器	土錘		ナデ	密	良好	にぶい橙色5YR6/4			14L-3g	1谷	古代?	17
130	土師器	土錘		ナデ	密	やや良	浅黄褐色10YR8/4 にぶい橙色		暗オリーブ灰色5GY3/1	14L-3g	1谷肩部	古代?	17

# 写 真 图 版

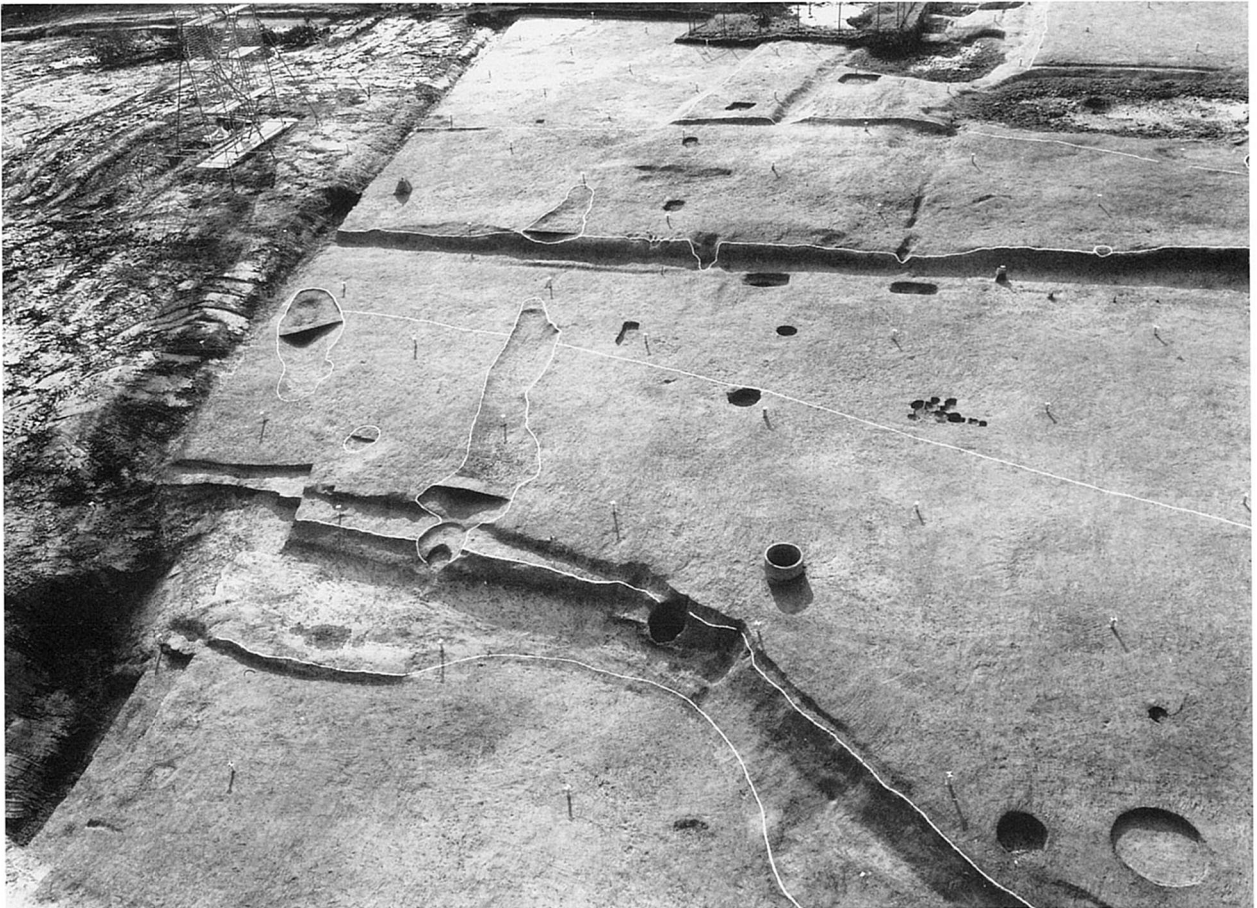


1. 本線地区東半全景1 (北東から)



2. 本線地区東半全景2 (東から)

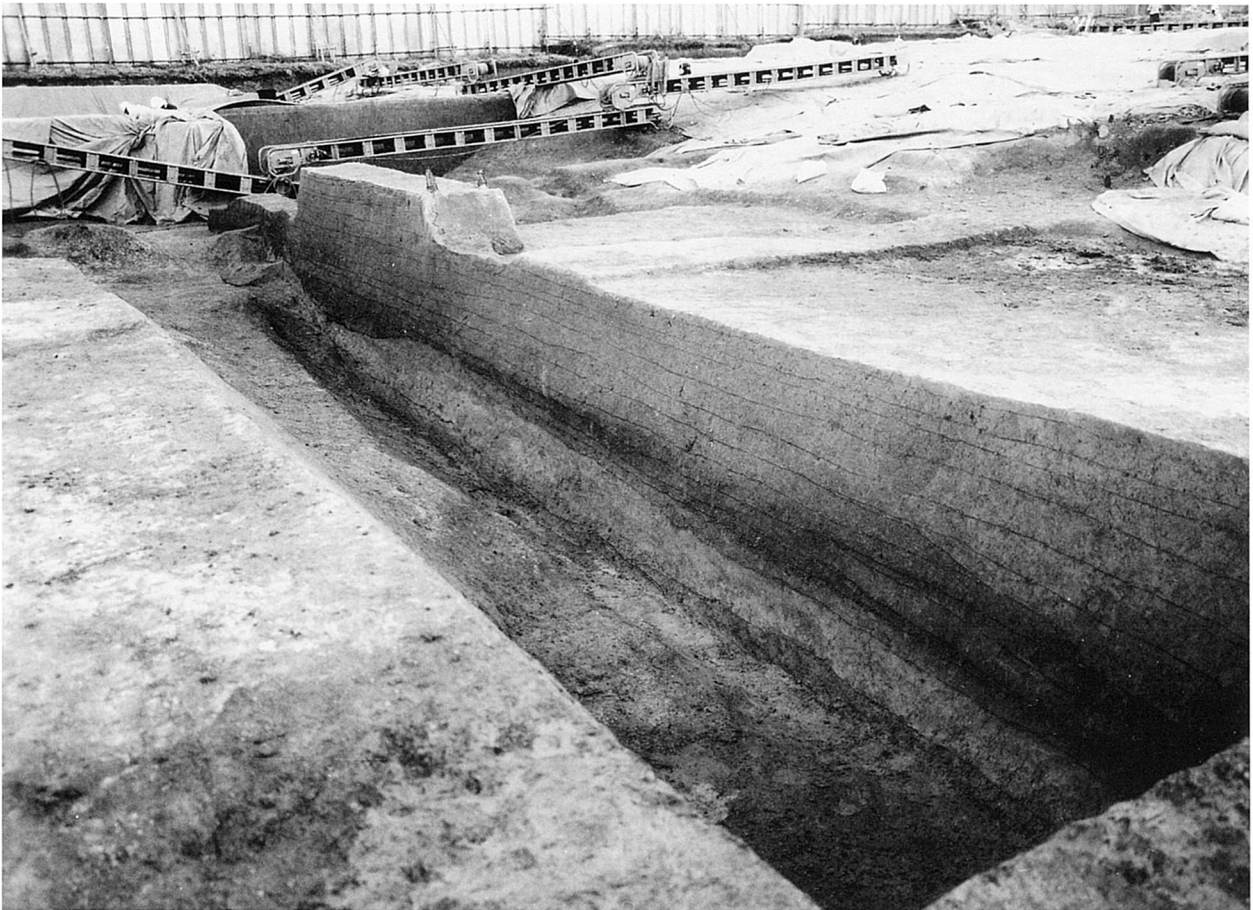
図版2 遺構



1. 本線地区西半全景1 (北から)



2. 本線地区西半全景2 (北東から)

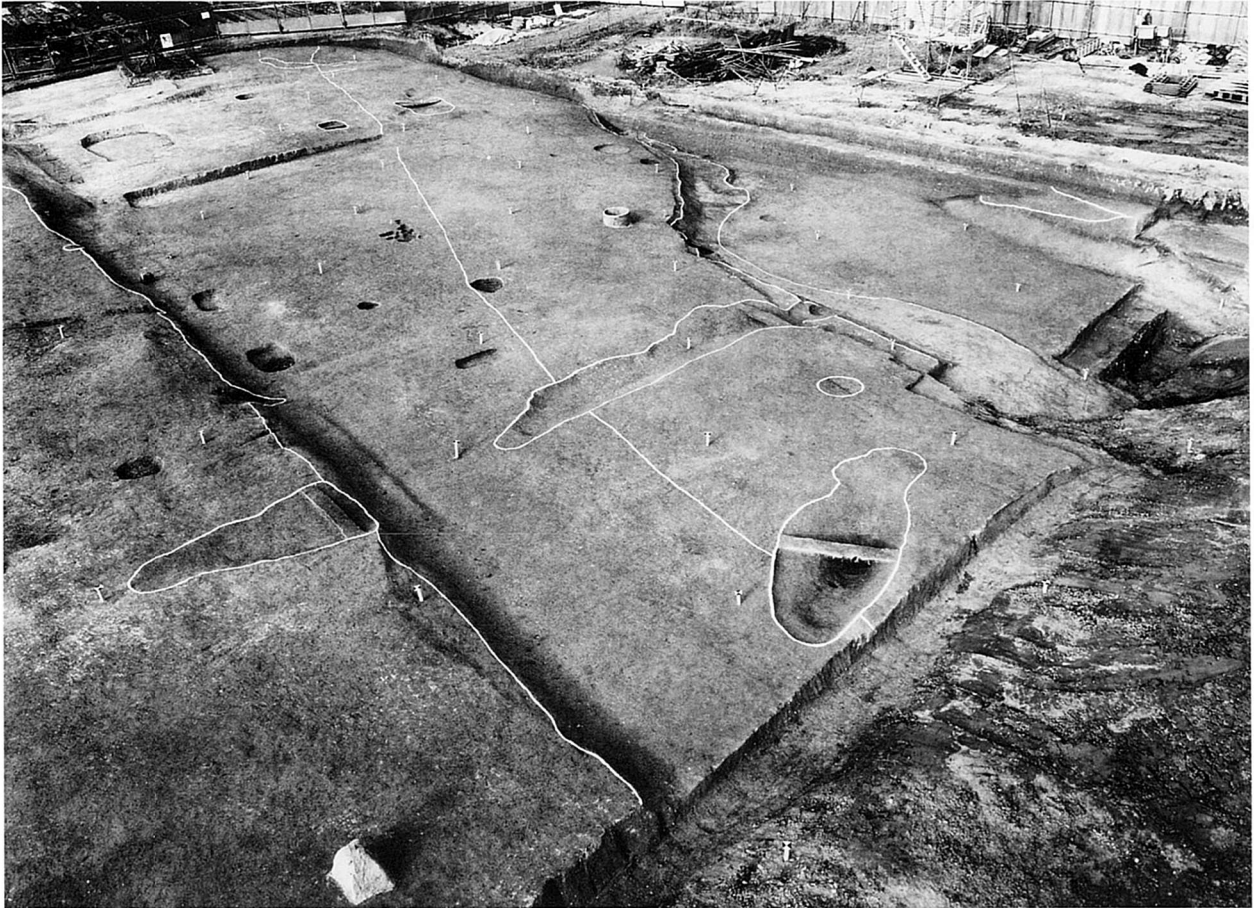


1. 本線地区1谷土層堆積状況（北西から）



2. 本線地区1谷土層堆積状況（北から）

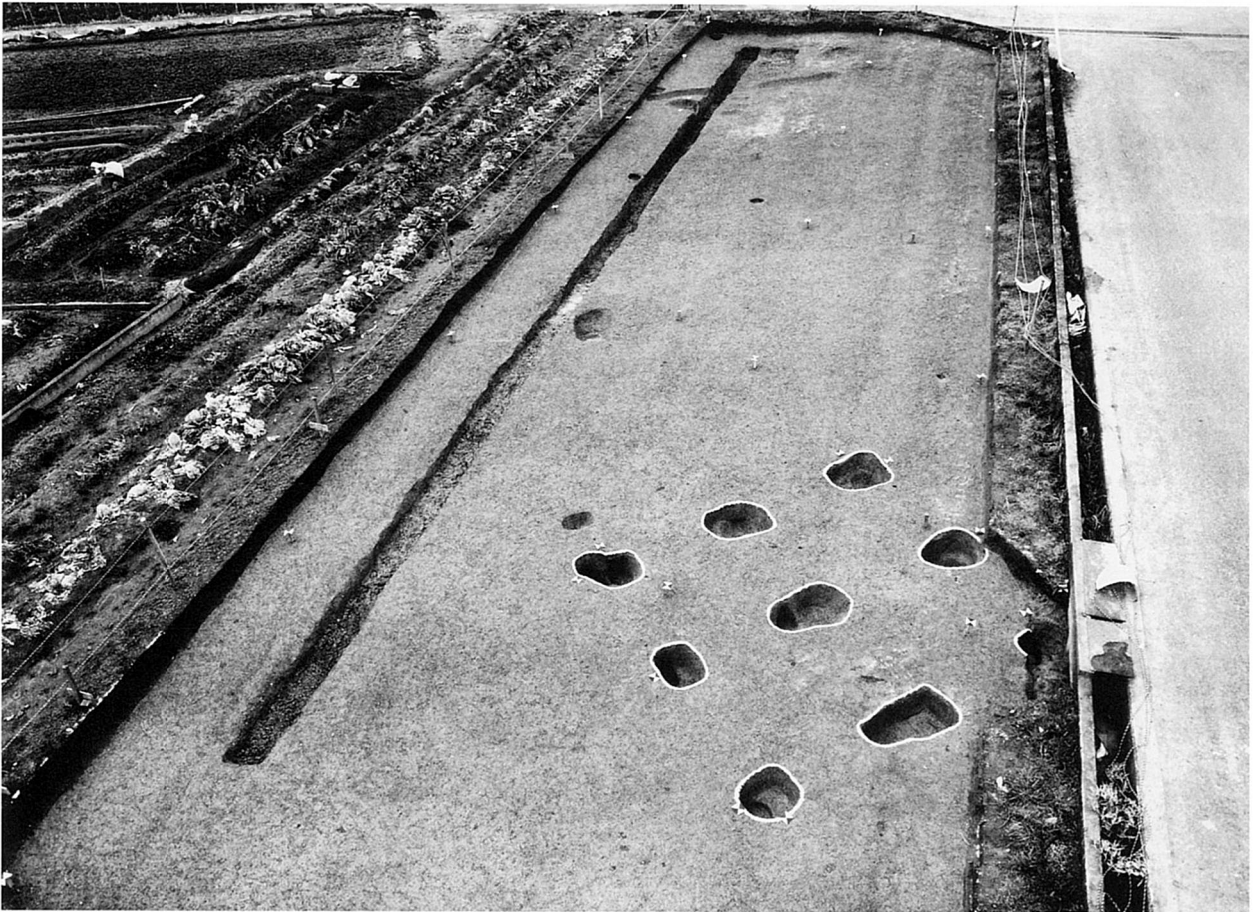
図版4 遺構



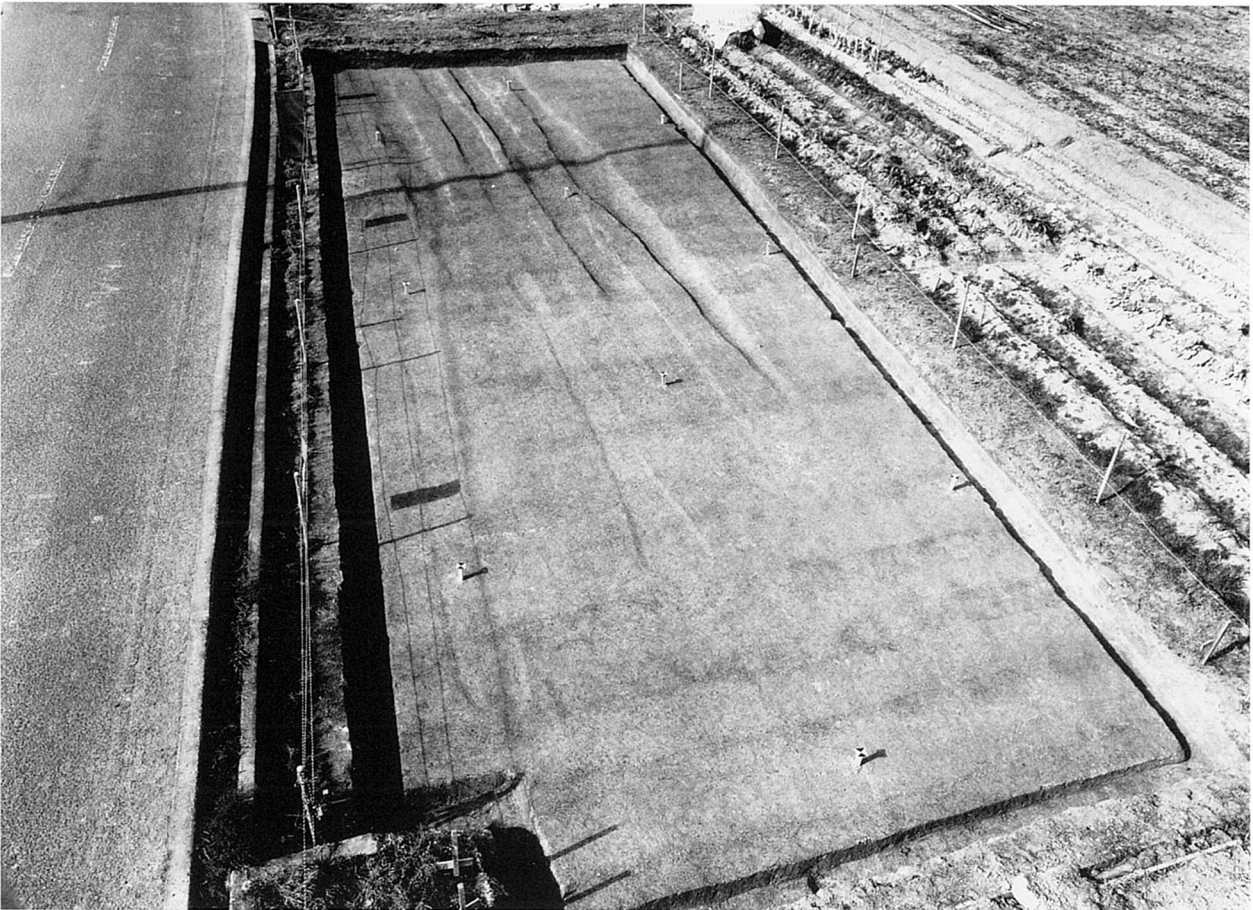
1. 本線地区西半北部遺構配置状況（南東から）



2. 本線地区西半南部遺構配置状況（東から）

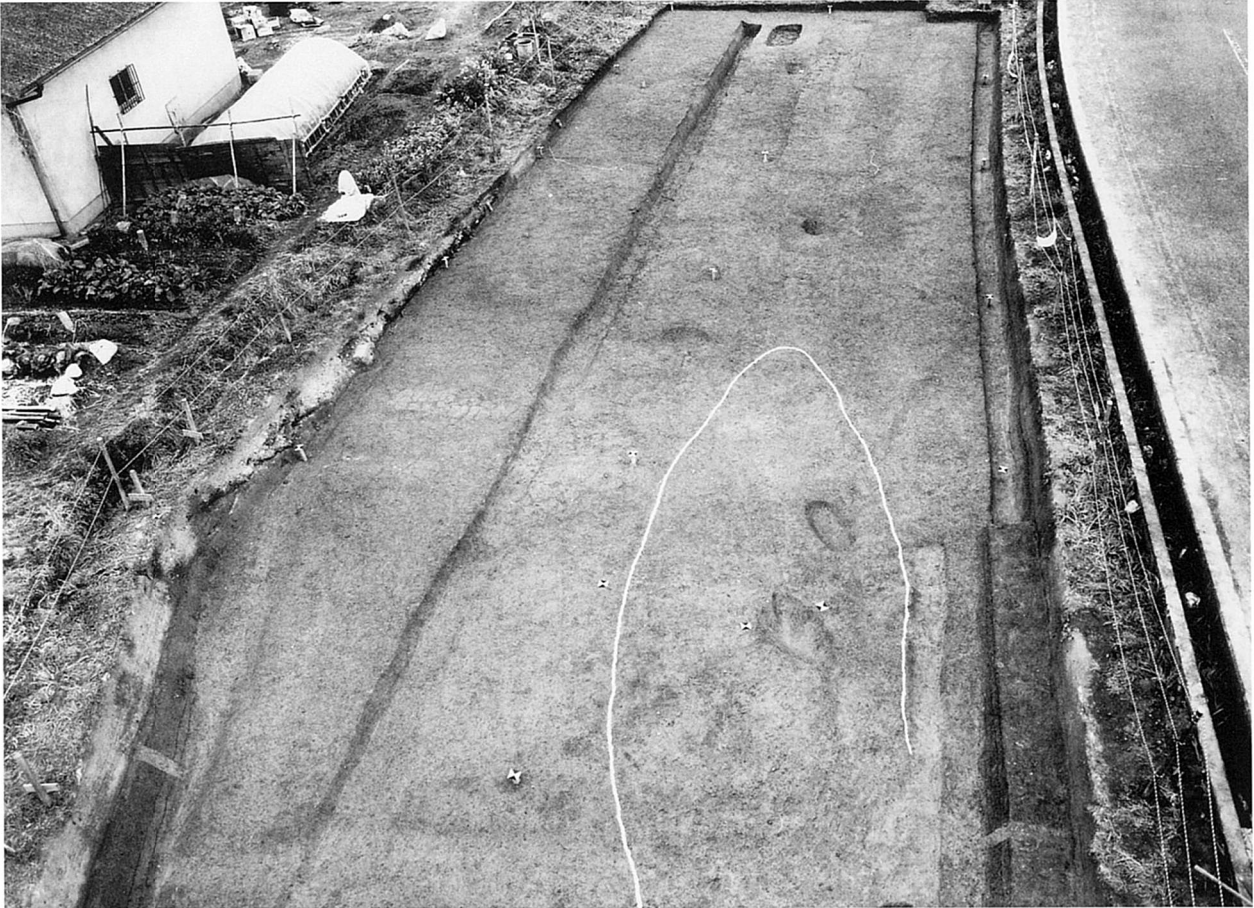


1. 寝屋4号線地区1区全景(北西から)



2. 寝屋4号線地区2区全景(南東から)

図版6 遺構



1. 寝屋4号線地区3区全景（北西から）



2. 寝屋4号線地区4区東半全景（南東から）





1. 寝屋4号線地区4区西半全景（南東から）



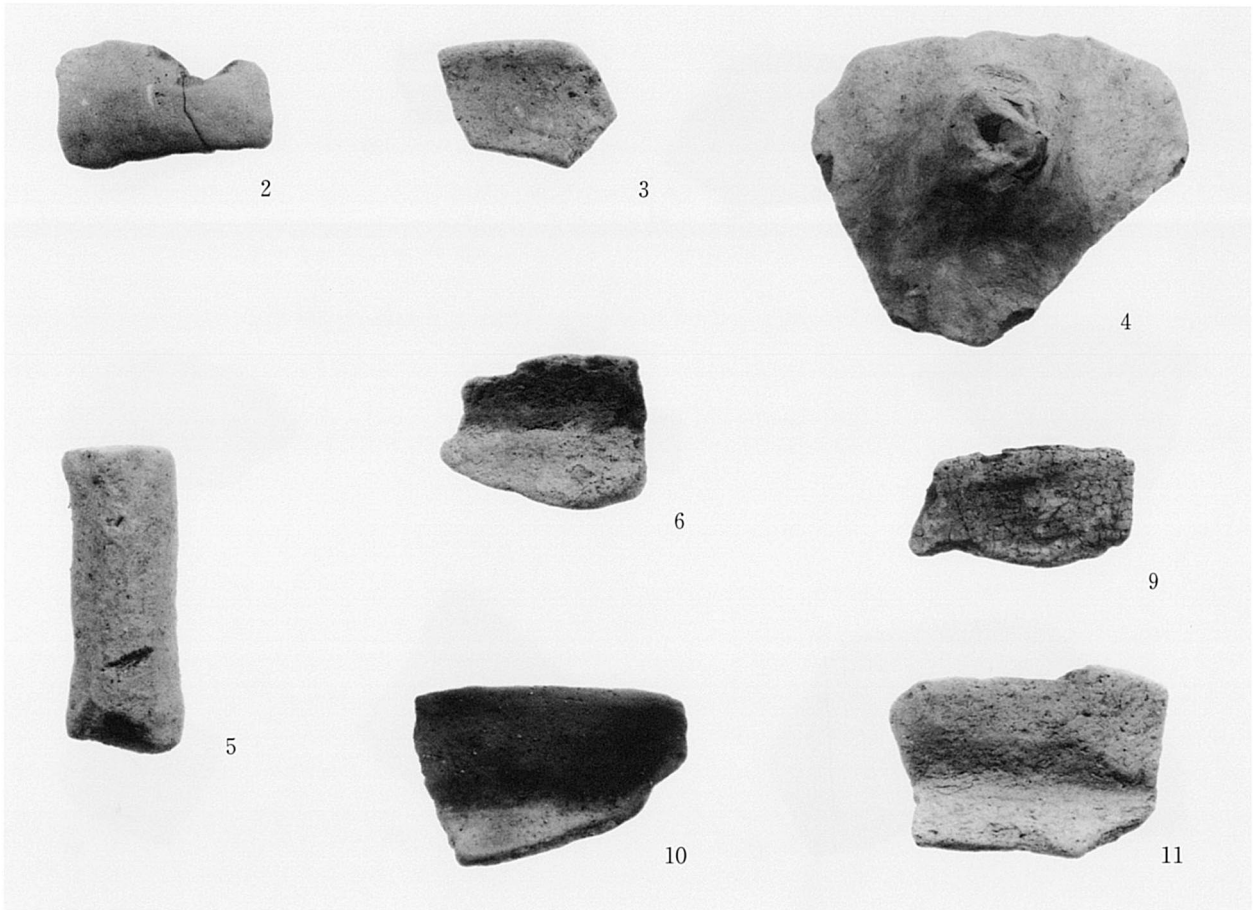
2. 寝屋4号線地区5区西半全景（南東から）



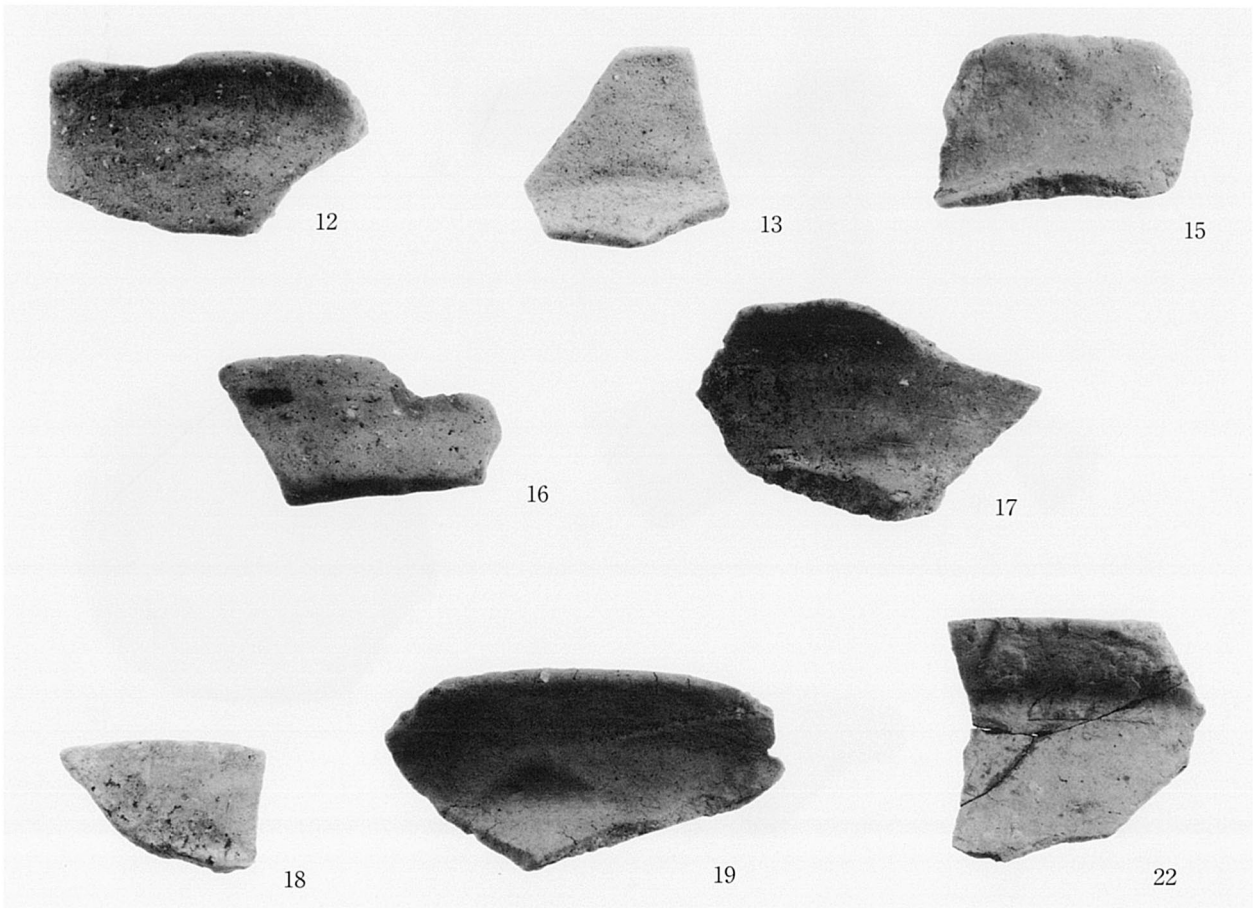
1. 寝屋4号線地区5区東半全景（南東から）



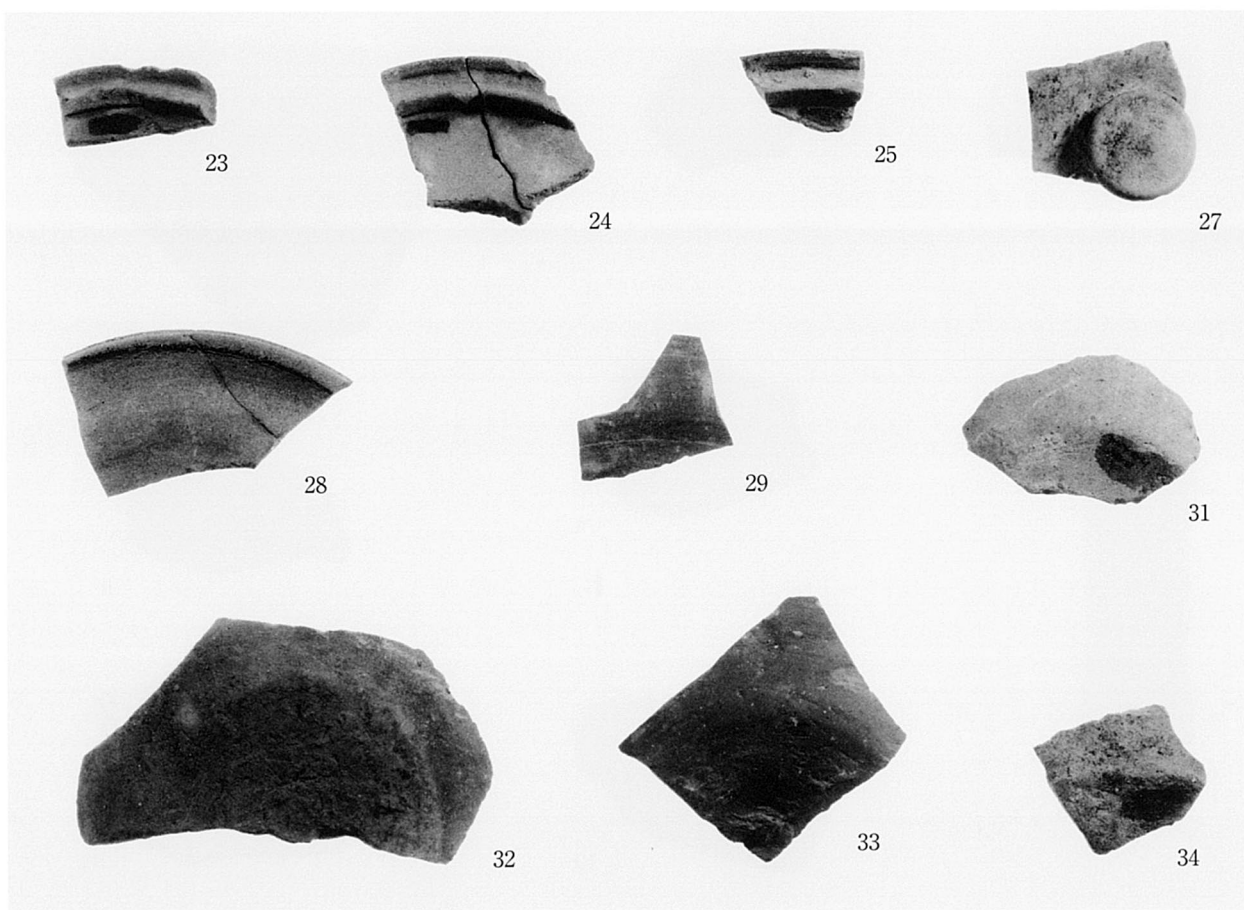
2. 寝屋4号線地区建物2検出状況（南から）



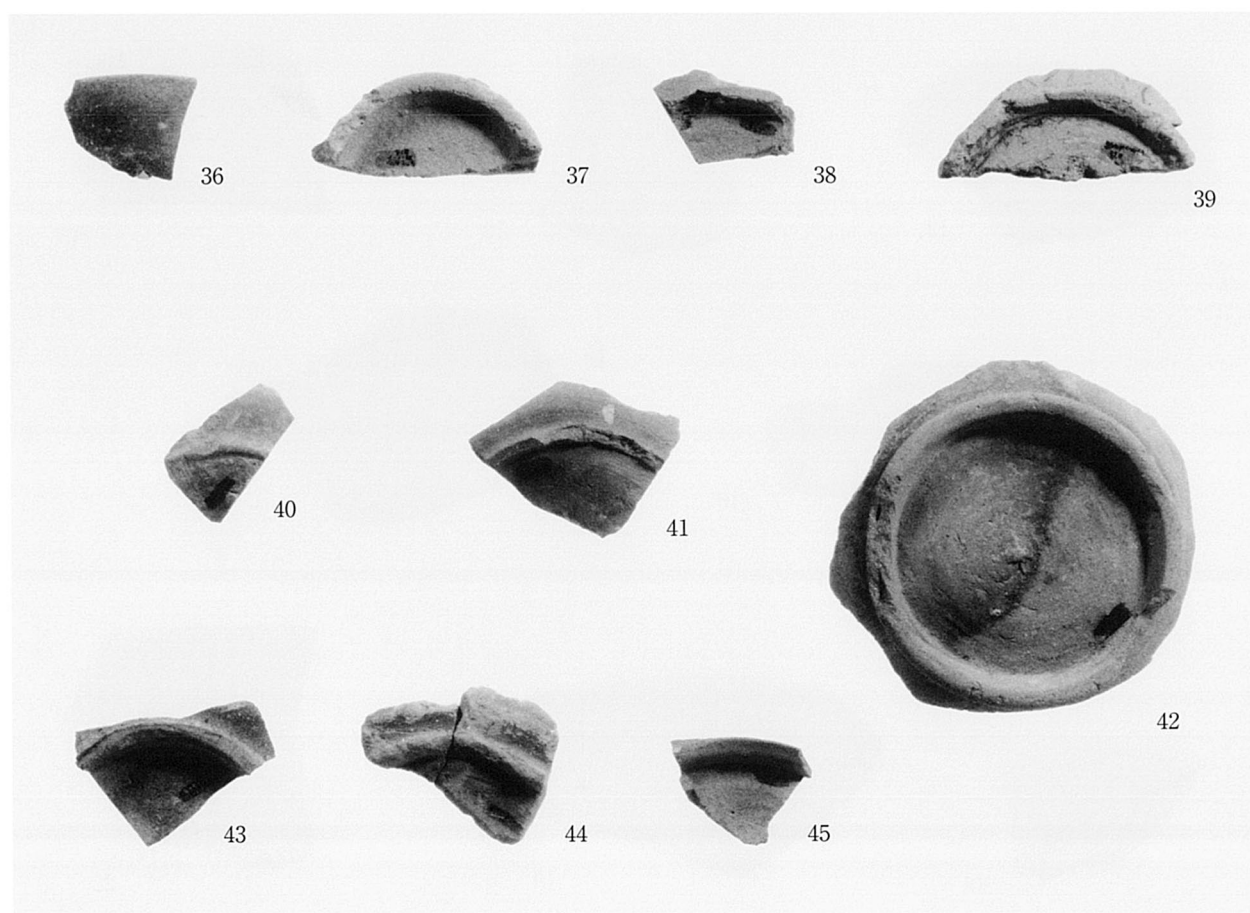
1. 図11



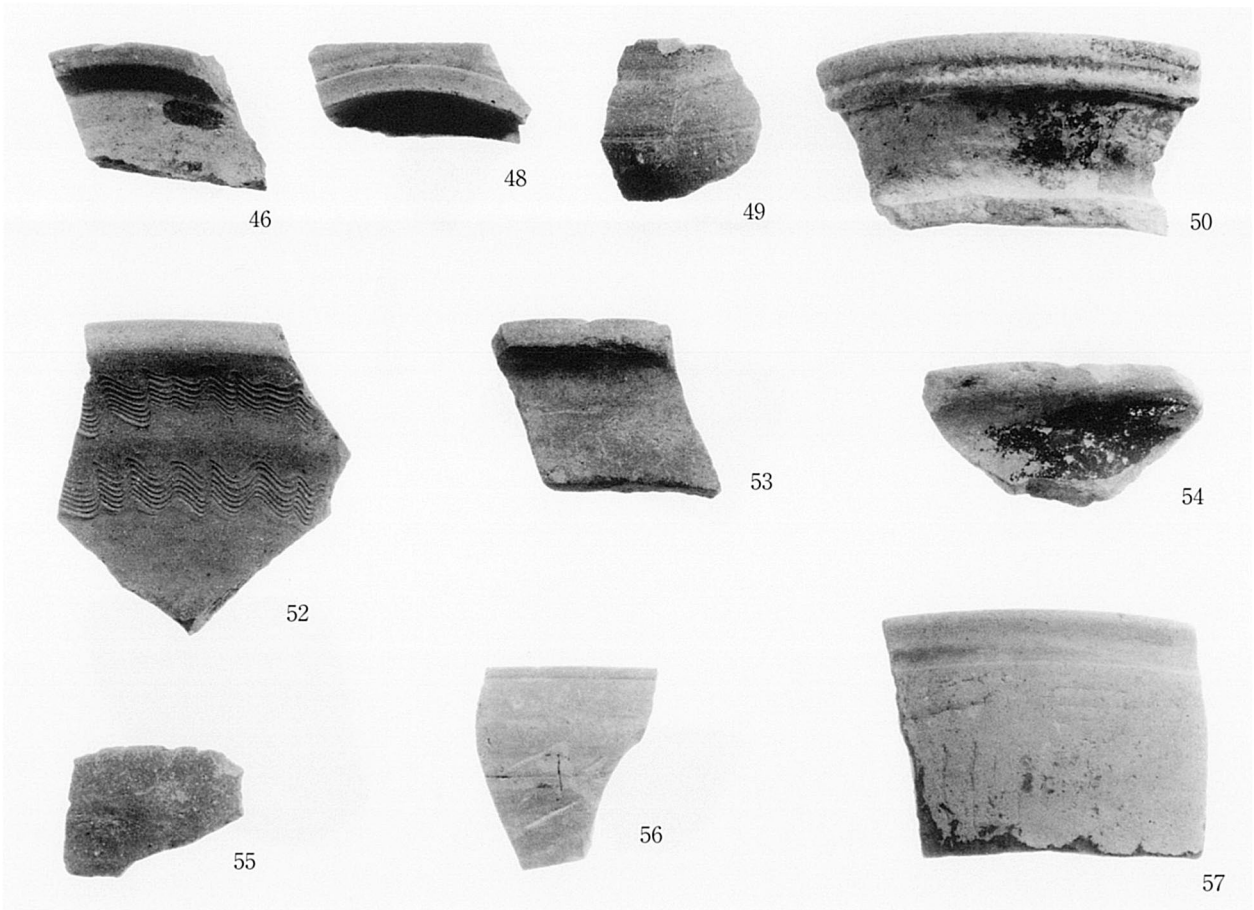
2. 図11・図12



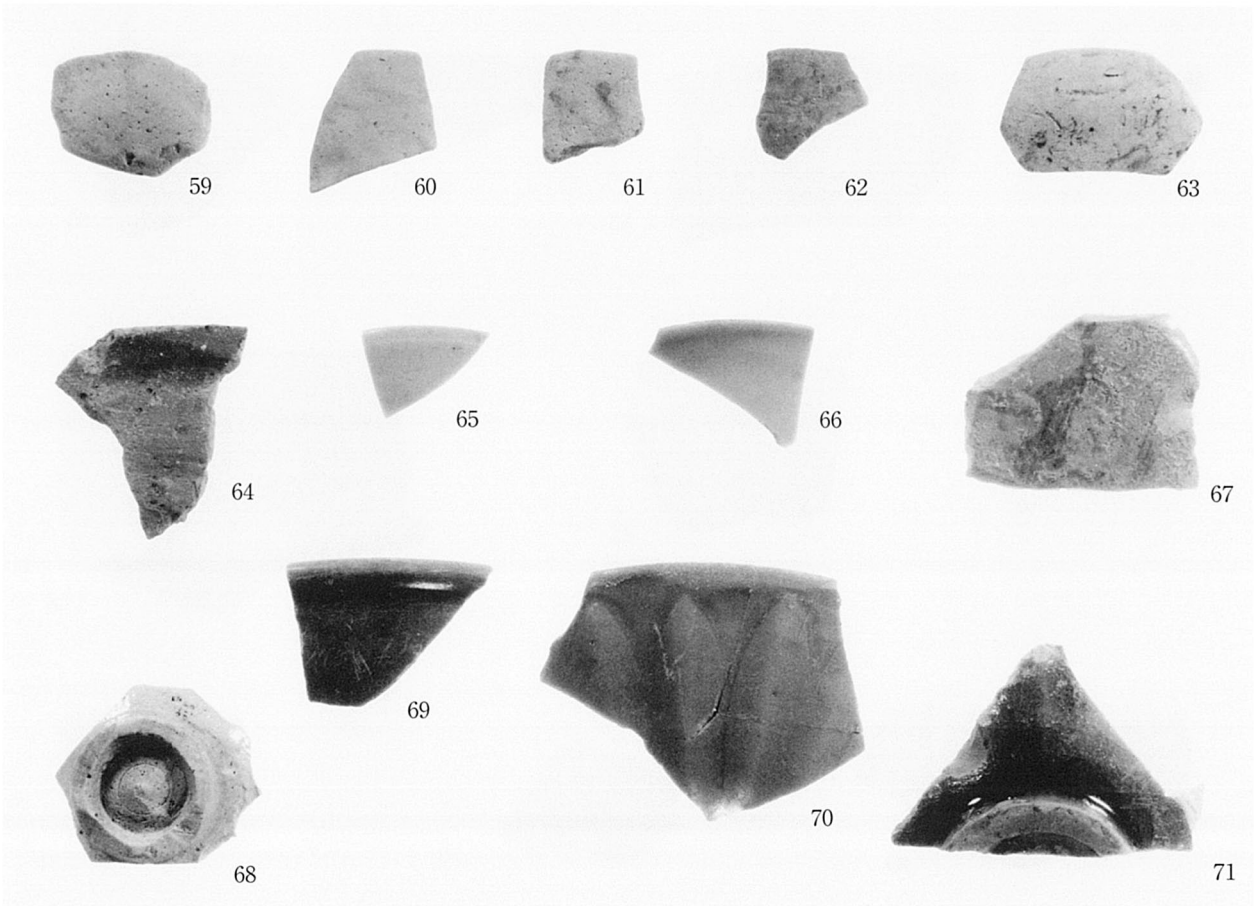
1. 图13



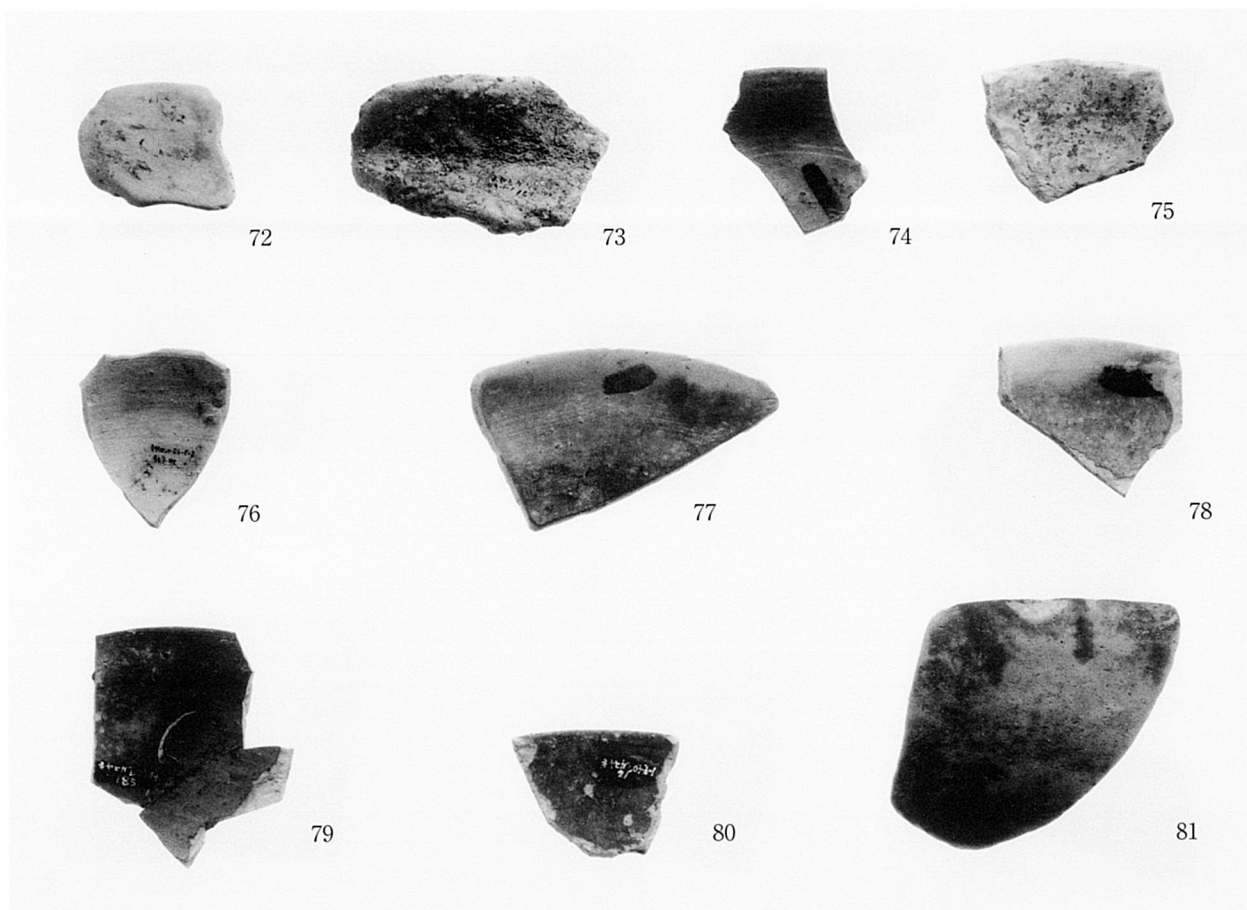
2. 图13



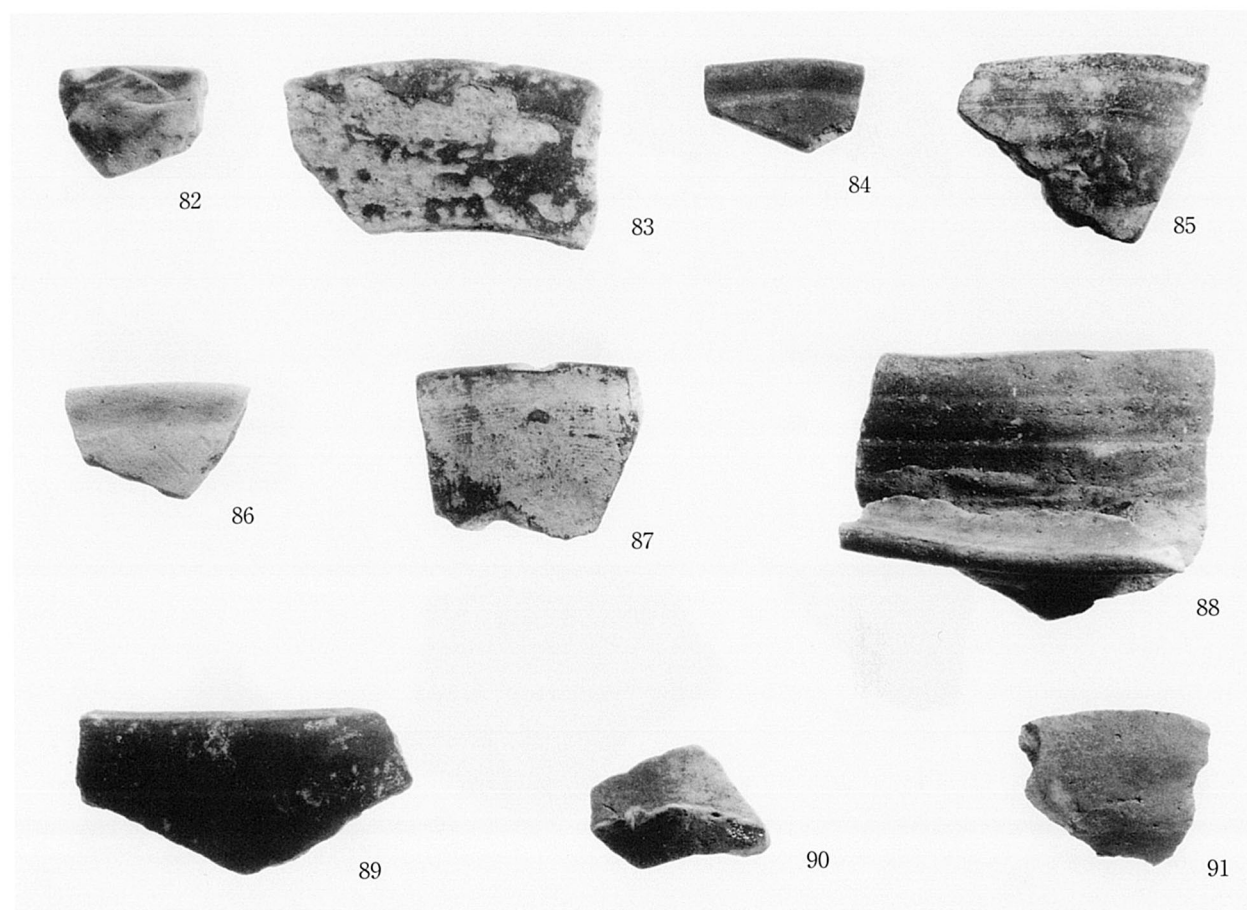
1. 图13



2. 图14



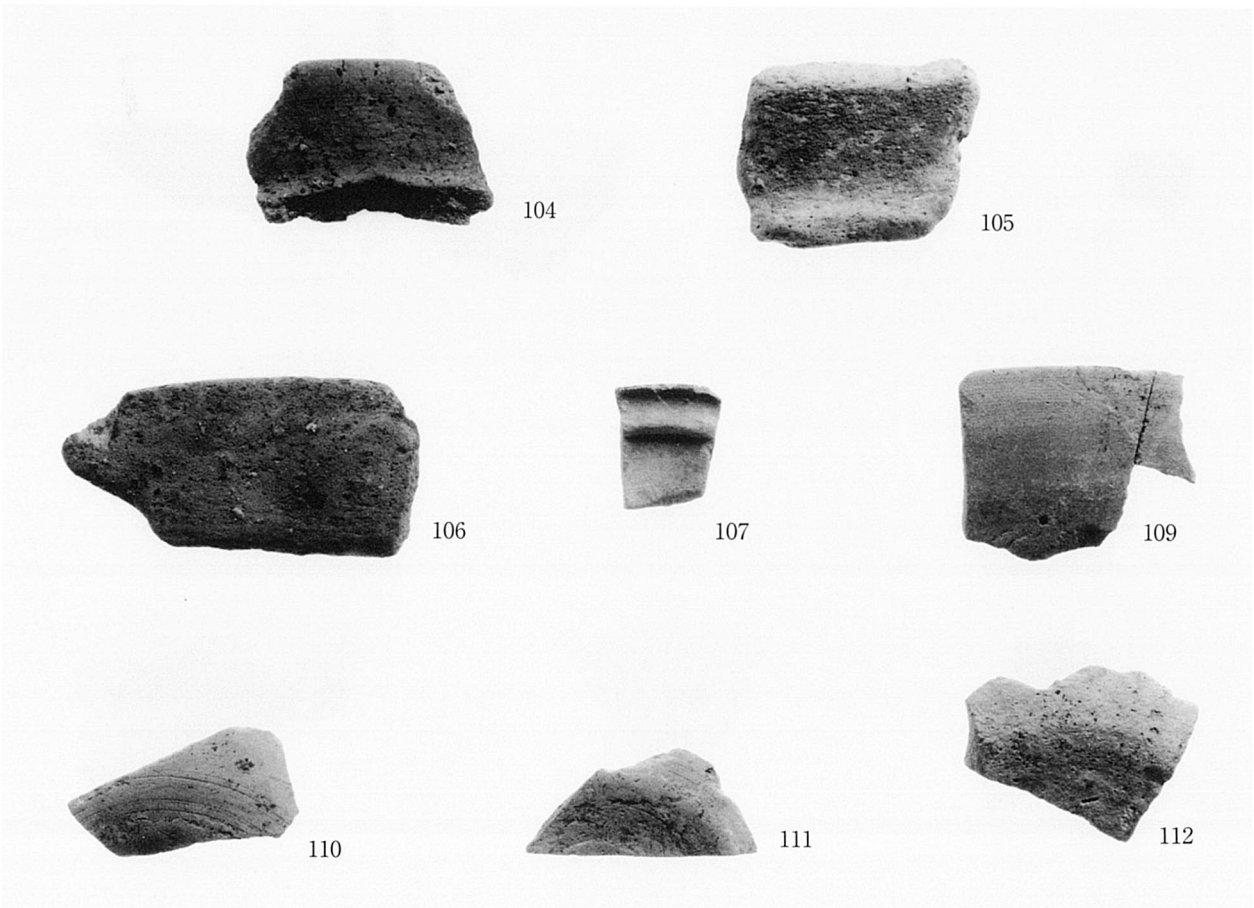
1. 图15



2. 图15



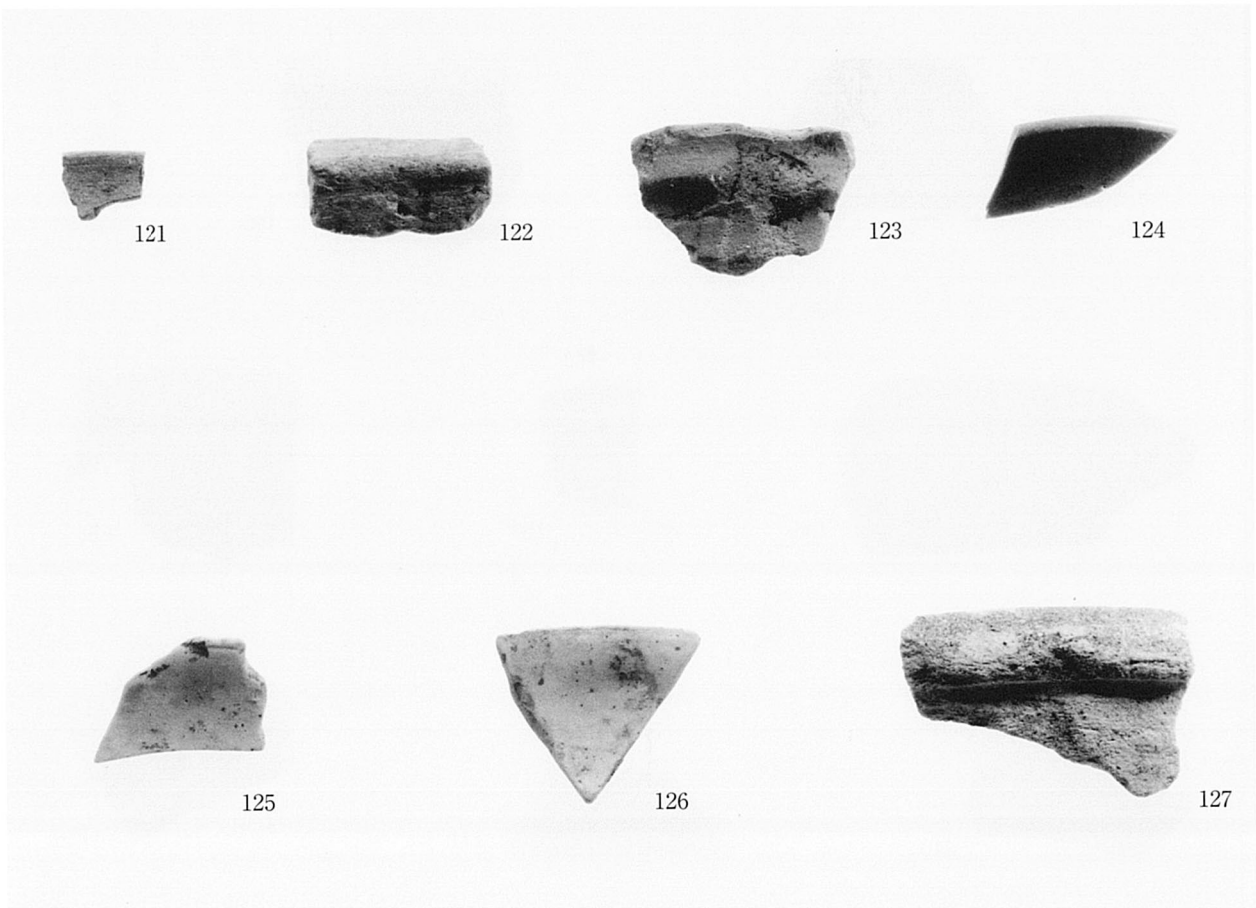
1. 图15



2. 图16

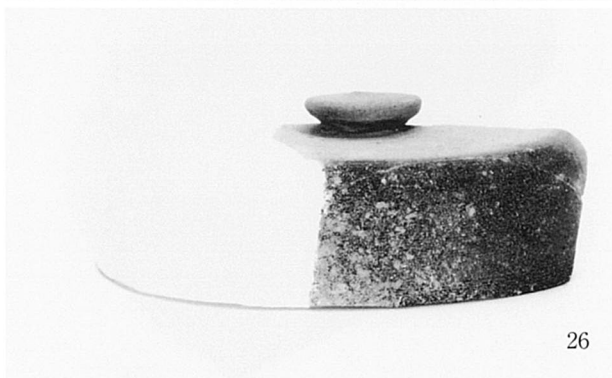
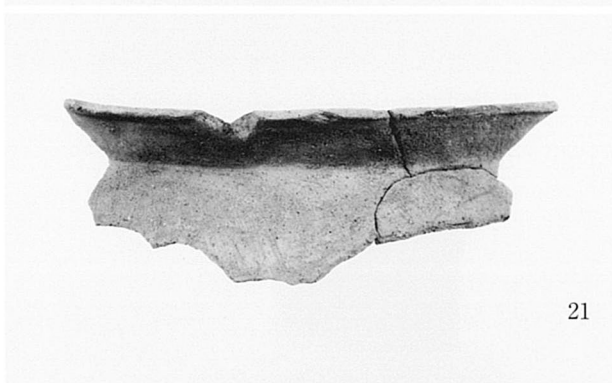


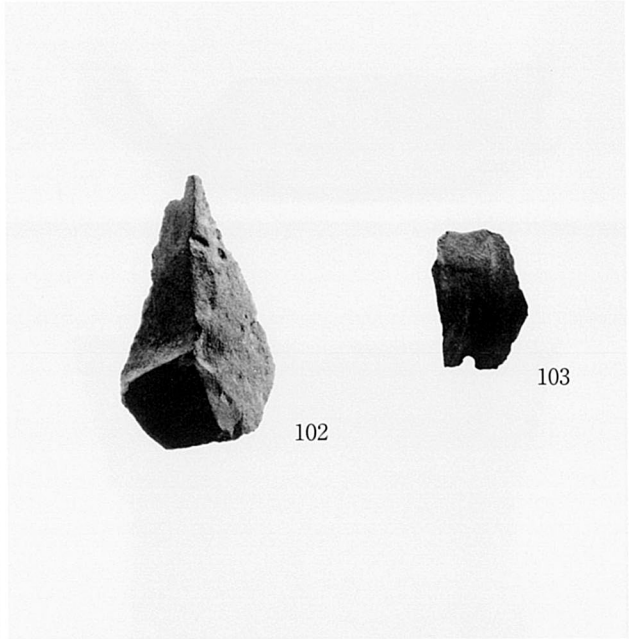
1. 图16·图17



2. 图17







報告書抄録

ふりがな	ねやひがしいせき							
書名	寝屋東遺跡Ⅱ							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第130集							
編著者名	平田 泰 青柳佳奈							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590 - 0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ねやひがしいせき 寝屋東遺跡	ねやがわし 寝屋川市 ねやちさき 寝屋地先	27215	24	34° 46' 12"	135° 39' 28"	20030514 ～ 20040319	6,694㎡	一般国道1号バイパス （大阪北道路）建設に 伴う
所収遺跡名	遺跡種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
寝屋東遺跡	集落跡	縄文時代 ～中世		建物・溝・ 土坑・落込み・ 旧谷地形		土師器・須恵器・ 瓦器・輸入陶磁器・ 陶器・瓦類		

（財）大阪府文化財センター調査報告書 第130集

寝屋東遺跡Ⅱ

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2005年3月31日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号